

---

# 妊婦の心得

サザビー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妊婦の心得

### 【Nコード】

N0611E

### 【作者名】

サザビー

### 【あらすじ】

桜も散りだした4月のある夜、菜々子は夫である瑞希に愛想を尽かし、愛娘の彩を連れ家を出た。

『アタシの苦勞も知らないで……』

一人残された瑞希は、翌日身体の異変を感じ病院に向うが……。

## プロローグ

『おい!? ……おいって、待てよ!』

『うっさいわね、この近所迷惑男! もうあんな家二度と帰らないから!』

女は、追ってくる男に向かって怒鳴りつけた。

ご近所様からみれば、お前の声のほうがよほど近所迷惑だろ、と男は思ったが、それは口には出さなかった。

時刻は夜の10時を回っている。閑静な住宅街。暗闇に反発するかのように灯る街灯の下で男女が言い争っている。

『菜々子っ! どこ行くっつんだよお前は!?!』

『あたしの勝手でしょ!?! 付いてこないでっ!』

『彩はどうすんだよ!?! まだ赤ん坊だろ? 連れ回したら可哀想だろ?』

菜々子はその言葉にぴくつと反応した。彼女は、まだ一歳に満たない赤ん坊を抱いている。男女の争う声、特に菜々子の大声で目を覚ましてしまったらしく、菜々子に負けず劣らずの大音量で泣いている。

『可哀想お? よくアンタがそんな事言えるわねえ!?! いつも飲み歩いて、ろくに面倒もみないくせに。そんな事言うんだったら、アンター人で育てる?』

『なっ?!』

男は色々言いたい事はあったが、少し躊躇ってしまった。

『……出来ないくせに。さあ、こんな口だけ男放っておいて、行きましよ。ねえ、彩ちゃん』

菜々子は彩に顔を向けながら歩きだした。その後ろ姿を見つめながら、男は苦虫を噛んだような表情で声を漏らした。『くっっ………勝手にしろっ』

見上げれば夜空は、男の心を映すかのように雲で覆われ、星ひとつ見えなかった。

## 1・彼への不満

『追って……来ないわね』

電柱の陰に隠れていたアタシは、ヒョコツと首を出して来た道を確認した。瑞希の姿はない。

とりあえずは諦めたみたいだ

家出をしてきたアタシは、旦那の瑞希が追って来ていないことを確認すると、安堵するとともに、少し複雑な心境になった。

『追って来ないのか……』

辺りを見回すと、見たことがあるような、ないような景色が広がっている。目の前には墓地があり気味が悪い。無我夢中で逃げてきたみたいで、どこを歩いてきたか覚えてない。

『さてと……』

何処に行こう？

勢いで家出して来ちゃったけど、我が家のあるこの町からウチの実家までは新幹線で一時間以上、そこから在来線で二時間の田舎町だ。今から向かっても時間的に辿り着けないし、お金もあまり持っていない。尚且つ、その問題が解決出来たとしても、最大の難関が待っている。父親という巨大な壁が。

『家出したって言って、あの親父が黙って入れてくれるわけないよなあ……。彩あ、どうしようかあ？』

彩は既に泣き止み、アタシの腕の中で静かに寝息をたてている。  
可愛い寝顔だ。

『こんなに可愛い……なのに、あの男は………いつもいつも飲み  
歩きやがってえ！』

瑞希に対する底知れぬ怒りが込み上がる。

『ふえっ………』

うげっ、マズイッ！ おー、よしよし………危ない危ない、興奮  
し過ぎて起こすトコだった。とりあえず、何処か落ち着ける場所  
に行かないと。

『………やっぱり香奈んトコ………かなあ？ ……ん？ シャレじゃあ  
ないよ』

まだ赤ん坊の彩に、意味のない弁解をしつつ携帯電話を取り出す。  
右腕に彩を抱き、左手で携帯電話を操作し香奈の番号を検索する。  
もうすぐ十一ヶ月の彩は片腕抱きでは結構重い。長時間の電話は命  
取りだ。

『こいつは短期決戦だね』

アタシは、独り言を呟きながら香奈の番号に発信し、携帯を耳に  
当てた。聞きなれた電子音が鼓膜を叩く。

1回………2回………3回………4回………。

早くっ、早く出なさい！

5回……6回……7回……8回……。

い、痛いっ。腕が痛いよお

プルルツガチャ。

やっと出た！ 危うく切っちゃうトコだったじゃない！

『ど、どうも』

(菜々子、どうしたの?)

『えーっと……今晚泊めてください』

(えっ? いきなり!? てゆうか今日?)

『男……紹介しますよ』

(……えっっ!? いいよ、いいよ、全然いいよ! すぐ来なさい!  
! ……あっ、でもちよっと片付けるから15分後に来て!)

『うん、ありがとう。じゃ、待ってて』

任務完了。

通話時間20秒。

男に飢え過ぎだよ、香奈。てゆうか、電話早く出る。腕がヤバかった。……いや、悪いのはアタシか。嘘つきのアタシを許して。

香奈は決してモテないわけじゃない。ルックスもいいし、高校時代は、色んな男と付き合っていた。ただ、長続きがしないのだ。必ず最後は香奈が振られる。あのがつつく性格が原因だろう。可愛い顔してるんだから、もう少し控えめにすればいいのに。まあ、おかげでアタシは宿が見つかったけど。

『とにかく行くこうか、彩』

彩は変わらず寝息をたてている。

でも、ここどこ？ 何か来たことあるような気がするけど……  
……ああ、そうか。ここは……。

アタシは薄い記憶を頼り歩きだした。

目の前の墓地をぐるりと反対側まで歩いたところに寺の入り口があった。門は既に閉まっている。門の上部には薄汚い分厚い木の板が掛かってあり、そこには「観恩寺」と書いてある。

あー、やっぱりココだ。歩いて来たことなかったからわからなかった。てことは……あつ、あつたあつた。

門の左手には地藏が何体もあり、その片隅にかなりでかい石が置いてあった。高さは160センチ位ありアタシの背と大体同じ位だ。

『コレコレ、懐かしいなあ』

大きな石のそばには小さな看板が立ててある。

「妊婦石」

『彩あ、この石に触るとね、赤ちゃんが出来るんだよ。アタシはなかなか出来なくて、何度も触りに来たんだよ。それからしばらくしてあなたが産まれた。……まあ偶然だと思っけどね』

無意識に石を撫でながら、昔に想いを巡らす。記憶の引き出しから5年前の瑞希が顔を出す。



アタシと瑞希は同じ会社の新人研修で知り合った。顔は女の子っぽい話してみると結構男らしくて、同期の女の子からは人気があった。アタシの事を好いてくれて、いつの間にか付き合いたしていた。

あの頃は楽しかったなあ。就職したばかりで忙しかったけど、一緒に遊びに行ったり、旅行にも行ったり……。

楽しかった日々が頭の中を駆け回る。

あの頃は優しかったよなあ。……いつからあんな風になったんだろ？ 子供がなかなか出来なかった時もココまで一緒に来てくれたのに……。

いつからか瑞希は口癖のように忙しいと言い、帰りが遅くなっていった。出産の時も病院には来ず、彩を初めて抱いたのは産後2日目だった。

……あの野郎お、彩が可愛くないのか?! 妊娠出産の苦労も知らないで、なにが『連れ回したら可哀想』だ! くっそっ! アイツにもあの苦労を味わせてやりたい!

憤りが腹の底から込み上げてくる。夜中に寺の前で叫びだすところを寸でるところで押さえ込んだ。

『ふっつ。深呼吸、深呼吸。……そろそろ行くつか、彩?』

石から手を離れたアタシは、彩を抱き直し、香奈の家に向かって

歩きだした。

## 2・浮気者

香奈の家があるマンションの前に着いたときには、深夜0時を回っていた。

この辺りは駅前である為、夜も遅いというのに、まだ人通りが多い。よく見るとサラリーマンや若者の酔っぱらいが目立つ。終電に間に合うのか駅に向う者、オール決定でカラオケボックスに入っていくグループ、同僚に見捨てられ泥酔してしまっているオヤジ。意味不明な叫び声をあげたり、陽気に大笑いしている者が行き交っている。

そんな連中が蠢く駅前通りでは、赤ん坊を抱いた女性はとても奇異的な存在だろう。酔っぱらいに絡まれやしないか、内心ビクビクしながら歩いてきた。

『菜々子!』

香奈はマンションのエントランスの前まで出てきてくれた。

『香奈、ゴメンね』

それまで気を張っていたアタシは、香奈の姿を見た途端、その場に跪いてしまった。

『ちょっと、菜々子、大丈夫?! とにかく部屋に行こ!』

香奈の部屋に着いたアタシは、煎れてもらったコーヒを飲み、リビングで一息つかせてもらっていた。彩は隣の寝室で眠っている。

20階建ての一室。3LDKのこの部屋は一人で住むには広すぎる位だ。駅前で都心からも近い高級マンションである。

香奈は若くして高級エステのオーナーだ。テーブルなども高そうだ。

『で、どうしたの、こんな夜中に？ 瑞希君は？』

『へっ？ ああ、アタシ家出したの』

『家出？ なんでもまた？』

アタシは事の経緯を説明した。

子供ができてからというもの瑞希の行動に家族への愛情が感じられない事は、香奈にも散々電話で話をしてきた。が、今日はそれどころではない。帰ってきた瑞希のスーツに女性用の香水の匂いと髪の毛が付いていたのだ。

仕事だ仕事だと言いつつ、結局のところは浮気なのだ。

飲み歩くだけでは足らず、家族を裏切り、自己の欲望のみを求め続ける不屈き者だ。簡単には許してやらない。アタシは固く心に決めていた。

『……ふーん。要は、早とちりかもしれないのに、瑞希君の弁論も聴かず、彩ちゃんを巻き添えにして逃げてきたわけだ？』

『……へっ？！ な、何言ってるのよ！！ だって』

『シッ！ 彩ちゃん起きちゃうよ？』

『うぐつつ。……弁解の余地なんてないでしょ？ スーツに髪の毛よ？ 香水よ？』

『香水に髪の毛……って、電車乗ってればそれ位付くんじゃない？』  
『ん？ ……うーん？ ……あっ！』

確かにその通りである。

今、自分が最高のアホ面をしてるであろう事は、香奈の笑い顔を

見れば明白だった。

『今日はもう遅いから、明日にでも家に帰って仲直りしなさい。いま瑞希君に電話してきてあげるから。』

『えーっ!？ アタシが謝るの!？』

『彩ちゃんが可哀想でしょ?』

『……どーもすみません』

『はい、わかったらさっさと寝る準備しなさい。あ、男紹介する件はよろしくねー』

(……どーもすみません)

『ん? どーしたの?』

『えっ? なんでもないよ。わかった』

専業主婦のアタシに男友達なんているわけないじゃん。どーすっかなあ? 瑞希の友達にめぼしいのいるかな? 香奈に釣り合いのとれる男なんていないよなあ

香奈は早速瑞希に連絡をしてくれた。明日は10時位に家に戻る事となった。

飲み歩く件は譲れないけど、浮気に関しては確かにアタシも早合点だった。

明日は最高の笑顔で帰ってあげよう。

香奈に敷いてもらった客用の布団に潜り込む。陽の匂いがアタシを包む。隣には瞼を閉じた天使寝顔があった。

今日は連れ回しちゃってゴメンね。明日おうちに帰ろうね。

内心ホッとしていた。このまま瑞希と別れるなんて事になったらどうしようと思っていた。

自分が謝らなければならないにしろ、仲直りが出来る事が嬉しかった。

アタシの心は、数時間前の苛立ちが嘘のように消え、逆に小踊りしたくなるくらい有頂天だった。

早く瑞希に会いたいなあ。

遠足前夜のような昂揚感が睡魔を妨げ、なかなか眠りにつけなかった。ようやく意識が遠退いた時には、外に白みが射していた。

香奈に叩き起こされたのは午前7時。

彩は既に起きて、香奈からミルクを飲ませてもらっていた。見たことのない哺乳瓶だ。

『……ゴメン、有難う。それ、どうしたの？』

『ん？ ああ、コレ？ マザーズバックには哺乳瓶入ってなかったからね。アンタの性格上、こんな事もあるつかと用意していたのよ』  
『ゲッ！ ホントに？』

本当だった。持ってきたマザーズバックには哺乳瓶どころかミルクすら入っていなかった。ケンカして勢いでそのまま出てきてしまったから、何も用意してなかったのだ。

『ご飯テーブルに用意したから食べなさい。大したものないけど』

『ホントに有難うございますだ』

『はよ食べや』

テーブルにはハムエッグに和風サラダ、味噌汁、納豆など、至れ

り尽くせりな料理が置かれていた。アタシは有り難く戴いた。

しかし、香奈は本当に気が利く人間だ。昔からクラスメイトなどから人気があった。だが、付き合った男とは、不思議とうまくいかない。付き合った男達から話を聞く等という野暮な事はしたことがないので、理由は未だに不明だが。本人に聞いても、振られたとしか言わないし。

『食べたらさっさと支度して、早く帰りなさいね。もう家出しちゃダメだよ』

『はい』

食事の後シャワーを借り、念入りに化粧をした。まるで初デートの時のように。

瑞希、怒ってるかなあ？ 心配してるよな。許してくれるかなあ？

9時過ぎに香奈の部屋を出た。

外はあいにく雨が降っていたので、香奈に車で自宅マンションまで送ってもらった。

『何から何まで有難う』

『いいよ。彩ちゃん風邪引いちゃうから早く入んな。仲直り出来たら電話してね』

『うん、有難う。じゃね』

香奈の車を出たアタシはマンションに入ってしまった。

香奈のマンションに比べれば月とスッポンだが、彩が生まれる2年前に買ったまだまだ新しいマンションだ。入居世帯数は40ほど。そんなに大きくないが、アタシたちの城だ。

303号室に来たアタシは、鍵を開け、ドアを開けた。

『瑞希ー！ 昨日はごめんね！ 帰ったよー！』

中に入り玄関で靴を脱ぐ。

廊下を進むと右側にドアがある。瑞希の書斎だ。

『瑞希？』

書斎に瑞希はいなかった。

トイレかな？

書斎を出て向かいのドアをノックする。返事はない。

浴室からも音はしないのでシャワーでもない。

廊下を進みリビングへ。そこにも瑞希はいなかった。

キッチンにも姿がない。

『瑞希い？』

おかしい。

帰りは10時と約束していたはずである。

まさか、まだ寝てる？

少しイラっとしてきた。

彩はそれを感じ取ったのか、少しぐずり始めていた。

寝室はリビングに隣接している。寝室の前まで来たアタシは勢い良くドアを開けた。



『瑞希！ まだ寝てるの！？』

ベッドの上には布団が被さっている。

まだ寝てやがるな、この野郎お。せつかく人が謝りに帰ってきて  
やったのに……。

『早く起きろ！！』

アタシは布団をひっぺがし、瑞希を叩き起こしにかかった。

『あれ？』

布団には誰もいなかった。

彩が泣き出す。その時、リビングの方で物音がした。

『瑞希？』

急いでリビングに戻ったアタシが目にしたのは、髪の毛長い女の後ろ姿だった。彼女は廊下を走っていた。玄関のドアを開けると、逃げるように外へ飛び出した。

『は？』

しばらく呆然としていたアタシは、彩の泣き声で我に帰った。

『……ああ、ゴメンゴメン。おーよしよし』

彩をあやす声が他人のものに聞こえる。

誰だ、あの女は？ 瑞希は？ 部屋間違えた？

彩をあやしなからリビングを見回す。そこには見慣れた家具がキレイに並んでいる。

寝室に戻ったアタシは、ベッドに腰をかけた。よくみると、所々に髪の毛が落ちている。親指と人差し指で一本拾い上げたそれは明るい茶色。瑞希も明るい茶色だがもっと短い。せいぜい耳にかかる程度だから20センチ程の長さだ。これは50センチ以上ある。アタシは背中まであるから大体同じ長さだが、色は黒だ。

……………と、いうことは？

『……………瑞希いい！ やっぱり浮気かあああ！』

### 3・体調不良？

まだ少し肌寒い4月。

世間では新社会人という言葉で一括りにされた若者達が、すぐに壊されてしまうであろう夢や希望というガラス細工のような儂い想いを胸に、瞳を輝かせながら働き始める時期だ。

先日降った雨は止んでいたが、今にも涙を落としそうな雲は遠くまで広がっている。少し風が強い。

勤め始めて5年になる職場の新人歓迎会に出席した俺は、一次会でそそくさと退散、帰宅の途についていた。

最近は営業とはいうものの飲みが多く、妻である菜々子はかなりご立腹だ。別に好きで参加している飲み会でもないのに、それが原因でケンカになるのも馬鹿らしいので早めに帰ってきたのだ。

すでに酔いは醒め、春とはいえスーツ一つではまだ寒い。薄手のコートでもあればよいが、そんなものは持ってない。去年、娘が生まれ、それ以来自分の服など買ってない。買ってもらえないのではなく、買ってないのだ。もとより安月給の身である。少しでも節約しなければ、妻子を養う事などできやしない。年収を少しでも上げ、彼女達に何不自由ない生活をさせてあげたい。その為に、行きたくもない接待などに参加し、休日出勤などもして頑張っているんだ。

そんな想いとは逆に、妻の菜々子とはケンカが絶えない。出産の時に立ち会わなかった、子供の面倒をあまり見ない、頻繁に飲む。端からみれば俺が悪いと言われるだろうけど、俺は彼女達を養うために仕事を優先しなければいけないんだ。

そんな事を考えながら、自宅近くの桜並木を通りかかる。先日の雨で桜の花はかなり散っていた。

今週で全部散っちゃうな。

最近は仕事仕事で、家族で出かけることなんてなかった。花見く  
らい行つとけば良かった。風に揺れる桜の木を前にした俺はちよっ  
とした悲しみに襲われた。

桜の木を眺めていた俺は、しばらくして歩き始めた。急に家族が  
恋しくなり、その歩みは早かった。

自宅マンションに着いたのは9時半過ぎ。家に入ると菜々子が出  
迎えた。娘の彩は眠っているようだ。

『遅かったね？ 残業？』

『あれ、言つてなかったっけ？ 今日は新人歓迎会だよ』

『……聞いてないけど』

また始まったか。痴呆か？ 言つたつっの。

『おかしいなあ、言つてなかった？ ゴメンな』

こういう場合はこっちが負けて、素直に謝つちまうほうがいい。  
菜々子は、まあいいけど、と言いながら俺が脱いだ上着を受け取  
ると怪訝な顔をした。

『ん？ どうした？』

『………浮気してるでしょ?!』

『はあ?』

コイツはいきなり何を言いだすんだ。

『とばけんな！ 香水の匂い！ これは女物でしょ!! あとコレ  
！ 長い髪の毛!』

『えっ？ つーかそんなの 』 満員電車乗りゃいくらでも付く  
だろうが……。

『うるさい！！ もう頭に来た！ こんな家出ていってやる！』  
『はあ〜？』

なんだなんだ？

香水？

髪の毛？

一体いつ付いたのか。

答えはすぐに見つかった。

歓迎会に出席していた新人の女の子が終始くっついて離れなかつたのを思い出した。腕とか組んできて、多分その時に付いたのだ。

『おい待ててっ！』

『うるさい！ 頻繁に飲みに行くと思ったら浮気とはね』

『浮気なんかしてねえって！ 飲みだって行きたくて行ってるわけ  
じゃないって言ってるだろ！』

『どうだかね。接待とか言っつて、浮気してたんでしょ！』

『違っつて！』

『うるさい！』

全く聞く耳を持っていない。

素早く身支度を済ませた菜々子は、眠っている彩を抱き抱え、外  
へ出ていく。

3階に停まっていたエレベータに素早く乗り込んだ菜々子は、俺  
を置いて1階まで下がっていつてしまった。

俺は階段を駆け下りたが、エントランスに来たときには菜々子は  
マンションを出ていた。

急いでマンションから飛び出すと、菜々子は数メートルほど先を歩いていた。

『おい！？ おいつて、待てよ！』

『うっさいわね、この近所迷惑男！ もうあんな家二度と帰らないから！』

お前の声のほうがよほど近所迷惑だろ、と思ったが、それは口には出さない。

火に油を注ぐだけだ。

『菜々子！ どこ行くっつんだよお前は！？』

『あたしの勝手でしょ！？ 付いてこないでっ！』

『彩はどうすんだよ！？ まだ赤ん坊だろ？ 連れ回したら可哀想だろ？』

彩は目を覚まして泣きだしていた。

『可哀想お？ よくアンタがそんな事言えるわねえ！？ いつも飲み歩いて、ろくに面倒もみないくせに。そんな事言っただったら、アンター一人で育てる？』  
『なっ？！』

コイツ、人の気も知らないで……。

『……出来ないくせに。さあ、こんな口だけ男放っておいて、行きましよ。ねえ、彩ちゃん。』

菜々子は彩に顔を向けながら歩きだした。

俺は、今は何を言っても無駄だと思い、もう追いかけるのをやめ

た。

『くっ……勝手にしろっ』

菜々子を連れ帰る事が出来なかった俺は、自宅に戻り私服に着替えた。ネクタイをハンガーに掛ける際に、今日の争いの原因となった香水付きスーツに鼻を近付ける。

『うわっ、くっさ……』

結構匂う。これは臭いと言われても仕方がないかもしれない。

……でもまさか、こんな事が出ていくなんて。

3年前に買った2LDKのマンションは、一人で過ごすには寂しさを覚える広さだ。只でさえ帰りの桜並木で家族が恋しくなっていたのに……。

……隼人でも呼ぶか。

隼人は小学校からの友人で、今でもたまに飲んだりする仲だ。

彼は薬学部のある6年制の大学を卒業し、製薬メーカーでMR（医薬情報担当者）として働いていたが、営業先の医者共に媚売るのがバカらしくなったと言って転職し、今は別の製薬メーカーで新薬を研究、開発に携わっている。

会う度に俺に新薬を勧めてくるのはやめてほしいが、思いやりのあるいいヤツだ。

早速電話をしてみると通話中だった。少し待ってまたかけるかと思っただ直後に携帯電話が鳴った。隼人からだ。

『もしもし』

『おう、瑞希か?! 今お前電話したか?』

『ああ、今日飲まないか?』

『あれ、いいのかこんな時間に? 菜々ちゃんと彩ちゃんはどつしたんだよ?』

『菜々は家出したよ。彩も連れていった』

『は? マジで? 探さなくていいのか?』

『引き止めようとしたけどダメだったよ。何処行ったかは大体見当がついてるけど、あの様子じゃ今日連れ戻すのは難しいから、明日行ってみようと思ってる』

そう。

菜々子は多分香奈のところだろう。

地方から出てきて、こっちにあまり友人のいない菜々子は、何かというと同郷の香奈と連絡を取り合っている。

『ふーん。ならいいが、どうしたんだよ? またケンカか?』

『ああ、まあそんなトコだ。どうだ、飲みにいかないか?』

『悪い、今は仕事ですぐに帰れそうにないんだ。明日また連絡する』

『あ……そうなんだ。わかった。じゃまた明日な』

『ああ、菜々ちゃん達いなくても元気だせよ! じゃあな!』

電話を切った俺は他に当たろうと思ったが、急に身体が寒気に襲われ、携帯をテーブルに置いた。怠さもあつた。

『なんだ? 寒いな……。風呂入って寝るか』

風呂は、俺が帰ってくる直前に菜々子が沸かしていて、保温状態になっていた。



早速シャワーを浴び湯船に浸る。かなり長時間暖まる事が出る頃には寒気はなくなっていたが、怠さはまだ続いていた。

髪を乾かしていた時、テーブルに置いておいた携帯が鳴った。

隼人か？

携帯を手に取ると、ディスプレイには「香奈」の文字が浮かんでいる。

『もしもし』

(あ、瑞希君？ 香奈ですけど。遅くにゴメンね)

『いや、大丈夫だよ。どうしたの？』

(今ウチに菜々子が来てるんだけど……)

やっぱり。

菜々子は香奈の家に行っていた。香奈は菜々子の状況を細かく教えてくれた。

(……というわけで、菜々子も反省してるみたいだから。明日朝家まで送るから、仲直りしてね)

『わかりました。なんか色々迷惑かけてゴメンね。有難う。じゃ、明日待ってます。おやすみなさい。』

電話を切ると、俺はソファに座りこんだ。

良かった。

安心した。

香奈の家に行くと思ってはいたが、夜も遅かったので結構心配し

ていたのだ。

今日は一方的に家出されたが、自分も反省しなくちゃいけないところはある。

明日は料理でも作ってやろう。カレーしか作れないが……でも菜々子にはかなり評判がいい。

さて、寝るか。

ソファから立ち上がり寝室に向う。

寒気がまだあったので、クローゼット奥に詰め込まれた掛け布団を取出した。

ベッドに入ると菜々子達が無事だった安堵感からか急激に眠くなり、すぐに意識が遠退いた。

気が付くと朝を迎えていた。時計を見るともう9時前。大分深く眠っていたのか夢も見なかった。

寒気は全く感じなくなっていたが、身体の怠さはまだ残っている。

風邪でも引いたか？

体温計を取りに洗面所に向かう。

なんだか頭も重い。

洗面所に辿り着くと洗面台下にある引き出しを探した。一番下の段を開ける為、少し屈んだ時だった。

……ん？　なんだ？

屈む瞬間、何か鏡に写った気がした。女性のような……。

ま、まさかな？ 気のせいだよ。風邪のせいだ。

恐る恐る顔を上げ洗面台の上にある鏡を見上げる。しかし、まだしゃがんでいるためよく見えない。

た、立つか……立ってみるか………？

恐る恐る、これ以上ないという位に慎重に立ち上がる。

『……………あっ?!』

鏡の中には確かに女性が立っていた。

彼女は驚き立ちすくんでいたが、口を開き声を漏らした。

『お、俺……………か?』

鏡の女性は俺自身だった。

## 4・逃走

目の前の鏡には女性が一人。彼女以外は誰も写っていない。彼女は驚きに満ち溢れた表情で小さく呟いた。

『お、俺……………か?』

鏡に映し出された女性は、俺自身だった。

確かに昔から女に間違われる事もあった。

顔は小さく、目は大きい。髪は直毛で、伸ばすと完全に女だと隼人に笑われたこともある。だが、洗面台の鏡越しに見た自分の姿は女そのものである。髪は長く背中まであり、胸も男のそれとは思えない程ふっくらしている。顔つきも、パーツひとつひとつは前と変わりないが、どことなく柔らかな感じで女っぽい。

『……………ははっ……………冗談だろ?』

誰に言つてもなく呟く。鏡の中の女性も同時に口を開いていた。化け物でも見るかのような表情で……………。

恐る恐る下半身に目をやる。顔に似合わず結構なモノだと自他共に認める男の象徴を確認する。いつもなら下着越しからでもその存在を主張している物体が見当たらない。

『げっ……………』

視覚の次は触覚で確かめる。やはり寂しい感覚が指先を伝ってきた。

な、なんだ? ……なんなんだ?! ワケわからん。どういうん

だコレ？ えっ？ ……えっ？！

なんかよくわからなくなってきた。

胸も、服を脱いで確かめた。通常であれば、鼻血を垂らして悦んでしまう程の形の良い山が二つ、仲良く並んでいる。 やっぱり…

………ありやがったかあ………。

スネも確かめる。

スネ毛が………ない。

脇も確かめる。

脇毛は………健在だった。

………そりゃ、あるよな、女にも………。

鏡に写る身体を見つめる。見れば見るほど混乱してくる。

………お、落ち着け、落ち着くんだ、瑞希。 ……深呼吸………そうだ、

深呼吸だ、深呼吸。

『スー、ハー、スー、ハー………』

ラジオ体操の模範演技のような大きな動作で深呼吸をして気持ちを落ち着かせ、改めて鏡を見た。

見れば見るほど女だ。そうか………俺は女だったのか………い、いやっ男だっ！

でもなんでこんな事に？

とにかくこれからどうすれば………？ 少しでも落ち着きを取り戻した思考力を問題解決に差し向ける。昔読んだ漫画に、お湯をかける男に、水をかけると女になってしまう主人公がいたと思い出し、シャワーを浴びてみた。………ダメだ、女のままだ。

病気かもしれないと、「家庭の医学」を本棚から取出し調べてみた。……そんな病気見つからない。あるわけない。

……寝れば……治るんだろ？

現実逃避という名の魔物に与えられた、現在考え得る最高の名案を実行に移すべく寝室に向かう。途中で時計を見た。9時半を過ぎている。

なっ、もう9時半！？ 菜々子が帰ってくるじゃんか！

こんな状態では会えない。よくわからないが、何か嫌な予感がある。

に、逃げなくては……。

何故だかわからないが、そう思った。

急いで服を着る。体系も小さくなつたのか、自分の服が大きく感じる。何か今の自分に合うサイズの服がないかタンスを漁ると、菜々子の服が出てきた。

『……き、着るか……？』

人間切羽詰ると勢いで何でも出来るものだ。少し気が引けたが、菜々子の服を拝借する事にした。

先にジーンズに足を通す。足は通るが、お尻が入らない。

トランクスじゃ嵩張ってダメか？ ブリーフ？ ……持ってない。

……仕方がない……か。

恐る恐る菜々子の下着に手を伸ばす。  
丸められ綺麗に並んだパンティのひとつを手に取り……………穿いた。

ぐっ……………すごいフィット感だ。

これをクリアすると、もうなんでも来いになってきた。  
ブラジャーを手にし……………着ける。が、結構キツイのですぐ外した。  
Ｔシャツを着て、ジーンズを穿く。お尻はまだ窮屈だったが、とりあえず入った。

菜々子のヤツ、胸もお尻も小さいんだな……………。

心で軽い毒を吐きながら黒いパーカーを着て、鏡の前に立ってみた。案外似合っている。

『へ〜〜、結構似合うなあ』

菜々子のカバンも拝借し、財布と携帯電話を中に詰め込んだ。  
その時、玄関で物音がした。鍵を開ける音だ。

ヤバイ！ 菜々子だっ！

咄嗟にダイニングテーブルの下に身を隠す。

『瑞希ー！ 昨日はごめんね！ 帰ったよー！』

菜々子の声がある。彼女は書斎やトイレなど、あちこち回り俺を探している。

『瑞希い？』

リビングに来た菜々子は、そこにも俺がいないと見ると寝室のドアを勢いよく開けた。

『瑞希！ まだ寝てるの！？』

寝てねーよ。

『早く起きろ！』と布団をひつぺがす菜々子。

寝てねーっの。

『あれ？』

彩が泣き出した。

今だ！

俺は勢い良くテーブルの下から抜け出し、一目散に玄関に走り出した。

『瑞希？』

呆気なく見つかった。が、振り向いている暇などない。よくよく考えれば、逃げる必要など全く皆無だったかもしれない。突然の身体の変化に心が取り乱し、判断力が著しく低下してしまった結果なのかもしれない。何はともあれ、もう後には引けないのだ。俺は無断で菜々子の服（+下着）を身に着けてしまった事で、待ち構えているであろう菜々子の怒りに恐怖し、その場から逃げ出した。



菜々子の脅威から逃れた俺は、同マンションの6階の非常階段にいた。もし菜々子が追い掛けてきたきたとしても、ここなら見つかることはまずないと思った。

大抵の人間は、マンション等の建物の一室から逃げる場合、必ずその建物自体から離れる。逃げなければならぬ対象がその建物にいるとわかつているのに同じ建物に身を隠す事はまずありえない。部屋を出たあと向かう方向は1階だ。が、俺はその考えとは逆の行動をした。先の考えでいくならば、追い掛けてくる者も、追跡対象は必ず1階に降りるとみるはずだからだ。まして菜々子は、このマンションに住んでからというもの、3階より上層階に行ったことがない。アイツは絶対に6階にはこない。これは弱き者の生き残るための知恵だった。

しかし、身体は相変わらず怠い。少し吐き気もする。俺は非常階段に腰を下ろし、階下の様子に耳を傾けながら、これからどうするか思索を練った。

まずはこの身体を元に戻さなくては。でもどうやって……？ お湯も効かないし、やっぱり病気か？ 何はともあれ、一先ずどこかで休まなくては。

その時携帯電話が鳴った。

『なつ、菜々子か?!』

発進通知には隼人の名前が映っていた。

よし、一先ず隼人に相談して策を練るか。

『はい』

(もしもし、……あれ?)

受話器の向こうから「間違えたか？」という声が聞こえる。多分、俺の声が女のものであるからだろう。

(……………すみません、間違 )

『間違えてない！ 俺だ瑞希だ！』

(はぁ？ ……だってあなた、女の人ですよ？ 僕は蓮見瑞希君にかけたんですけど……あー、わかった！ アイツケータイ落としんだな？ 瑞希君のケータイを拾ってくれた方ですか？)

『俺が瑞希本人だ！』

(……………)

『お前、今、面倒くさいなあって思ったろ？』

(なっ、なんでわかったの!?)

『何年の付き合いだと思ってるんだ？ 20年だぞ。20年』

(……………本当に瑞希なのか？……………どうしたんだ!? 一体いつから?)

ようやく信じてくれたみたいだ。

『今朝からだ!』

(……………そうか。早く言ってくれば良かったのに)

『えっ!?!?』

何かあるのか解決策が?! ……やはり持つべきものは親友だな

(よし、俺に任せとけ!)

『隼人』

(俺の知り合いに結構儲かってるそれ系の店のママがいるから、紹介してやる)

このやるっ。

『……俺はニューハーフじゃねえ!』

(えっ、違うの? 昨日菜々子ちゃん達が出ていったから、思い詰めた過ぎて目覚めちゃったんじゃないの?)

『目覚めてねえよ! しかもなんで思い詰めると目覚めんだよ!』

(女の声で怒鳴られると、なんか気持ちい)

『いいからさっさと迎えに来い!』

## 5・診察拒否

春雨が作った水溜まりに写る青空。朝から降っていた雨は、すっかり止んだ。先ほどまで歩道を彩っていた雨の日の主役達も、今は持ち主に畳まれ、邪魔物と化している。

日本には四季折々の景色が見られる。春は咲き香る様々な草花に囲まれ、新たな門出に期待と不安を併せ持つ顔が溢れる。

夏は暑さ故に涼しさを求め、都会や田舎にある水面に人が溢れ返り、身体の渴きを潤す。秋は使命を果たした枯れ葉が地面に舞い降り、冬は白い結晶が街を飾り、特定の者達に安らぎを与える。雨の日もあれば雪の日もあり、勿論晴れわたる日もある。

物事には変化が生ずる。変わりのない日はない。一見なにも変わっていないように見えても、必ずなにかしらの変化はある。

人間を構成する全ての細胞も日々再生され、昨日と今日では全く違うという。世界は、否、宇宙は刻々と変化を続けている。全ては常に同じ状態ではない。無常だ。だが

濡れた路面を走る車が、道路に出来た水溜まりを弾く。

『変わりすぎだろ！』

『へっ？ 何がだ？』

車を運転している隼人が、俺の独り言を聞き返してきた。

銀縁メガネをかけ、インテリズムを醸し出す色男。営業時代の癖が抜けず、今の職場は私服でいいはずなのに私服は落ち着かないと言い、休日の今日もスーツで身を固めている。

『何がだと?! よく見る!』

助手席に座っていた俺はTシャツの首元を開き、豊かに膨らんだ胸元を見せながら言った。

『ぶつつ』

『どわあつつ!』

一瞬、車が蛇行した。

『き、気を付ける隼人!』

『いやあ、悪い悪い。あまりにも立派に成長してたから』

『アホ。男の胸見て、なに興奮してやがる』

『……でも、今は女だろ?』

『……………』

……そうだなのだ。

昨日までは確かに男だった俺の身体。一夜明けて気付いてみると、女性の身体に変化していた。

今日は家出をしていた菜々子が戻ってきて仲直りをする予定だったが、あまりの状況変化に顔を合わせることもせず、今度はこっちが家を飛び出してしまった。

さつき菜々子から電話があつたが取らなかつた。

「女になった」なんてすぐには信じてもらえないだろう。仮に信じてもらえたとしても何言われるかわかったもんじゃない。多分「なんで女の身体になんかかってんだ! 浮気なんかしてるからそんな事になるんだ!」なんて意味不明で理不尽な言葉責めに遇うのが落ちだ。

『しかし、ホントに女だな? 電話の時は全く信じてなかつたけ

ど、会ってやっど瑞希だつて確信したよ』

『なにい?! お前、信じたから迎えに来たんだろ?!』

『まっさかあ! 瑞希の携帯拾つて、電話かけてくる連中に対して夕チの悪い悪戯しているクソ女だと思つてたよ。面拜んでやろうと思つて来ただけ』

『な……』

『面見たら帰ろうと思つてたし。でも会つたらすぐわかつたよ、瑞希だつて。高校ん時、無理矢理女装させた時の姿を彷彿させたからなあ』

……あつたな、そんな事も。

『お前、あん時は男にモテモテだつたな』

『うるせえよ。で、一体どこに向かつてるんだ? さっきの病院は門前払いだつたじゃねえか』

隼人と合流した俺は、近所にある総合病院に行ったが、受付で「只今大变込みあつてますので、冷やかしであればお帰り下さい」と取り合つてくれなかつたのだ。まあ「朝起きたら女になつていたので診てください」と言われれば、俺も同じ事するだろうが。

『次は大丈夫だ。茂宮のトコだからな』

『……………何処だつて?』

『聞こえなかつたか? 茂宮だ、も・み・や』

一瞬、車が蛇行した。

『な、なにすんだ、瑞希!?!』

『却下だ。Uターンする。戻れ』

隼人からハンドルを奪おうとする。また車が蛇行する。極めて危険な行為だが、この際背に腹は代えられん。

『ちよ、ちよっと待て！ 落ち着け！』

隼人は一先ず路肩に車を停めた。

『……はあ、はあ。瑞希、何やってんだっ』

『何故だ！？ 何故茂宮なんだ！？ 他に医者なんて沢山あるだろ？！』

『どうせ他の病院行っても同じ事だろ？ お前の身体に起こった事なんて誰も信じやしないよ。アイツだったら問題なく診てくれるぞ、多分。昔からお前に惚れてたからなあ。ははっ』

『ふざけるなよ！ 俺は嫌だぞ、アイツの所は！』

『怒んなって。大丈夫だよ。それに今はそんな我儘言ってる場合じゃないだろ？ 体調だって良くないだから医者には診せないといけないし』

……確かにそうだが………仕方がない………。

『………わかったよ』

『よし、行くぞ』

隼人は再び車を発進させた。

車の窓を開けマルボロに火を点ける。

窓から吹き込む風を受けながら、昔に想いを巡らす。茂宮と俺は高校の同級生だ。隼人も含めてよく一緒にいるんでいたが……。

よりもよって茂宮かよ。

茂宮は俺に想いを寄せていた。それは誰の目にも明らかだった。だが、俺はその想いには応えられなかった。それにはちゃんとした理由があるのだ。

間もなく病院に到着した。

都内とは思えない程の広大な緑に包まれた建物。桜を始めとする数百本の木々が俺達を迎えた。

茂宮総合病院。

外科、内科、小児科、婦人科など都内の病院の中でも指折りの名医が揃う病院で有名だ。が、俺は茂宮に遇う可能性がすごくぶる高くなる事を恐れ、家から近いこの病院を使う事はなかった。車を降り入り口へ向かう。

『おい、早く行くぞ』

『わかってるよ!』

全く気が乗らない俺の歩みは遅かった。

建物の中に入ると広々としたロビーに待合用の長椅子が何脚も並んでいる。かなりの数の患者が診察の順番待ちをしていた。

『うわっ、かなり待ちそうだな?』

『俺は受付を済ませてくる。お前の健康保険証を貸せ』

『は? 診察受けるのは俺だろ? 俺が行くよ』

『いや、俺が行く。女が男の健康保健証使うのはおかしいだろ?』

『ん? ……そうか』

言われた通りに健康保健証を手渡す。氏名は蓮見瑞希、性別は男となっている。



『じゃ、ちよつと待ってる』

隼人は受付へ行き、受付係から問診票を受け取り記入をしている。記入し終わると、健康保健証と問診票を渡ししながら何か言っている。話を聞いていた受付係はどこかに電話をかけたのだした。

『ん？ アイツ、何してんだ？』

受付係が電話を終え、また隼人と何か話している。すると、隼人がこちらを向き「こつちへ来い」とジェスチャーしだした。

『なんだ？』

受付にいる隼人のところへ行ってみる。

『どうした？』

『婦人科だつてさ。行くぞ』

『へっ？ まだ呼ばれてないだろ？』

『大丈夫。ほら、行くぞ』

受付係の女性を見ると、「どうぞ、3階になります」と笑顔で促された。

エレベータに乗り3階へ。

廊下を歩く中、さつき受付で何をしてたのかを聞いてみる。『ん？ ああ。茂宮薫先生に、「蓮見瑞希が患者で来ているのですが、会えませんか？」と聞いてくださいと言ったんだ。そしたら、「自分か診るからすぐ来て下さい」だつてさ』

『なるほど……って、俺を餌にすんなよっ！』

『餌なんてもんじゃない。アイツにとってはご馳走だろ?』

『ふざけ』

『お、着いたぞ』

そんな話を話している間に、婦人科の診察室に着いた。

……着いてしまったか。

『どうぞお入りください』

看護師が入室を促す。

茂宮は俺に想いを寄せている。

『ああ、どうも。入るぞ瑞希』

だが、その想いには応えられない。

『あつ、久しぶりね！ 隼人君!』

何故なら……。

『おう！ 久しぶりだな茂宮！ ……お前、相変わらずだな。髭  
くらい剃れよ』

『久しぶりに会ったんだからそんな堅いこと言わないでよあ！』

……あれ瑞希君は? ……そちらはどなた?』

俺は男に興味はないからだ。

## 6・やっぱり風邪か？

茂宮薫。27歳。独身。

性別・・・男。

だが、心は純真無垢な乙女・・・だそうだ（本人曰く）。

その乙女は、肩までかかった長めの髪を指に絡めながら、恋人を待ちわびていたかの表情で俺達を迎えた。診察室の自分の椅子に腰掛け、デスクにも向かわず、診察室の入り口を凝視しながら。

……仕事しろよ、ちゃんと。

診察室前の廊下にある待合用の長椅子には誰も座っていなかった。診察室にも患者らしき人はいない。

あれ？ まさかコイツ、ヤブ医者なのか？

『……………で、瑞希君はどこにいるの？』

笑顔の茂宮は、診察室に入った俺達の後ろに目を向け、目当ての人物を探しながら言った。

『目の前にいるだろ？』

『……………？』

訝しげに隼人を見る茂宮。

「何言ってるんだコイツは？」って感じた。

隼人に促された俺は、茂宮の方へ歩み寄った。

『よ、よう。久しぶりだな、茂宮』

訝しげに俺を見る茂宮。

「何言ってるんだコイツは？」って感じた。

『隼人君。何、この女は？ 投げ飛ばしていい？』

柔道有段者の茂宮が、真顔で質問した。

良いわけねえだろ。

『いいぞ』

おい親友！

『……おい待て、茂宮。冗談だ』

俺を投げ飛ばすべく、立ち上がりかけた茂宮を止める隼人。

『やっぱり冗談？ なら早く瑞希君出しなさいよ』

いや、そつちじゃなくて……。

『ホントにわからんか？ コイツの顔をよく見てみる』

『はあ?!』

茂宮の視線が隼人を刺す。

……しょうがねえなあ。

『……高1ん時に千葉にあるお前んちの別荘に行つて』

『ん？』

突然の話し始めた俺を見る、茂宮と隼人。

『海で捕まえたサザエ食って、一人だけ腹壊したヤツだーれだ？』

『あつ』

隼人は懐かしそうな顔をし、茂宮の顔が引きつってる。

『下痢が止まらなくなって、病院に親父さんの車で向かってる途中で、くしゃみの勢いに任せて漏らしちゃったのだーれだ？』

『あー』

あつたあつた、と隼人は楽しそう。

『な、なんで知って……?!』

茂宮は困惑している。

周りの看護師が興味深そうに聞き耳をたてているのに気付くと、恥ずかしそうに顔を真っ赤にして怒鳴った。

『あ、アナタ達は仕事に戻りなさい!』

あーあ、せっかく人が名前伏せてやってるのに……

『その前の日に海で』

隼人が割り込んでくる。

『 ボディボードの練習中に沖に流されちゃって、戻れなくて泣き喚いてるところを女子校生に助けられたのだから？』  
『……………』

それは俺だぞ隼人。

『 あっ、これは瑞希だったな！あっはっは！』

隼人、お前わざとだろ？

『 な、なんでアナタが私達3人だけの秘密を……………』

間違ってるぞ、茂宮……………親父さん入れて4人。今となっては後ろでニヤついてる看護師さん追加で6人だ。

『 だから言ってるんだろ？ 俺が瑞希だって』

ん〜っ、と言いながら俺の顔をまじまじと見つめる茂宮。  
時間経過と共に、不信が確信に変わりゆく様子が顔に表れる。

『 ……瑞希……………君？ 本当に瑞希君なの？』

『 だからさっきから言ってるだろが！？』

『 で、でもなんでそんな格好に？ ……………ま、まさか』

『 違う！』

『 ま、まだ何も言っていないじゃない』

『 どうせ手術したのかとか言おうとしたんだろ？ お前と一緒にするな。俺は心も男だ。』

『 でも身体は女になったがな』

『 ……うるさいぞ、隼人』

『 私もまだ手術してないわよ』

あつ、そう。

『つーか、んな事はどうでもいんだよ!』

『まあ、冷たい!』

『……………うるさいぞ、隼人』

余計な割り込みをする隼人に鋭い視線を送った俺は、再び茂宮の顔を見る。

『……………とにかく、朝起きたらこうなってたんだ。どうにかしてくれ』  
『どっ、どうにかって……………』

しばらく俺の事を見つめながら何やら考え込んでいた茂宮は意を決した様に言い出した。

『しょうがないわね。瑞希君の頼みだったら断れないでしょ。じゃ、早速診察しますか。そこ座って』

『早速じゃねえだろ、時間かけさせやがって。他の患者がいなければ良かったものの。』

文句を言いながら茂宮の前にあつた丸椅子に座る。

『あー、それは大丈夫。瑞希君が来たつていうから、他の患者は全員、別の婦人科の先生に任せちゃったから。ウチは婦人科だけで5人医者がいるから。でも私が一番人気なのよ』

だから他の患者がいなかったのか。でも、そんな私的な理由で患者丸投げすんなよ。そんな医者が一番人気の理由が全くわからん……………。

一番人気と聞いて、茂宮がとりあえずはヤブ医者ではなさそうだ  
と思った俺は、少し安心感を覚えたが

『瑞希君の身体を隅から隅まで診察出来る日がくるなんて感激だわ  
あ！……………何、その不安そうな顔は？ 別に女の身体の瑞希君  
には何もしないわよ、やーねえ』

やはり別の病院にすれば良かったと、激しく後悔した。

『しかし本当に女ね。羨ましい限りだわ。一体どんな事すればそんな  
劇的に変身出来るの？』

茂宮は裸になった俺の上半身を見つめながら聞いてきた。

『んなことわかったら苦労しねえよ。ちなみにお湯かけても戻らな  
かったな』

『はあ、何それ？ 何のおまじない？ 黒魔術？』

『……………なんでもない』

隼人にはウケたんだけどなあ。

その隼人は今は診察室前の廊下で診察が終わるのを待っている。  
様々な検査をした俺は、結果が出るのを診察室で待っていた。

『血液検査とか尿検査とか色々やってもらったけど結果が出てると



思っからちよっと待ってて。あ、もう服着ていいわよ』

茂宮は立ち上がると、診察室の奥にある別室に入ってしまった。

……。

……。

『遅いな？』

何分位経っただろうか？

茂宮は別室に入ったきり戻ってこない。

患者としてマナー違反だが、様子を見に行こうと立ち上がった瞬間、茂宮が別室から姿を表した。

『……お待たせ』

『やっと来たか。……ん、どうした？』

茂宮は何か腑に落ちない表情をしている。

『瑞希君、アナタ身体が怠いって言ってたよね？ あと少し吐き気もしたって』

『ああ……やっぱり風邪か？』

『胸に痛みとかない？』

『ん？ よくわかったな？ なんかチクチクするんだ』……女になつたのは、今日って言うてたわね？』

『ああ、朝起きたらな』

『……』

『な、なんだよ？ どうしたんだ？ なんかわかったのか?!』

『……ええ、わかったわよ』

俺の声が大きかったのか、隼人が診察室に入ってきた。

『……………アナタ妊娠してるわ』

『ふーん……………はあ?! なっ……………に、妊娠?!』

……………えっ? なに? どういうこと? ……妊娠? 俺が妊娠?  
俺って妊娠? 変身の次は妊娠なの? 何で妊娠? 妊娠て何?

『茂宮あ、マジか?! おい、瑞希』

茂宮との会話を聞いていた隼人が、なんか話かけてきている。

お前もビックリしただろ、隼人。でもダメージは俺のほうがデッ  
カイぞ。

『すっげえなあ、おい! オメデタだ! やったなあ! ……  
おい、どうした?』

……………。

『……………めでたくないっ!』

俺は、行き場の無い怒りにも似た想いを右拳に乗せ、隼人の頭に  
繰り出していた。

## 7・泥棒猫！！

コーヒーの香りがリビングを漂う。煎れたてのコーヒーがトレイに乗せられ、窓際のソファアームに座るアタシの方へ運ばれてくる。

アタシは目の前のテーブルに置かれたコーヒーカップをそっと持ち上げ、口に近付ける。鼻を覆める香りの濃度が最高潮に高まり体内に浸入してくる。「どうだ、いい香りだろう？　一息ついて、少し落ち着けよ」と云わんばかりに。

『……………こおれが落ち着いていられるかあああつ！』

香奈の平手がアタシの頭をはたくと同時に乾いた音が響く。

『（彩ちゃんが起きるって言うてるでしょうが！！）ボリューム全開の表情の香奈が、小声で注意してきた。

『う、ごめんなさい……………』

彩は離乳食を食べて、先ほど寝たところだった。

まったく、と言いながら、香奈はアタシの隣に座り、自分で煎れたコーヒーを啜った。

『で、電話は？』

『でない。ずっと電源切られてる』

『……………待つしかないわね』

この部屋から見知らぬ女が逃げ出すのを目撃したアタシは、瑞希に怒りの電話をかけまくったが、ずっと「おかけになった電話番号は電波の……………」という機械音声に対応されていた。

とりあえず、まだ近くにいた香奈に連絡しウチに来てもらったの

だ。

『……アタシ悔しいよお。なんでアイツ浮気なんか……ううっ』

『……うーん。でもおかしくない？ 普通さあ、奥さんがいつ帰ってくるかもしれない自宅に女連れ込むかなあ？ しかも次の日に帰ってくるって知ってるんだよ？ それに、目撃したのはその女一人だったんでしょ？ 瑞希君どこにいたのよ？ 連れ込んだ女一人残して何処か行くかなあ？ ……もしかして空き巣だったんじゃない？』

『……えっ？ 空き巣？』

あの女が空き巣？

じゃあ浮気相手じゃないの？

『ちよ、ちよっと？ 何安心してんのよ？ 本当に空き巣だったら何か盗られてるかもしれないわよ？』

『あっ』

確かにその通りだ。

まだ浮気疑惑が晴れたわけではないが、もしあの女が空き巣であれば貴重品などを盗られた可能性がある。でも空き巣だったら、瑞希浮気説が消える。

安堵と不安の往復を繰り返すアタシは、とりあえず家の中を調べる事にした。と言っても、貴重品を隠してある場所など限られている。

……寝室だ。

リビングに隣接した寝室のドアをそっと開ける。  
ベビーベッドには彩が微かな寝息をたてている。

起こさないように、と……。

忍び足でベビーベッドの脇を通り過ぎ、タンスのほうへ歩みを進める。

ウチには高価な宝石や指輪などは存在しない。ハッキリ言って、そんな物には興味がない。実用性に欠ける。我が家での存在価値はゼロだ。そんな物買うくらいなら彩にオモチャを買ってあげたいのだ。ウチにある貴重品といえば……。

そつとタンスの三段目の引き出しを開ける。中にはアタシの下着が詰まっていた。

ん？

なにか違和感を覚えた。下着の配列が少し乱れている。

ま、さか……。

アタシは自分の下着達を掻き分け、目的の物を探した。

………あつた！

タラララッタッターン！

頭に軽快な音が響き渡る。

アタシは封筒に包まれたへソクリを見つけた。

ビックリさせやがってえ。

ふう、と一息。達成感に浸っていたアタシの目に下着が写った。

ん？　なんでこんなトコにブラジャーが？

床に落ちていた下着を拾い上げ在るべき場所に戻す。  
再び違和感に気付く。下着が足りない。

自慢じゃないが、アタシはあまり下着を持っていない。というより、服自体少ない。だから、今着ている物、洗濯中の物、タンスに入っている物、すべてを把握している。赤い下着が見当たらない。

……ない。あれ？　ないぞ？！

引き出しを漁るが見つからない。誤って他の引き出しに入れてしまっているかもしれないと思い、四段目の引き出しを開けようとする。しかし、ここでも違和感に襲われた。

……開いてる？

開けようとした四段目の引き出しは既に少し開いていた。

違和感を頼りにタンス、クローゼットを調べ尽くしたアタシは、リビングに戻った。

香奈が不安気な顔でアタシを見る。

『だ、大丈夫？　やっぱり貴重品盗られてたの？』

アタシは無言で頷いた。

『な、なに盗られたの？』

『……………』

『ねえ？』

『……………服』

『えっ？』

『赤いパンティ、ジーンズ、白いTシャツに黒のパーカー！ それとお気に入りのバッグも！！……くっそお、空き巣めくっ！ 服あんまり持ってないっつーのにい！！』

『……で、以上ですか、盗られた物は？』

『はい』

『服……ですか？ ああ、あとバッグもか。……で、アナタは犯人を見たんですよね？』

『はい、ながーい茶色の髪の毛の女でした。あと、服装は多分盗んだ服です。黒のパーカー着て、ジーンズ姿だった』

『女ねえ……』

110番に通報後、来た警官は見るからにやる気のなさそうなオッサンだった。

『あの、すぐ捕まりますよね？』

『うーん、捜索はしますけど、直ぐかどうかはちょっと、ねえ？』

『困りますよ！ 早く捕まえてください！』

『うーん、そう言われましても、ねえ？ それより、本当に女だったんですかあ？』

『間違いないです！ 女でした。……疑ってんですか？！』

『……いや、だって盗まれた物が物だけに、ねえ？ 洗濯機に入っ

てたり、ベランダに干してあったりしないですよねえ？ それに、犯人が着て逃げたのであれば、犯人が元々着ていた服はどうしたんですか？ 先ほどの話だと、犯人は小さめのバッグしか持ってなかったんですよえ？ その中に入っていたとは思えないし、ねえ？ 『知りませんよ、そんな事。いいからしっかり犯人捕まえてくださいよ！』

『あの警官腹立つっ！ しっかり仕事しろっの！ っーか喋り方がムカつく。ねえ、そう思わない？！』

『……まあ、確かに盗られた物が女性の服だけじゃねえ』

香奈は、昼寝から覚めた彩と積み木で遊びながらどうでも良さそうに答えた。

『だけってなによ、だけって！？ アタシにとっては立派な貴重品よー！』

『うーん、まあそうなのかもしれないけどさ。でも良かったじゃない。浮気相手じゃなくて。』

『えっ？ ……うん、まあ、ね』

そうなのだ。瑞希は浮気してない。



『……でも浮気相手が着ていったって事も考えられるかあ？』  
『えっ?!』

『冗談よ、冗談』

香奈は愉快そうに笑っている。隣で彩も笑いだした。

『……それにしても、瑞希何処行ったのかなあ？』

『昨日、電話で10時って約束したんだけどねえ』

もう夕方になってしまっていた。もう少し待ってみましょう、と  
香奈が言った時、来客を告げる音がリビングに鳴り響く。

『瑞希?! ……………ん? 隼人?』

インターホンのモニターには瑞希の友人の隼人が映し出されていた。さらにあともう一人……女性が隼人の後ろに隠れている。

『ん? 誰だ?』

『誰? 出ないの?』

『あ、うん』

香奈に促されたアタシは受話器を取った。

『はい、蓮見です』

(あ、菜々ちゃん? 隼人ですけど……今大丈夫?)

『うん。でも瑞希帰ってないんだけど』

(えーとね、その事なんだけど、ちょっと話したい事があって。入  
れてもらえる?)

話したい事? なんだ?

チラツと香奈のほつを見る。香奈も頭上に疑問符を浮かべ、こちらを見ている。

そつだ！ 香奈に紹介する男。隼人がいいじゃん！ ルックスもまあまあだし。

『隼……じゃなかった、瑞希の友達なんだけど、瑞希の事、何か知ってるみたい。入れていい？』

『私は良いけど……カッコいいの？』

アタシは大きく頷いた。

まあまあね。

エントランスのオートロックを開錠し、隼人を中に促す。

『べんぞ』

受話器を置く瞬間、隼人の後ろにいた女が少しだけ見えた。

どっかで見たような？ 隼人の彼女……じゃないよね？ いないって言ってたし……。

少しすると、玄関先のインターホンが鳴った。

『はい』

玄関のドアを開けると、隼人と女が立っていた。

『菜々ちゃん、こんばんは。あなさ  
ん?!』

やはり女は一度会った事がある人物だった。というより、見たことがあると云ったほうが正しいか。

女はアタシの顔を見ると口を開いた。

『菜々子……』

アタシは怒りを抑える事なく叫んでいた。

『こおの泥棒猫!』

女は茶色の髪を胸まで垂らし、黒のパーカーにジーンズの出で立ち。アタシのお気に入り入りのバッグまで持っている。

『返せ! アタシの服!』

『えっ?!』

朝の空き巣女だった。

## 8. どうするの？

『で、どうするの？』

香奈が問い掛けてきた。

テーブルには4つのコーヒーカップと、宅配ピザの残骸、哺乳瓶が所狭しといた様子で置かれている。

茂宮総合病院で診察を受けた後、一人で家に帰る勇気がでなかった俺は、隼人についてきてもらった。家には菜々子と彩の他に、菜々子の友人の香奈が来ていた。菜々子は俺を何と勘違いしたのか「泥棒猫」呼ばわりしてきたが、隼人の説明により彼女らは案外簡単に俺が瑞希本人である事を認識してくれた。

とりあえず腹の減っていた俺達は、先ほど配達されたピザを平らげたところで香奈が質問してきたのだ。

『どうするって何が？』

『身体の事よ』

『どうするも何も。どうやって戻れるのか俺が聞きたいよ。つーか月曜から会社どうすっかなあ？ すげえ憂鬱』

『大丈夫じゃない？ 別にそんなに気にしなくても。どうせいつか元に戻るでしょ？』

菜々子は能天気気味に口を出してきた。

『いつ戻るんだよ？ こんな病気じゃないだろうし、お湯かけても戻らなかつたぞ？』

『それに女のままでも会社行けるでしょ？』

『うわっ、嫌だよそんなの。部長に何言われんのかなあ？ 皆俺の

「事どう見んだろ？」

「おい」

「？」

隼人が俺の腕に肘を当ててきた。

「なんだ？」

「あの事は言わなくていいのか？」

「……わかってるよ。」

「どうしたの？ 何か隠してるの？」

菜々子が怪訝な面持ちで問い掛けてくる。

「いや、なんだ……えーと……」

「やっぱり浮気してるの!？」

「してねーって! ……そうじゃなくてだな………に……」

「に?」

「に……ニコニコ動画って知ってるか？ 今やってるアニメがさ」

「」

「誰がアニメの話しろって言ったんだ？」

うるせーなあ……。

しかし、言いづらい。

言い出しづらいな。

女になった事だけでもかなり勇気を振り絞ったのだ。

勇気メーターが貯まるまで待っていてくれても良いではないか。

みんな、俺に勇気を分けてくれ。

『何してんのよ?』

天井に両手を掲げた俺にひんやり冷たい言葉をかける菜々子。

……わかりましたよ、言えばいいんでしょ? 言えば。

『……………だ』

『え? 何? 聞こえない』

『……………妊娠してんだ』

『はあ?』

『妊娠してるんだってよ、俺が!』

『はあ?!?!』

『だって。良かったね菜々ちゃん! オメデタだあ』

隼人が浮かれた調子で両手を挙げた。

『女になったと思ったら妊娠?! ……浮気相手は男かあ!』

そうきたか。

『違うっーの! 菜々子、落ち着……………うおい菜々子やめろって!』

おいっー!』

菜々子の勘違いは勢いを増し、そこから沸きだしたエネルギーは、今その両手の握力に注がれていた。隼人が菜々子に首を絞められて、今にも別世界に旅立とうとしている。

『おのれか、浮気相手はあ?!』

そうきたか。

香奈と二人で菜々子を押さえつけ、隼人は無事生還を果たした。

『俺が隼人なんかと寝るわけねーだろ？ 俺にその趣味はない！』

『「なんか」は余計だな瑞希君』

『ホレ、隼人に謝つとけ、一応』

『「一応」も余計だね瑞希君』

『……ごめんなさい』

『ホントにごめんなさいね。この子昔から勘違いが多くて』

香奈は、ミルクを飲んで寝ていたが先ほどの騒動で起きてしまった彩を抱き抱えながら隼人に謝った。

キミは悪くないのよ香奈ちゃん。

『いや、大丈夫ですよホント。なんか逆にチヨット気持ち良かったし』

それは色んな意味で危なかったね隼人君。

『まあ相手は隼人ではない、というより誰の子供かわからない。そもそもなんで妊娠してるのかさっぱりわからん。茂宮は、妊娠4、5週位だっけって言うていたが、そんな時期になんて女にもなつてない』

わけだしな』

『……瑞希君、妊娠の期間で受精してから数えるんじゃないのよ。生理がきた後、個人差もあるけど大体2週間位で排卵日が出るから、その時に受精したとしたら、その前にきた生理日から日数を数えるのよ』

『へえ、つて事は……。つーかその前に、俺、生理なんて経験してないよ……。4、5週間前なんて完全に男だし』 『確かにそうよねえ……ん？ どうしたの菜々子？』

菜々子の方を向くと、彼女は思い詰めた顔をしていた。

『おい、菜々子。どうした？』

『えっ！？ い、いえ、何でもありませんよ。ははっ』

確実に何かを隠している菜々子は、「これでもか」と言うほどの作り笑いを浮かべて席を立った。

『チョット、トイレ行ってくるね！』

『おっ？ おっ』

『いつてらっしゃい、菜々ちゃん！』

『菜々子どうしたのよ？』

『何でもない！ 行ってくるー！』

そう言い残し、菜々子はトイレに逃げ込んだ。

『……怪しい事この上ないな』

『そうね』

『何が怪しいって？』

『菜々子だよ。なんか隠してやがるなアイツ』

『ふーん』



だが、その隠し事に関して、俺も含めて皆それほど執着はしてなかった。

『まあ、いいわよ。すぐに分かるから』

『ああ、そうだね。アイツは』

『ああーっ！』

その時、悲鳴ともとれる声をあげながら、菜々子がトイレから飛び出してきた。

『そ、その子アタシの子かも！』

『ウンが下手だからな』

## 9・陽性 陰性

俺の腹にいる子が菜々子の子？

『な、何言ってるの菜々子？』

香奈は、菜々子の発言の意味が理解出来ない様子だ。付き合いが長いと言っても、たまに分からなくもなるだろう。相手が菜々子では。

隼人はというと、菜々子のこういう突拍子もない言動が好きらしく、ニコニコ顔で菜々子を眺めている。まるで動物園でレッサーパンドでも観察する子供のように。

俺自身も、菜々子のこういう突発事故的な発言は嫌いじゃない。むしろ格好のツッコミ材料なので大歓迎ではあるが、あいにく今はそんな気分ではないので、あっさり流す事にした。

『……さてと、ハイレベル過ぎて笑い所が見つからない発言をしている頭の弱い子は放っておいて……』

『ちよつと待てい！ 誰が頭が弱いんだ！？ いいから聞きなさいよー！』

菜々子は、話を打ち切ろうとした俺を止めてくる。

あーあ、せつかく皆からツッコまれて傷口が広がらないうちに、なかった事にしてやろうと思ったのに。

『お前アホか？ 妊娠してんのは俺だぞ？ なんでお前の子になんだよ！？ 保健体育から勉強し直しなさい！』

まあ、授業では男の妊娠については全く触れてなかったが……。

『そうじゃなくて、瑞希とアタシの子どもだって!』

再び意味不明発言。 あんまり沖までいくと、足が着かなくて溺れちゃうぞ？

危なげたっぷりな子を持つ親の気持ちになってきた。 笑いの海は溺れやすいのだ。

『わかったわかつ』

話を終わらせる為の相槌を、菜々子の動作が遮断する。

彼女は俺の鼻先に、何か見覚えのある体温計の様な棒を突き出し  
てきた。

『……何の真似だ?』

『いいからよく見なさい!』

『見たいのはやまやまだが、近すぎて見えん』

「あつ、ゴメン」と言いながら菜々子は棒を俺に手渡した。

『ん? コレ妊娠検査薬じゃんか? これがどうしたんだよ?』

『ほら、コレ見てよ』

菜々子は結果表示部を指差した。

香奈と隼人も覗きこんできた。

『……陰性ね?』

『……陰性だね？』

『菜々子、これがどうしたっつーんだよ?!』

『!?!』

菜々子は驚愕の表情で俺達を見ている。まるで、「何で、ここま  
で言ってるわかんないの!?!」ってカンジだ。

……わかんねーよ。

『おい、いいから教える！ コレがどうした!?!』

香奈&隼人も隣で頷く。

『……実はアタシ妊娠してたんだよ』

『はあ!?!』

『ウソー！ やったね、菜々ちゃんオメデタ、ギャン!』

うるさい隼人をゲンコツで黙らす。

『妊娠？ いつわかったんだ?』

『3、4日前』

『3日って……お前何にも言ってなかった』 『言えないよ！  
瑞希いつも帰り遅いし、帰って来てもケンカばかりだったし……』

菜々子は俺の言葉を遮り不満を口にし、俯いてしまった。

『……そっか………ゴメンな、菜々子。俺が仕事ばかり優先しち  
まってるから、なかなかそういう話も出来なかったんだな?』

俺は急に菜々子が愛しくなって、そっと身体を引き寄せ抱きしめ

た。

『うづん、いいよ。もう過ぎた事だしね』

『何言ってるんだよ、過ぎた事って……』

……アレ？

『あの、同性愛はとても結構な事なんですけど、イチヤつくのは向こうの部屋でやってもらえませんか？』

隼人が冷やかしてきた。

『うるさいぞ隼人！……おい菜々子。「過ぎた事」ってなんだ？それに、「妊娠してた」って……？』

菜々子の身体を離しながら問い詰める。

『だからあ……』

菜々子は、さつき持っていた陰性結果の妊娠検査薬を、再度、俺の鼻先に突き出してきた。

『この間検査したら陽性だったのに、さつき測ったら陰性だったのよ？で、タイミングよく瑞希が妊娠したって事は、考えられる事はひとつしかないでしょ？』

ニヤリと口角を吊り上げた菜々子は断言する。

『……移動したのよ、胎児が。アタシのお腹から瑞希のお腹にね』

は？ 何言ってるんだ？

『お、お前そんなアホな事あるかよ？ あり得ないだろ！ ひとつつて、お前……移動！？ なんだそりゃ？ ……お前さ、陽性だったのに陰性になったって事は、アレじゃねえか？ お前の子はりゅ』  
『瑞希っ！』隼人が大声を張り上げた。

……危なかった。隼人が呼んでくれなければ禁句を口に出すところだった。

その時だった。

『移……動した？ ……胎児が移動した?!』香奈は喜びとも悲しみとも取れるような響きの声をあげ、その場で膝を折り崩れ落ちるように倒れてしまった。

『えっ?!』

『何？ どうした!?!』

傍にいた隼人が抱き抱える。香奈に抱かれていた彩も寸でのところで落ちずに済んだが、大泣きしてしまっている。『菜々ちゃん!』  
『あっ、うん!』

菜々子は隼人に促され、彩を香奈の腕から抱き上げた。香奈は気を失っているようだ。

『瑞希、ベッドに寝かせるから手伝……わなくていいや、やっぱり』  
『なんでだよ、手伝うつーの』  
『いい、お前は今身重だからな。重いもの持つちゃダメ。いや、香奈ちゃんは軽いけど』

数十秒の間に三人もの人間に気を遣う隼人。

氣い遣い過ぎでハゲるぞ隼人。

香奈を抱き抱えながら寢室へ向かう隼人の後ろを見つめながら、俺は心で呟いた。

『どうしたんだろうな、香奈ちゃん』

『わからん。菜々子、なんか知ってるか？　香奈ちゃんがあんな風になっちまった原因』

『わかんないよお。香奈どうしちゃったんだろ？　ねえ、救急車呼ばなくて大丈夫かな?!』

菜々子はかなり心配した様子で寢室を振り返った。

『大丈夫だと思うよ。脈もすっかりしてたし、倒れた時も頭は打たなかったしね。熱もないから、風邪とかでもないと思うけど。さっき見にいったら、静かに寝息たてたから、少ししたら気が付くと思っよ』

薬学部卒と言っても、医療の分野を勉強した隼人は、こういう場面ですら本当に頼りになる。

『香奈ちゃんの倒れた原因は不明か。そして、俺の身体の変化も原因不明。わからん事だらけだな。はあ…………。』

溜息をつくると幸せが逃げると、昔誰かに言われた気がするが、こんな状況で出ないほうが不思議だ。

『うーん…………それなんだが…………お前、昨日は確実に男だったんだよな？』

『ん？ ああ、完璧に男だった。今朝起きたら大变身だ』

豊かに実った胸の谷間を隼人に見せながら答える。

『き、昨日は何か変わった事なかったか？』

『身体はしこたま怠かったな。風邪引いたみたいに寒気がしたし』

『…………それはいつ頃だ？』

『お前に電話したすぐ後位だから…………11時頃だなあ。』

『ふむ…………菜々ちゃんは？』

『えっ！？』

突然振られた事により菜々子は、ビクツと体を強張らせた。『…………何か変わった事なかった？』

『えっ、あ、えーつとお…………な、何にも…………何にもないよ！』

…………まーた何か隠してやがるな…………。

『そっかあ』

隼人は返事をしながら俺を見て、少しニヤついている。隼人も菜々子が何か隠そうとしているのがわかったみたいだ。まあ、あれだ



け動揺されてわからないヤツがいたら見てみたいが。

『菜々ちゃんは家出した後何処に行ったの?』

『えっ? ……えーっと、香奈んどこだよ。香奈んどこに真っ直ぐ行ったよ』

「香奈のそこ」だけで十分伝わる内容に余計な単語をつけている。

「真っ直ぐ」行っていないって事か。どこに寄ったんだ?

『えっ? アレ、本当に? さつき茂宮が、昨日の夜11時位に菜々ちゃん見たって行ってたんだけどなあ?』

隼人がこつちに視線を送る。

『……ああ、言ってたな、そういえば。彩抱いてたからすぐわかったって』

とりあえず話を合わせる。

『えっ?! ど、何処で見たって?!』

『ホストクラブ』

『ああ……って行くか! なんで子連れでそんなところ行くんだ!?』

隣でオモチヤで遊ぶ彩を指差しながら猛然と否定する。

『ええ!?! でも茂宮言ってたよね?』

隼人、演技巧いね。目が笑ってないぞ。

『言ってたなあ。確実に菜々子だって言ってた。しかも相当楽しそうだったって』

俺も今、相当楽しいけど。

『人違いだ！ 他人の空似だ！ アタシはそんなトコ行ってない。その時間は観恩寺にいたんだから』

『観恩寺？』

『……………あ』

本当にウソ下手だなコイツは。

『お前、観恩寺で何してたの？』

『……………』

そんな三人のやり取りを余所に、彩は犬のぬいぐるみを振り回して遊んでいた。

## 10・幻滅した

湿った風が頬を撫でる。助手席のウィンドウを全開にし、少し強めに吹き込んでくる風に目を細める。

春になり少し温かくなってきたとはいえ、4月の半ばにしては暑過ぎる。車内から眺める景色には、昨日の昼まで降っていた雨の痕跡は欠片も残っていないが、視覚から消え去ったそれは空気中に溶け込み、肌にとわりつくような触覚を感じさせる。

『あつちいなあ。なんだこの暑さ？もう梅雨明けか？』

『大袈裟だよ瑞希は。今日は5月下旬の陽気だってさ。明日からまた4月に戻るって言うってたぞ』運転席の隼人が答える。

陽気に似合わない涼しげな顔だ。掛けている銀縁メガネが一層涼しさを醸し出す。

『ふーん』

そりゃ残念だ。

俺は夏が好きだ。夏が近くなるとワクワクしてくる。冬より夏のほうがいい。冬にスキーやスノーボードに行ったりする連中（隼人も毎年行っているらしい）がいるが、気持ちがあく分らない。何故寒い時にもっと寒いところに行くのか？冬はコタツで丸くなるよ。俺の前世は犬ではない事は明白だ。

昔は夏になると海水浴行ったり、花火大会行ったり、キャンプに行ったりと、家にいない事が多かった。勿論、菜々子と一緒にだ。だが、結婚して、マンション買って、彩が生まれてと、月日が流れ

る毎にその回数が減って、去年は何処にも行かなかった。

今年はどうか連れて行きたかったけど……無理だよなあ。

『はあ……』思わず漏れる溜め息。

先立つモノがない。

夏になれば彩も少しは歩くようになっていいるからどうか連れて行ってやりたいし、菜々子もリフレッシュさせてやりたい。最近特に仕事で時間が無かったとはいえ家族サービス出来てなかったから少しくらいは、と思う。だが、お金がない。

確かに自分の欲しい物も買わず、切り詰めて生活をしているから少し位は貯えと呼ばれるものもあるにはある。つい先日までは、その我が汗と涙の結晶である預金を使い、何処か旅行でもしようかと思ってもいた。が、今となってはそれも無理。

女の身体っておい………しかも妊娠してるし。

『はあ………』

『なに溜め息ばかりついてるのよ!?' 後部座席に座っている菜々子が言う。

振り向くと、熟睡した彩を抱きながら眉をひそめた菜々子がこちらを見ている。

『こんな状態で口笛が吹けるかつーの!』

『こんな状態って、どんな状態?』

コイツの鈍感さにも驚きを通り越して呆れが生じる。これだけ人

の気持ちを察する能力に欠ける人間は滅多にいない。出会って何年も経って最近は全く気にしなくなっていたが、改めて再確認した。

『どんな状態だつてえ?! ……………こんな状態だあ!』俺は着ていたTシャツの首元を開き、豊かに膨らんだ胸元を見せながら叫んだ。

『ぶっつ』

『どわあっつ』

一瞬、車が蛇行した。

『き、気を付ける隼人!!』

『いやー、悪い悪い。あまりにも立派に成長してたから』

『アホ。男の胸見て、何興奮してやがる。!…………ん? なんかこのやりとり、昨日もあつたよな?』

『ん? 気のせいじゃないか?』

『っーか、なんでお前が覗いてんだ!? ちゃんと前見て運転しろ!』俺は、隼人の頭を叩きながら安全運転を指示した。

『隼人君、アタシと彩からもお願い』

『あ、はい。わかりました。…………それより、香奈ちゃん大丈夫かな? 昨日は彼女泊まっていたんだろ?』

『あ? ……………ああ』

香奈は昨日、俺と菜々子を心配して家に来てくれていたが、突然倒れたのだ。朝まで起きなかつたが、起きた後は何事もなかつたように元気で、倒れた時の状況を本人に説明しても、ゴメンなさいと謝るばかりで何も語ってくれなかつた。

『朝起きて、今日は仕事あるからって、帰ったよ。アタシもあんな事初めてでビックリしたけど、どうしたのかな、香奈?』

『わからん。が、倒れる前、なんか言ってたよな?』

『えっ、なんて?』

『いや、なんか胎児がどうか……』

『お、着いたよ!』隼人の知らせが会話を遮った。

目的地に到着したようだ。

比較的新し目のマンションや一軒家が立ち並ぶ住宅地。その中に古びた外観が一際目立つ瓦屋根の建物。自宅マンションから車で10分ちよいだが、通常であれば、全く用がないので立ち寄る事が皆無な場所。近所ではあるが、来たのはこれが二度目だ。一度目は菜々子と二人で来た。

俺は昔から超常現象などという類いは信じていなかった。が何かの本で、この世界には科学なんぞでは証明出来ないものは数多くあり、その中でも科学者達がさじを投げるようなもの、形而上学的というらしいが、要するにどんなにあがこうが科学で証明出来そうにないものがある、と書いてあったのを読んでから少し考え方を改めた。そんな時、菜々子がどうしても此処に来たいと言ったのだ。凄い力を持った石があって、それに触りたいと。

妊婦石……ねえ。そっいや、来たな……。

観恩寺。

背の高い塀に囲まれた寺の入り口には一層古びた門があり、上部には寺の名前を掲げた分厚い板が下がっている。

目の前のパーキングに車を止め、外に出る。車を降りると太陽の照りつけが身体を襲う。まだ正午前だというのにこの暑さは堪らない。

『温暖化が日に日に勢いを増してますなあ。……なんか飲まない？』  
パーキング内にある自販機を指差す。

『確かに喉乾いた。アタシ買って来るよ。何がいい？』彩を抱っこ紐で抱えあげながら菜々子が聞いてきた。

『いや、俺が行く』

『いいって！アタシ行くから！何がいい?!』俺の申し出をあとさりとして断り再度聞いてくる。

『ア、アイスコーヒー……隼人もだろ?』

『ん? ああ。でも大丈夫、菜々ちゃん?』

『大丈夫、大丈夫! アイスコーヒーね? 何でもいいよね?』

『ああ』

『りょーかい!』菜々子は敬礼すると自販機に向かって歩きだした。

なんだアイツ? ……まあいいか。

『瑞希、お前身体のほうは大丈……ておい! 何してるんだ!!?』  
『ん? 何?』隼人は俺に掴み掛かるかのように身を乗り出してきた。

突然の出来事に驚いた俺は、くわえたタバコを地面に落としてしまった。

『あーっ! 何すんだよ隼人!? なけなしの一本だぞ! もっとたいねえなあ』隼人に抗議する。

と次の瞬間、俺の背中に衝撃が走った。

『のわあ! ……ってえ!』

振り向くと菜々子が殺気を放ち立っていた。正に鬼の形相。彩を抱きながらも、片足で巧い具合にバランスを保っている。その構えから、多分俺の背中に蹴りを食らわせたのだろう。

『……何すんだよっ！ 痛てえな！』

『何すんだはこっちのセリフだあ！』

『はあ？』

『それえ！』 叫ぶ菜々子が俺の足下を指差す。

『な、何？』

『タバコお！ 吸おうとしてただらうがあ！』

タバコ？ は？

『なんだよ？ 今に始まった事じゃないだろ？』

『お腹の子供に悪影響だろ？』 隼人が俺の頭を軽く小突いて言う。

『そうだ、そうだ！』

『お腹の子？ ……ああ、そうか』

まあ確かにそうか。でも、だったら菜々子も背中蹴んなよ。

『ああ、そうかって、お前ちゃんと産む気あるのか？』

ん？ 産む？

『えっ？ 俺この子産むのか？ 産まなくちゃダメか、やっぱり？』

『はあ？！』 菜々子と隼人は、頓狂な声をあげ驚いている。

『いや、だって本当に菜々子の腹から移ったんなら、また元に戻るかも知れないじゃん』

『まあそうかも知れんが、でも万が一戻らずに出産迎えたらお前が産むんだぞ？ しっかり覚悟だけはしておけよ』



『そうよ、覚悟しておきなさい!』 二人は他人事のように言い放つ。

『つつたつて、ホントに産めんのか、この身体? 元々は男だぞ?』  
『それは病院で確認したんでしょ?!』

いや……確かにしたが……。

『それに、いつ身体が元に戻るかもわからんし』  
『それは今から確認しに行くんでしょ?!』

いや……確かに。だけど……

『そ、それに……』

『それに、何よ?』 菜々子は俯き気味の俺の顔を覗き込むように聞いてきた。

『……いや、あの……なんだ』

『何よ!? はっきり言いなさいよ!』

『いや……出産で、い……痛いんだろ?』

『……呆れた……なっさけない!』

『な、なんだよ』

だから言いたくなかったんだ。

『なっさけない!』

この野郎、お前が言うなよ隼人。

『アタシが石に祈ったせいで瑞希が女になっちゃったと思ったから、悪いなと思ってたけど、そんな弱っちい事考えてたなんて。なんか

幻滅した』

『っ……………』

『幻滅したあ』

だから、お前が言うなよ隼人。

『ほら、ヨワキ、さっさと行くわよ！』 菜々子はそう言うと、寺に向かい歩き始めた。

『ほれ、行くぞヨワキ』 後続く隼人。

……………コイツら……………

『……………俺の名前はミズキだ！！ ておい、ちょっと待て、おい！ 菜々子お、コーヒーどうした！？ おいっ！』

俺は落ちているタバコを尻目に、小走りで菜々子達を追いかけた。

観恩寺。

遠目からはとても古ぼけていて、檀家なんていないんじゃないかと思ってしまう程廃れて見えた寺だったが、近くで見ると敷地は広く建物の造りも立派なもんだ。

正門に立つと左側に檀家用の駐車スペースがあり、右側には墓石が所狭しと並んでいる。その奥には納骨堂、中央には寺の本堂があり、玄関の奥は受付らしき場所があるようだ。ここからでは遠くで見えないが、坊主が二人受付に座り暇そうに談笑しタバコらしきものを吹かしている。

『あらあら、誰も見てないと思つて……。坊主つってもだらしないんだな？ あんな奴らにお経あげてもらっても、なんも嬉しくないな？ ここに世話になる故人も可哀想なこつた』

俺は元々、寺とか坊主とかはそんなに好きじゃない。葬式だけの時だけ偉そうに出てきて、やれ塔婆はいくらだ、戒名はいくらだと、まるで金の亡者だ。

『まあ、何処もそんなもんじゃないか？』隼人がそう言いながら、中に入っていく。受付までくると坊主の一人が問いかけてきた。

『こんにちは。本日は法要ですか？』

『いえ、違います。外にある石についてご住職にお話を伺いたいのですが？』隼人が用件を伝えると、その坊主は怪訝そうな表情を浮かべたが、少々お待ちください、と席を立ち奥に入ってしまった。

暫くすると先ほどの坊主が戻ってきた。

『どうぞ』

俺達は坊主に促され奥の部屋に通された。中は10畳程の畳張りの部屋で、中央にはこれまた光をよく反射しそうなほど激しく禿げあがった頭の持ち主が胡坐をかいていた。年は70歳過ぎ位のこじんまりとした体格。このじいさんが住職らしい。いかにも偉ぶった袈裟を懸けている。

『おお、お暑い中よくおいでくださいましたなあ。どうぞ、どうぞ』

軽く会釈し促されるまま座ると、激禿住職はすぐに話をしだした。

『妊娠石について話をしたいと聞きましたが、アレが何か悪さでもしましたか？』

『いえ、この辺りではあの石に触ると子供を授かると大変噂になっていました。私も……あつ、こつちが妻なんです、なかなか子供ができません……』

いつからお前の妻になったんだよ俺は……。

『ほほう、そうでしたか、そうでしたか。それでは、もう石にはお触りになられましたか？』

『まだです。その前にご住職にお話を聞いておこうと思ひまして』  
『何ですか？』

『あの石はいつ頃からこちらにあるのですか？』  
『10年位前になりますかな。地方の寺からこちらに移されましたな。その寺の住職が、こちらでは手に負えんと言つのでうちで引き取った、という事ですな』

『手に負えない？ 手に負えないとはどういう事ですか？ 触ると子供ができるという俗に言えば有難い石ですよね？』

『それは5年位前からですな。その前はひどいもんでした』

『ひどいとは？』

『……あまり口外はしておらんのですが、あの石に触るあなた方にも知る権利がありますな』住職はちらりと菜々子、そしておとなしく菜々子に抱かれた彩を見ると口を開いた。

『祟りですな』

『祟り！？』住職は軽く頷き、話を続けた。

『昔、ある村に一人の女性がやってきた。女性はお腹に子供を身籠っており、数ヶ月前に失踪したお腹の子の父親が、その村に住んでいると聞いてやってきたが、その男は既に別の女と契りを交わしていた』

住職の話を聞いているうちに、何か嫌な予感がしてきた。

『男は追ってきた女性を疎ましく思った。その頃村では子供が全く生まれず、ほとほと困り果て、あらゆる儀式や祈禱を行ったが、万策尽きかけていた。男は村の村長達に、「文献に、妊娠している女性を人柱にした国があり、その後国は子供がたくさん産まれ繁栄した」と嘘をつき、追ってきた女性は不治の病であり、もう手の施しようがなく、どのみち子供も助からないから、彼女を人柱にしよう、と提案した』

まいった。嫌な話だ。気分が悪い。

『村長は村人と共謀し、女性を誘い出した挙げ句に生き埋めにし、その上に墓石を建てた』

『……まさか、その墓石が妊婦石だと？』

『そういう伝説がある、という事ですな。その地方の寺の住職は、

そのように言っておった。引き取った当時は、触った人間が病気になるったり、事故死したりと騒ぎが絶えなかったが、供養を続けるうちになくなりましてな。今は触った女性に子供が宿るといふ噂までたつようになつたと、そういうことですな』

『……村は……』菜々子が突然口を開いた。

『その村はどうなつたんですか？ 繁栄したんですか？』

住職は菜々子の目を見つめ、静かに答えた。『これもあくまで伝え聞いた話ですがな……』

『村は全焼。村長を始め村人も多く亡くなつた。発火原因はわからなかつたそうですな』

伝説。

その時点で信憑性に欠けるが、今の話が仮に本当だとしたら、それだけの報いを受けるのは当然だろう。その女性が不憫で仕方がない。失踪した男の子を身籠り、男とお腹の子と三人の幸せな家庭を夢見、後を追いかけた。男の裏切りにあつた時、彼女はどのような思いで死んでいったのか。

『あの石にそんな伝説があつたとは知りませんでした』

『少し嫌な話だったかも知れませんが。あの石に触るのであれば、知っておいたほうが思つたのでね。こんな話を聞いても、やはりあの石に触れなざるか？』住職は俺を見つめ聞いてきた。

『はい』

お前が答えるなよ、隼人！

「そうですね、そうですね。前にも触る前に訪ねて来られた方々がいました、この話を聞かせると皆触るのを止めて帰りました。あなた方は勇気がおありですなあ？ はっはっはっ！」

「あの、もうひとつ質問があるのですが？」

「ん？ 何ですか？」

「あの石は男性にも効果がありますか？ 子供がどうしても欲しい男が触ると、女性の身体になって妊娠してしまうなんて事は今まで」

「あなたが妊娠したいのですかな？」

「あつ、いえ、違いますけど……」

「うーん、どうですか？ そのような事例は聞いたことはないですな」

「そうですね。すみません。長居してしまい申し訳ございませんでした。有難うございました」

俺達は任職に礼を言い部屋を出た。受付に戻ると、先ほどの坊主が、また暇そうにタバコを吹かしていた。

「ああ、お帰りですか？」

「はい、有難うございました」

外へ出ると隼人が口を開いた。「収穫ナシだな」

確かに石のルーツは聞けたが、俺が元に戻る方法は全く聞けなかった。

「元に戻るのか、俺は？」

「帰る前に石を調べよう」

俺達は「妊婦石」を調べる事にした。門を出て右に向かう。

『あつた、コイツだ』

数歩進んだ所に地蔵が並び端のほうに目線位の高さの石が仰々しく置かれている。墓石にしては変な形だ。大きな卵の形をしており綺麗な曲線を描いている。石に詳しいわけではないが、素人目から見ても自然に出来た石ではない事は解る。

『……おい、何してんだ？』

カバンから何かを取り出し、石の前に屈み込んで隼人が何か始めた。

『ん？ ちょっと……なっ』言葉の語尾を強烈なアクセントで修飾した瞬間、隼人の手元で何かが砕ける音が聞こえた。

『なっ？』

『これでよし。ん、どうした？』

隼人は、ポケットから取り出したハンカチに何かを包み、持っていた金槌と彫刻に使うノミと一緒にカバンの中に押し込んだ。立ち上がりながらこちらを振り向く隼人の背後を確認する。妊婦石に異常は………あつた。石と地面との接点すれすれの部分が少し砕けている。

『おまつ……なにやってんだ?!』

『何って……知り合いに鑑定してもらうんだよ。何か特別な石かどうかをな』

『鑑定？』

『ああ。住職が言っていた石はコイツだろ？ あと、菜々ちゃんの話からは、お前が女になってしまったのも、妊娠したのも、この石



が原因である可能性が高いワケだ。だから調べに来たんذار？ 可能性があるならとことん調査しなきゃな。せつかく来たのに手ぶらで帰るのは全く価値的じゃない』

そ、それはそうだが、お前……。

『さっき激禿住職が言った話聞かなかったのか？ こ、これは殺された女性の墓石だろ！？ た、崇られるぞ！』

『大丈夫だって！ さっきの話だって、あくまで伝説だって言っていただろ？ それにあのじいさんがウソをついているのかもしれないだろ？ ほら、車に戻るぞ？』隼人はそう言うと駐車場に歩きだした。

俺と菜々子は容赦なくと照りつける直射日光に目を細目ながら隼人のあとを追いかけた。

## 12・魔法のアイテム

朝8時。駅のホームに進入してきた10両編成の通過電車が風を生みだす。風は、昨日の季節外れの暑さは嘘でしたと言わんばかりの涼しさを運んでくる。というより、少し肌寒い位だ。まあ、この肌寒さは風のせいだけではないが……。

ふと周りに目を向ける。ある者は新聞を読み経済などの社会情勢に思いを巡らせ、ある者は耳に着けたヘッドホンから流行りの曲を雑音に変換しながらばらまいている。見覚えのあるサラリーマンやOL、学生達がごった返すいつもの風景がそこにある。

相変わらずの通勤風景……なんの変化も……あるか……。

左にある鏡に目をやる。白いブラウスにベージュのジャケット、黒いタイトスカートに身を包んだ女性が映っている。

……ホントにこんな格好で会社行くのか俺は？ ……今ならまだ……いや、もう間に合わないか……。しっかし足さみーな。やつぱり髪切つて男の格好で来たほうが良かったよなあ？

そんな事を考えながら出勤前の家での出来事を思い起こした。

『……おい。俺は本当にこの格好で会社に行くのか？』全身鏡を前にため息混じりに呟く。

『そうよ、結構似合ってるじゃない？ これは会社の男共の視線も釘付けね！』菜々子はさも得意気に胸を張って答えた。自分でコー

デイナートした俺の服装と化粧に自信があるようだ。

『「釘付けね！」じゃねーよ！これじゃ誰も俺って気が付かねえじやんか！』

『大丈夫よ。名乗れば』

『全然大丈夫じゃねーですよ！ 警察呼ばれた挙げ句に病院に放り込まれるのが落ちだろ！ もういい、着替える。髪も切っちまえば男に見えんだろ。今ならまだ間に合う』 そう言いながら、着ていた服を脱ごうとした。

『ダメ！ その格好で行きなさい！』

『だから、なんでだよ?!』

『危ないからよ！ はい、コレもバッグに付けて！』 菜々子は何かキーホルダーのようなものを差し出してきた。

『ああ?! なんだこりゃ?』

手に取るとそれにはハートマークの中に女性と子供が描かれていて、その下に「おなかに赤ちゃんがいます」とかわいい文字で書かれている。

『マタニティマークよ。コレ付けておけば、周りの人が親切にしてくれる魔法のアイテムよ』

マタニティマーク。妊娠初期で外見からは妊娠している事がわかりづらい場合、付けておく事により周りの人達に自分が妊婦だと認識してもらう為のものだ。近年より活用されるようになったもので、存在は知っていたが、菜々子は使っていなかったので実物見るのは初めてだった。俺はマタニティマークをプラプラと揺らしながら眺めた。

『魔法じゃねーだろ。付けてても相手が気が付かなきゃ効果もありやしない単なるキーホルダーじゃんか。こんなもんあったってなく

たつて同じだろ？ 妊娠つたつて、こんなキーホルダーに頼らな  
きゃならない程俺の体は弱っちゃいないっつーの。それにまだ産む  
と決まっがあつ 『俺は言い終わる前に、飛んできたバッグが額  
を打ち抜き言葉を遮られた。』

『つべこべ言わずにそれ付けて、さっさと会社行け！』

『くつそう、まだ額痛えな。アイツは俺の身体を気遣ってんのか気  
遣ってないのか全然わからん……』

『あおう、大丈夫ですか？』

『へっ？』呼び声に振り向くと、男子校生と女子高生が心配気な顔  
で、俺の顔を覗き込んできた。

『えっ？ だ、大丈夫だけど……？』

『良かった！ 頭押さえてらしたので具合でも悪いのかなと思って  
』と男子校生。

『お大事にして下さいね！』そう言い残すと二人の高校生（カップ  
ル？）は仲むつまじそうに去っていった。

『な、なんだつたんだ？』

程なく電車が到着した。いつも乗っているこの電車は通勤電車に  
してはあまり混まないが、それでもいつも座席は埋まっていて、座  
れる事はあまりない。ドアが開くと乗客が溢れ出てきた。人の流れ  
が止まると今度は時間を巻き戻したように人がドアに吸い込まれて  
いく。俺はいつものようにドア際の隅に陣取ろうとしたが既に先客  
が居たため、人混みに押されながら車両の奥まで進んだ。もちろん  
座席にはスペースなど全くない。座っている乗客と向かい合うよう  
に立ち、吊り革に掴まり発車を待っていると、不意に声を掛けられ  
た。

『どうぞお』

声は目の前に座っていた若者から発つせられたものだった。立ち上がり、今まで自分が座っていた場所を指している。

『えっ？　なんで？』

なんで俺に席譲るの？

『コレ』彼はそう言う俺のバッグを指さした。そこには、今朝菜々子に言われて付けたマタニティーマークのキーホルダーがあった。彼は妊婦である俺を気遣ったようだ。

『どうぞお』再び席を譲る若者。

『あ、有難うございます』

驚いた。あり得ないと思った。差別的な表現をしてしまえば、「似合わない」からだ。

その若者は、髪はオールバック、耳や鼻に数えきれない程のピアスを付けていて、上は柄シャツ、下は今は余り見ないボンタンという出で立ちで、見るからにヤンキーだ。

『キャラじゃないだろキミ？』と言ってしまいたくなる衝動を押さえたが、よく見るとサングラス越しで表情はわからなかったが、耳が真っ赤になっている。

ゆ、勇気だしたんだね……。

しかし、逆に彼のような若者の方が人の優しさに敏感で、自らも

人に優しく出来る器を持っているのかもしれない。俺は、彼の優しいぬくもりをケツの裏に感じながら心で有難うと呟いた。

しかしコレ、スゲーなあ。

よくよく考えるとホームで声を掛けてきた高校生カップルも、コレを見て俺を妊婦と判断し、頭を押さえていたのを具合が悪いと思っただけに違いない。

マタニティマーク恐るべし。

魔法のアイテム、マタニティマークのおかげで30分の通勤電車はゆとりのあるものとなった。

気分上々に最寄り駅で下車し、颯爽と改札を抜けた時にふと思いついた。

俺、何浮かれてんだよ？　これから会社行くつーのに。部長とか、ビックリするだろうなあ。やだなあ。でも行くしかねーよな。

急降下していく心に鞭を打ち、重たい足で歩を進める。会社は駅を出るとすぐ見えた。駅前にそびえ立つ高層ビル、の横に申し訳なさに立つ5階建ての建物がそうだ。建物は小さいが、最近扱っている商品の売上も良く、会社自体の景気が上がってきている。

飲みたくない酒を飲んで接待頑張ってる甲斐があるってもんだぜ全く。

感慨に耽っていると目の前を一人の見覚えのある中年男性が通った。

ぶ、部長！？

部長は肥えた体格をものともせず肩で風を切って歩いていく。

い、今がチャンスだ！　ここを逃すと会社に入って皆のいる前で説明しなきゃならなくなる。この場で一対一なら……たとえ俺だと解ってもらえなくても傷は浅くて済む！

考えている間にも部長は歩を進め、ビルの入り口まできていた。考えがまとまっていなかったのを余所に、俺の口は叫びだしていた。

### 13・クビですか？

『あのっ、すみません！、河西部長！』 急ぎ足の部長を、ビルに入る寸でのところで呼び止める。

『なんですかあ？ んんっ？』 部長は振り向くと驚きの表情を浮かべた。

『あれえ？ 蓮見君……ですよねえ？ どうしたのその格好あ？』

あれ、バレてる！？

『な、なんでわかるんですか?!』

『なんでってえ、去年の忘年会で皆によつてたかつて女装させられた時と同じような格好してるからあ。で、なんでそんな格好してるのお?』

『いや、コレには深い事情があります！ ここじゃアレですので、場所を移しましょう!』

『えっ!? あ、ちよっと！ 仕事どうするのお〜!?』

俺は部長の腕を掴み、会社から差程離れていない場所にある喫茶店目指して走りだした。

『 というわけで、僕は今、完全に女でして……』

喫茶店に着いた俺は、とりあえずここ3日間であった事を説明し、



部長の反応を伺った。

実際に自身で体験した事とはいえ、第三者に説明しているうちに自分でも可笑しな話だと改めて思った。明らかに非現実的だ。信用しろと言っても、『ふーん、そうなんだあ』などと納得するわけがない。

俺は別に今の会社に執着があるわけではないが、今、職を失うわけにはいかない。ただでさえ家族を養わなければならぬのに、出産するにしろ中絶するにしろ金が必要になるのだ。

菜々子は働きに出させない。本人はいざとなれば働くと言いつつだが、それは俺の男としてのプライドが許さない。身体は女になつたが、心は男のままだ。絶対にそんな事させたくない。させたくないが、会社からしてみれば、そんな事関係ないだろう。今まで営業として雇っていた男がいきなり女になつたなんて言われても、「馬鹿かお前は!？」って話だ。仮に女になつた事を受け入れたとしても、会社としてはそんなワケのわからん奴を営業として取引先に向わせる事なんて出来ないだろう。

……終わった。クビだ。次の仕事探すのはいいが、この不景気に現状と同等の待遇は期待できないだろう。

『ふーん、そうなんだあ。』

くっそお、どーすっかなあぁ？ ……………へっ!?

『大変だねえ？ 体調は大丈夫なのお?』部長はのほほんとした口調で問いかけミルクティーを啜った。

『え? ええ、まあ…………』

『でも良かったねえ。おめでとう。女性でもなかなか子宝に恵まれない方も多いもんねえ』

『そ、そうですね』

……な、なんだ？　なんで驚きもしないで……？

『ぶ、部長……驚かないんですね？』

『え〜？　驚いてるよお。驚いてないように見えるう？』

『全力で見えますね』

『う〜ん、まあ、こういうの慣れてるからねえ。小さい頃から色々見てるしい。』

『い、色々見てるって、何をですか？』

『ん〜？　そんなの決まってるじゃない……幽霊とかだよお』部長の口からはほのぼのとした笑顔とは無縁の内容が返ってきた。

『ゆ、幽霊！？』

決まってるねえだろ……。

『うん。だから、ちょっとの事じゃあまり驚かないよお。でも今回はさすがに驚いたなあ。大変だねえ。応援してるからねえ。何かあったら相談乗るからいつでも言ってるねえ？』

そうだった。この人はこういう人だった。昔、社の商品に欠陥があつてクレームの嵐だった時も、全く動じないで的確な指示を出しつつ先頭に立つてクレーム電話の対応までやってた。ニコニコしながら……。会社で火災騒動があつた時も、皆が慌てふためいている中で、非難経路の確保とか冷静にやってたな。やっぱりニコニコしながら……。この話し方さえなければ最強の人物なのだが。

『で、でも俺、クビなんじゃ……？』

『クビ？　社長に言われたのお？』

『いえ、まだ社長には何も報告してません……』

『ふ〜ん、でも多分大丈夫だよお。だって蓮見君、取引先の人達に受けがいいしい、ウチの社長のお気に入りじゃない〜』

お気に入り？ そうなのかな？ 確かに社長に良く飲み誘われるが……

『も、もしそうだとしても、こんな格好で取引先には行けないですよ。説明したって理解してくれるかどうか……。』

『じゃ、内勤でもすればいいんじゃない？ それか社長秘書とかあ。とにかく、クビにはならないと思うよ。キミは今後我が社になくしてはならない存在だからねえ。後で社長に報告しに行こうよ』  
相変わらずのほほんとした雰囲気です。部長。

『じゃあ、そろそろ行くか？ もう行かないと遅刻しちゃうよ』

『あつ、はい』

部長と共に店を出た。部長にだけだが現状をカミングアウトする事で少しは気が楽になった。だが、まだ何も解決していない。

部長は大丈夫だと言っているが、ホントに大丈夫なのかな？

『ふーん、そうなんだ。大変だったね』社長は、そうかそうかと  
言いながら蓄えた口髭を大事そうに指で撫でている。

『じゃ、社長も驚かないんですか？』

ふーんって……。

『ん？ 驚いとるよ。だが、河西君がキミの事を蓮見君だと言つと

るんだからそうなのだろう？ 顔もソツクリさんだしな』

『いや、だつて男が女になつたつて……しかも妊娠ですよ?!』

『そんな事もあるんじゃないか？ 人生長く生きていれば一回位』

ないでしょ、普通……しかもそんなに長く生きてねえし……。

『科学では証明出来ないものなんていくらでもあるよ。で、蓮見君の担当してた所はどうする?』

『その事ですがあ、安藤君に任せようと思っております。』

『ああ、じゃあ蓮見君は安藤君の補佐をしてあげてくれ』

『あ、あの? ……クビじゃないんですか?』

『クビ? なんで? キミ、辞めたいの?』

『いえつ、とんでもない!』

『ならいいじゃない。キミは元に戻るまで内勤ね』

『は、はい! 宜しくお願い致します!』

………んっ?!

『ん? どうした?』

『あつ、すみません……ちょっと気分が悪くて……』

『ああ、悪阻かい? いいよ行きなさい』

『蓮見君、後で僕のデスク来てねえ? 皆に紹介するからあ』

『ふ、ふあい……うっぷ……失礼しますっ』

俺は急いで社長室を飛び出し、喉まで出かかっている物質の始末をする為、トイレへ向かつて駆け出した。

社長室を飛び出し一目散にトイレに駆け込む。中には洋式トイレのドアが2つ。両方空いてる。すかさず一つのドアに飛び込み鍵をかける。清掃員のオバチャンがキレイに掃除してくれた後なのか、便器は電灯の光を反射させ輝いている。

『お、おうええ！』

みるみる内に便器は、その輝きを失ってゆく。それと反比例するように、俺の吐き気は少しずつ治まってきた。吐いたのなんて何年ぶりだろうか。俺は汚物で汚れた便器の水を流した。

ドアを開け、トイレの洗面台を見ると、いつの間にか入ってきたのか、一人の男が髪をセットしていた。今にも鼻歌を歌いだしそうな陽気な後ろ姿で髪をセットし続けるその男の名は安藤遊人。あんどうゆうひと俺が働く営業部の後輩だ。合コンが三度のメシより好きな、名前負けしない遊び人だ。河西部長が、俺の仕事の引継ぎ対象に選んだのがコイツだ。多分、仕事より合コン命のコイツを少しでも成長させるようにと選出したのだろうが、コイツに引継ぐのはあまり気が進まない。

取引先先に迷惑をかけなければいいけど、などと思いつながら隣の洗面台で手を洗う。

『あ、おはようござっ………！?』

『あー、おはよう………ん?』

安藤は挨拶を返す俺をしきりに見つめてくる。　ん?　なんだ?  
?　気持ち悪いいな……。

ふと、視線を正面に戻すと、見つめてくる理由を唐突に理解した。

『ち、痴女だぁぁ!』

男子トイレに誤解を含んだ安藤の声が響き渡った。

我が職場では毎日、社内朝礼が行われる。社内朝礼といっても、各部署ごとに行うミーティングのようなもので、各グループが昨日までの業務及び進捗と、本日の業務予定を報告し合い、最後に日替りで一名、プライベートで最近あった出来事などを発表する。

今日もこの時間がきましたね……。

俺は、この『一人一言』が大の苦手だ。人前に立って何かを発表する事がダメなのだ。会議等での資料説明や意見等の発言、また、客先でプレゼンしたりするのは問題ない。内容的に自信もあるし、何より仕事だからだ。だが、この朝礼での一人一言は別である。何を話せばいいかわからない。発言するからには皆が聞いて良かったと思えるような内容でなければならぬ。そうでなくては、この一人一言は単なる自己満足的余興で終わってしまう。

ここは会社だ。これも仕事なのだ。であるならば、この発言も皆の仕事への意欲を引き出し、作業効率を向上させ、最終的には業績に結び付くような内容でなければならぬはずだ。

しかし、俺のプライベートなんてものは、そんな芸当が出来るような内容ではない。というより、プライベートな発言で、そんな事出来るヤツいないだろう。なのであれば、こんなコーナーなんていないんじゃないのかとも思ってしまう。時間も勿体ない。そんな事を昔部長に言ってみたが却下された。多分部長はあのコーナーが好きなのだ。

朝礼についての不平不満が頭の中に充満していく。だが、突然発生した睡魔がそれをとつてもない勢いで掻き消していく。女の姿での出勤初日というプレッシャーにより十分な睡眠を取れなかった。込み上げる欠伸を我慢していると、涙で濡れた目に見覚えのある人

物が映った。

あ、安藤……。

安藤はずっとこつちを観察していたようだ。目が合うと気まずそうに視線を逸らしたが、すぐにまた、こちらを見ては視線を逸らすという行為を繰り返している。口元は少し引きつっている。

完全に俺の事、痴女だと思つとるな。悪阻による吐き気で焦っていた状態だった為、いつものノリで男性用トイレに入ってしまった。よく考えれば、今の俺は女の姿なのだから女性用に入らなければならなかった。

こんな女の姿をしていて男性用トイレをうろろろしてれば痴女だと思われても仕方がないか……。でも、俺は元々男なのだから、やはり女性用トイレは気が引けるよな。これからどーすっかなあ？

色々な事に思いを巡らせているうちに朝礼は一人一言のコーナーを残すのみとなっていた。今日は誰の番だったか忘れたが、俺の番でない事は確かだ。先週やったから当分回ってこないはず。

『 それではあ、今日の一人一言は西野君だったかなあ……あ、忘れてたあ……蓮見さん、ちよつとちよつとお』

『 ……は、はい？』

司会進行役の河西部長が呼んでいる。

………ま、まさか………だろ？ ……いや、やっぱりそうか………。

河西部長はこの朝礼の場で俺を紹介する気なのだ。女になってし



まったこの俺を。河西部長と社長にカミングアウトしてすっかり安心感に浸ってしまった。当たり前前の事だが、同僚にだって説明は必要なのだ。先週まで一緒に仕事をしていた男が、今週末たら女の姿で会社にいるのだから。説明しなければ誤解を招くだけだ。まあ、説明したところで納得するとは思えないし、どちらにしても見世物になるのだから、遅かれ早かれ通らなければならぬ道である事には変わりはないのに、すっかり忘れてしまっていたのだ。

『蓮見さあん、早くう』

まずい。こんなの、一人一言よりキツイじゃないか……。だが……し、しょうがない！

俺は意を決して河西部長のもとへ向かった。睡魔は完全に吹き飛んでいた。

『……はい、皆さん聞いてくださあい。えー、こちらの方ですがあ、皆さん、誰だと思えますかあ？』

なんつーフリだ！ さつき『蓮見』って呼んでたじゃんか！ うわあ、皆ザワザワ言ってるよあ。『あれ、蓮見さんじゃない？』とか言っちゃってるよあ。そんなフリいらねえからさつきと説明してくれ！

恥ずかしい。顔を上げていられない。頭に血が登り、耳が真っ赤になっていくのがわかる。

『この人はあ』

き、来たー！

『蓮見君のお』

いやあー、やめてええ！

『お姉さんの蓮見瑞穂さんと言いますう』

のわああああ、へっ？ お姉さん？ 瑞穂？

『蓮見君は、突然ではありますがあ、奥様のご実家の家業の手伝いの為、休職する事になりましたあ。当分の間あ戻りませんので、戦力の穴埋めとして、蓮見瑞穂さんに我が社に来て頂きましたあ。皆も知つての通り、蓮見君は我が営業部のエースでしたがあ、お姉さんの瑞穂さんは、なんとあの大企業であるT社の営業部で活躍した方でありますう』

ティ、T社つて……業界トップじゃないか。

『一身上の都合によりT社を退職してありましたところお、蓮見君の代わりに我が社に来て頂ける事となりましたあ。ただ、瑞穂さんは現在妊娠しておりますえ、今年の終わりには出産の為休暇に入りますう。ですので、蓮見君の担当は、安藤君が引継ぎ、瑞穂さんは、そのサポートという形でやっていきますう。安藤君、よろしいですかあ？』

『えっ？ は、はい、イイっすけど、俺、蓮見先輩の営業先とか全くわからないですよ。』

『それは心配ないですよお。この瑞穂さんが、この土日ですべて引き継いでいますう』

『『おおっ！』』

皆がどよめいている。確かに俺の担当してた仕事があった二日で

一人の人間が全て引き継いだって言ったら誰だって驚くだろう。

『マジっすか?!』

『マジっすよお。ですので、安藤君は瑞穂さんのサポートでしっかり頑張つて下さいねえ? では、紹介はこの辺で、挨拶も兼ねて、蓮見瑞穂さんに一人一言をしてもらいましょうお』

へっ? ……へえええっ!?

思わず顔を上げると、河西部長は満足気な表情を浮かべていた。

「どう? これ以上ない紹介だったでしょお?」とでも言いたげに微笑んでいる。よくよく考えると、強引な部分は否めないが、確かにうまく紹介をしてもらった。姉であれば、顔が同じなのも説明がつく。妊娠だつておかしな話ではなくなる。休職にしてもらったのも良かった。身体が戻れば復帰出来るし、姉の存在は退職扱いにすればいい。だが。

……一人一言はないだろがぁ!

『さあ、蓮見さん』

部長は微笑んでいる。西野君でいいじゃないか、と心で叫びながら、俺は蓮見瑞穂として初めての一人一言を行った。部長と西野君を軽く恨みつつ。

## 15・ボロが出る

女の身体になつての初出勤。

朝礼は河西部長の余計な計らいで散々だったが、仕事は特に問題なく進める事ができた。人に仕事を教えるのは一苦労だが、これはこれでやりがいがあった。

今までは、自分の仕事は自分で片付けるをモットーとしてきた俺は、人に手伝ってもらふ事は疎か、作業を後輩に教えるなんてしてこなかった。自分でやったほうが早いし、正確だとも思っていたし、何より面倒臭かったからだ。だが、今回は話は別だ。

自分で外回りは出来ないとお願ひした手前、人に仕事を引き継ぐ事は避けられない課題だ。また、初めは見ると合コンの事しか頭になさそうでやる気のない安藤に引き継ぐ事になり、不安は頂点に達していたが、良い意味で予想を裏切る程の真面目さで説明に耳を傾けてきた。

他人に教える事で、自身が行ってきた仕事上での反省点も見えてきて、コレはコレで逆に学ばせてもらった。様々な改善点を思い浮かべながらの引継ぎは中々進みは悪かったが、かなり実のあるものとなった。今は瑞穂となつてしまった俺が、あつちこつちから資料を取り出して説明するのを見て、引き継がれている安藤はもとより、周りの同僚も驚きの声をあげていたが……。元々自分のデスクとはいえ、今は別人として使うからには、もう少し慎重にならなくてはと思った。

昼のチャイムが仕事の進行を止めた。待つてましたと言わんばかりに席を立つ社員達。

『僕、外に食べに行きますけど、一緒にどうですか？ それともお弁当持ってきてます？』安藤がランチを誘ってきた。

いつもなら隣のビルにあるコンビニでカップラーメンとおにぎりを買ってきてデスクで食べている。「蓮見瑞希」ならばその行為も許されるが、今の俺は「蓮見瑞穂」という女性キャラ。さすがにデスクでカップラーメンはまずいかと思っただが、今日は菜々子にお弁当を作ってもらい持参していた。営業という仕事柄お得意さんとの外食が多い為、日ごろからお弁当を作ると言ってくれていた菜々子の好意をいつもは断っていたのが、今日に限っては菜々子曰く「瑞希の門出の日だから」とのワケのわからない理由で用意してくれていたのだ。

『すみません、お弁当なんです。誘って下さって有難うございます』  
『あ、やっぱりそうですか？じゃあまた今度行きましょう』

敬語じゃなくていいですよ、と言う安藤。午前の仕事から幾度となく出てきた言葉だ。確かに俺は彼の先輩だし、「蓮見瑞穂」も年齢的にも営業キャリア的にも安藤より上なのだから、あえて敬語でなくともよいと思う。だが秘かに俺は、社内においてはいかなる場合も敬語で貫く事を心に決めていた。なぜなら、タメ語で話すとボロが出そうだからだ。

俺は通常タメ語の時の一人称は「俺」で通している。女性であるはずの「瑞穂」が「俺」はさすがにマズイだろう。たまにそういう女性もいなくはないが、大手企業で敏腕営業ウーマンだった女性が、得意先以外では「俺」で通しているのは明らかに不自然。

しかし、いざコイツに敬語使うとなると、なんか変な感じがするな。

そんな事を考えながら外食に向かう安藤に手を振っていると、背後から呼ぶ声がした。

『あの〜、蓮見さん？』

『ん？』振り向くと、同僚の女子社員が三人、並んで立っていた。

色白で温室育ちが身体から滲み出ているおっとり世間知らずの駿河明日香。

胸まで伸びた艶のある髪を指先で弄りながら携帯を操作している今年の新入社員、蒼井渚。小中高と生徒会長、前世も絶対に生徒会長だと噂のある、島谷真澄。

ゲツ、島谷。なんだ？

俺は、この島谷真澄が苦手だった。

年齢は知らないが、俺にとっては先輩に当たる人物。それをいい事に昔から何かにつけて文句を言ってきたり、仕事やコピーを押し付けられたりしていた。今でもたまに被害に会う。

『な、なんですか？ 島谷さん』

『えっ！？ もう私の名前覚えてるんですか？ すごいですね！』

『へっ？ え、ええ、まあ』

しまった！

『さすが、T社のエースだっただけありますね？』

『い、いえ、そんな、ははっ』

話デカくなってねえか？

しかし、まだ紹介も受けてない人間の名前を入社一日目で覚えているのは確かにおかしい。島谷は勘違いしているが、今の俺は彼ら

にとって初対面なのだ。気をつけねば。勘ぐられてはマズイ。笑い者ではすまない。

ついさっき、女子トイレで用足してきたばかりだ。ここでバレたら変質者扱いだぞ。

『あの〜?』想像上の同僚達の白い目に畏怖の念を抱いている俺に、島谷が声をかけた。

『はっ、はい!』

『大丈夫ですか? 気分でも悪いんですか?』

『い、いえ、大丈夫です。えっと……?』我に返った俺は、視線で用件を促した。

『ああ。あの、蓮見さんはお昼どうされるのかなって。もしお弁当でしたら、一緒にどうですか?』

『あ、ああ。えーっと……』

マズいな。

この三人は、いつも昼になると会議室で弁当を食べている。どんな会話をしながら食べているのかは知らないが、どうせ 課の x さんが さんと付き合ってるだとか、特別大事な話でもないのだろう。今日は、いきなり現れた「蓮見瑞穂」なる人物をメシの肴にでもしようといったところか。

ボ口を出す可能性を考えると、あまりご一緒したくないのが今の心境だが、せつかくの誘いを無下に断るのも今後の職場環境を考えるとマズイ。かといって、今回一緒に食べてしまうと、今後も「お弁当四人組」になる可能性も充分にある。

これから会社内でボ口を出さずに済ますには、可能な限り同僚との接触はさげたいが

『……あの〜?』

『あつ、は、はい、是非ご一緒させて下さい』

『良かった。向こうに会議室があるんですけど、いつもそこで食べてるんです。行きましよう』

『はい』

仕方がない。

女になってしまった時は、すぐに戻るだろうと思っていたが、実際はいつ戻るかわからないのだ。甘い夢を見て、現実から逃げる出すより、今は現状を受け入れて、如何に周りと上手くやっていくかを考えよう。ボロは絶対出さないように打ち解けていけばいい。そう決意を固めた俺は菜々子特製の弁当を抱きながら、島谷達の後をついて行った

『蓮見さんて、弟さんに良く似ていらっしやいますね?』

『えっ、あ、そうですか?!』

この上なくビクつきながら。



## 16・破滅の音

懇談室。

島谷達は、キャビネットに三方を囲まれて出来たスペースに、椅子とテーブルを窮屈に押し詰めホワイトボードで外界への入り口を塞いだその場所を、愛着を込めてそう呼んでいた。

少数数の打ち合わせなどに使用し、大抵は休憩所に使われているこの会議室を、昼は彼女達が占拠するのだ。

キャビネットとホワイトボードが防音効果を生み、声はあまり外に漏れない。

彼女達が昼食を取りながら何を話しているかなど大して気にもしていなかったが、いざ自分がその場に存在してみると、緊張し少し鼓動が速くなつた感覚に陥った。下手な発言で、正体がバレてはマズイとの焦りからくるものだと思うが。

『それじゃ頂きましょうか？』島谷が昼食スタートの合図を出すと共に皆一斉に弁当箱を開けた。

段々と緊張も溶け始め、落ち着きを取り戻してきた俺も、弁当箱の包みを解き、箱を開ける。

『っ！？』

ガタッ！

『！？』どうしたんですか、蓮見さん？』携帯を弄りながら卵焼きを頬張ろうとした蒼井渚が顔をしかめながら問い掛ける。

『い、いえ、はははっ』俺は答えながら、もう一度弁当箱の中身を確かめた。

数秒前に開いた弁当箱の中身に驚いた俺は、皆に悟られる前におもいつきり弁当箱の蓋を閉めたのだ。記憶が確かなら、中身はウインナーや卵焼きやらアスパラガスのベーコン巻きやらで賑わっていたはず。問題は御飯の部分にある。

俺は基本的に白米が好きだ。炊き込みご飯より白米。赤飯より白米。だが海苔弁は好きだ。それを知っている菜々子は、御飯に海苔を乗せてくれた。「ガンバってね」という文字とハートマークの形にして。二度目の確認も結果は同じだった。

……最悪だ。こんなの皆の前じゃ食べられない。

いつもなら「奥さんの愛情感じるお弁当ですね？ 瑞希さんは愛妻家で、よっぽど家庭サービスしてるんですね」なんて会話で済ますことが出来るが、今はそうはいかない。どう考えてもこの弁当はおかしい。

マズい、どうする？ 旦那が作ってくれた事にするか？ ……いや、ダメだ

よく見ると端の方に「妻より」と海苔文字がご丁寧に添えられている。

これじゃ瑞穂に「妻」がいる事になる。

同姓愛で通すか？ ……いや、ダメだ！

苦し過ぎる。俺のなりはどう見ても女だ。「実は私旦那なんです」なんて話を通じるワケがない。しかも妊娠しているという矛盾が生じる。焦りで上手く考えが纏まらない。考えれば考える程どうすれば良いかわからなくなる。

『あれ？ そのお弁当……？』隣に座る島谷の声。

！？

気付かれた。終わった。行き当たりばったり、成り行きと偶然が交響曲を奏でるかのような計画ではあったが、「男に戻るまで瑞穂に成り済まして会社でうまくやっていこう計画」は絶望の音を立てて崩れ落ちた。

『蓮見さん、アナタって』

そうなんです。変態なんです。女子トイレ入ってすみません。

『おつちよこちよいなんですか？』

そうなんです。おつちよこちよいで、女子トイレに………へっ？

『えっ？ おつちよ………？』

『あ、気に障ったらごめんなさい。敏腕の営業ウーマンって聞いたから、ちよつと以外だなんて。それ旦那さんのお弁当持って来ちゃったんでしょ？』

『えっ？……あ、はい』

『でも、蓮見さんの愛情感じるお弁当ですね？ 旦那さんは愛妻家で、よつぽど家庭サービスされる方なんですね。羨ましい』

『い、いえ、そんな……。』

そ、そう取りましたか。よくよく考えればそれが一番自然な取り方だろう。さっきは全く頭が回らず、そんな考えに行き着かなかった。なんて事はない。こんな簡単な答えが石ころのように転がっていたのに、焦りで脳全体が盲目になり、全然気付けずにいたのだ。

歴史上の偉人達が解ききれなかった、世の中に存在する超難解な問題も、実はその辺、目と鼻の先に幾つものヒントや答えが転がっているものなのかもしれない。俺はそんな事を考えながら、菜々子の作った弁当を感心しながら眺めている島谷を見つめていた。

毛嫌いしてたけど、良いヤツだな、コイツ。

俺は今後瑞穂として生活していく中で、島谷とうまくやっていけそうな気がしていた

『そういえば、蓮見さんて旧姓ですよ？ 夫婦別姓なんですか？  
あ、初対面でちょっと踏み込み過ぎですよ？ ……でも気にな  
っちゃっ』

が、その想いは一瞬にして塵となり消え去った。

## 17・愛してるんです

懇談室では昼食を取り終えた島谷がホワイトボードに何やら書き出し始めた。

彼女は、先程まで弁当をつつきながら俺に対する質問攻めを繰り返していたが、ある程度気が済むと、「じゃ、始めますか」と蒼井と駿河に合図をし、行動し始めたのだ。

ちなみに島谷からの「何で結婚してるのに蓮見性を名乗っているのか？」という質問に対しては、「戸籍上はちゃんと旦那の姓になっていますが、職場では呼ばれ慣れている旧姓で通してます。まだ結婚して1年しか経っていないので……」という、我ながらフラインプレーな返答で事無きを得た。また、年齢はややこしくなるので瑞希と同じ年で一卵性の双子とした。双子で通さないと、顔が似過ぎてると言われ兼ねないからだ。

『……よし、準備OKと。じゃ、まずは明日香ちゃんから報告して』何かの前準備が終わったのか、島谷はホワイトボードから向き直り、駿河を指名し発言を促した。

『はい』駿河は返事をする何やら紙を取出し発言し始めた。

『まずは営業の西野君と経理の宮川さんですが、この二人は確実に付き合ってますね。今度のGWは沖縄旅行だそうです。情報源は……』淡々と報告する駿河。

島谷は、「フムフム」と相槌を打ちつつ、その報告内容をホワイトボードに描かれた相関図のようなものに反映していく。ふとホワイトボードの内容に目をやると、そこにはぎっしりと社員名と社員間の関係が傍線と共に関連付けされていた。社員名中に河西部長の名前を見つけた。河西部長の名前にはあちこちの社員名から傍線が繋がられ、「尊敬」という文字を添えられている。また、河西部

長の人物説明には「靈感あり」と書かれている。

ふーん、なるほどね。

ここ「懇談室」で毎昼行われていたお食事会は、俺の予想通り社内の噂話の類이었다。ただ、ここまで徹底的にやっていたとは予想以上だ。島谷の表情は生き生きしていて、さながら探偵気分といったところなのだろう。学生時代にあった新聞部の延長みたいなものか。

『じゃ、次は渚ちゃんね……ん？ どうしたの？』

ん？

島谷の疑問符につられ、俺は蒼井の方に目を向けた。蒼井は島谷の質問に、携帯を弄りながら無言で対応する。

お、おい、先輩が呼んでるぞ？ 返事しないでいいのかい？

俺は少し心配気に蒼井の顔を伺った。

ふと、蒼井と目が合う。彼女は何かの仇を見るかのような睨みを利かせ、俺を見つめている。

お、俺が何かしましたか？

『渚ちゃん、聞いているの？』明らかに先程とは違う空気を孕んだ声が島谷から発せられる。若干、威圧気味に呼ばれた蒼井はようやく島谷の方を向いた。

『どうしたの、渚ちゃん？ 次は渚ちゃんの番よ。』島谷はホワイ

トボードを指差して蒼井に報告を促す。

『……なんかつまらないんです』

『ん？』

『……蓮見先輩がいないからつまらないんですー！』

『蓮見さんならソコにいるじゃない』ホラっという具合に俺を差し  
て言う島谷。

その通り。

『じゃなくて、瑞希先輩のほうですー！』蒼井は言い終わると、こ  
ちらを再度睨んだ。

だ、だから何で睨むの？

『（私だってパシリがなくなって残念だけど）それは仕方がない  
事でしょ？ 蓮見君にも事情があるんだから。ねえ、蓮見さん？』

『え、ええ、まあ。』

何か心の声が聞こえたような気がしましたが？

『すみません、この子私の従妹なんです。今年新入社したんですけ  
ど、蓮見君の事好きだったみたいで』

『ええっ、そうなんですか？』

そういえば、コイツ新人歓迎会の時に腕組んで離れなかったな。  
でも、まさかな……。

俺は既婚者だし、その前に、蒼井とはそんなに接点を持った覚え  
が無い。新人歓迎会で初めて話をしたくらいだ。

『違いますー！』

ほーら、やっぱり。

『好きとか、そんなレベルじゃないです！愛してるんですっ！』

ほーら、やっぱり……はあ！？ な、何を言いだすんだコイツは？ 愛してる？ 何を根拠に愛しているなどと。俺には愛する妻子がいるというのに。まったく迷惑な話だ。そうだ、コイツは何か勘違いをしているんだ。そうに決まっている。今のうちに目を覚まさせてあげなければ。

『あー、何かの間違いじゃ……？』

『はあ！？ アンタに何がわかんによ！？』

なっ！？

『ちょっと渚ちゃん！ その人は蓮見君のお姉様よ。マズイでしょ？』

そ、そうだよ、何だよまったく。

『だって、この人の所為で蓮見先輩がいなくなっちゃったんじゃないですか！』

……はあ？

『ち、違つわよ渚ちゃん？ 蓮見君は奥さんのご実家の都合で休職したのよ。蓮見……あー何かややこしい、瑞穂さんは蓮見君がいなくなるから助つ人として来たの。わかる？』

『……えっ？ ヤダ、そうなんですか！？』



『そうなんです。』

そーゆー事になってます。つーか、なんで知らねえんだよ。

『まあ、しょうがないよね。渚ちゃんは10時に来たんだし。朝礼出てないし』

なんで重役出勤？ しかも、しょうがないの？

『蓮見さん、ごめんなさい。誤解してました』蒼井は自身の非を認め頭を下げてきた。

ずっと機嫌が悪く、俺（瑞穂）を睨んでいた理由は、「我が社が、スーパー営業ウーマン蓮見瑞穂を雇う事になったから代わりに瑞希が首にされたんだ」と若い想像力が判断した為らしい。代わりに誰かがリストラに遭うと想像するのはいいが、なんで瑞希だと思ったのかというと、「どうせ同じ顔が入ってくるんだから瑞希の方はいらない」と上層部が決めたのだと思っただとか。そんな理由で人ひとりリストラする会社って……。

よくもまあ、そこまで想像できますな？

まあ、蓋を開けて見れば単なる誤解。別段気にする事でもない。今問題なのは、蒼井が瑞希を愛していると勘違いしてしまっている事だ。さっさと目を覚まさせてやらなくては。

『いえ、いいんですよ。そんな事より話の続きを』

『あのう………？』

『『『ん？』』』

島谷と、いつの間にか立ち上がっていた蒼井、そして俺が声のし

た方へ向くと、駿河が我慢の限界とばかりに声を掛けてきた。

『早く続きやりましょうよー！』

おっとりした駿河が毎昼の噂話に顔をだしているのは、「先輩との人間関係を崩さない為仕方なく」ではなく、人一倍率先してという事が分かった。

その一言により、「蒼井の勘違いの目を覚まさせてやろうよ作戦」は、また後日に持ち越しとなった。

その後、人間相関図とにらめっこしてああだこうだと話し合う三人に付き合うことで、昼休みという貴重な時間が儚く消えていった。

## 18・女性の戦場

暗く沈んだ人々がひしめく空間に春の陽光が差し込む。

そのキラキラと輝く細かな粒子は、一人ひとりの状況により異なるものの、その場にいる者達の沈んだ気持ちを浄化する役目を、多かれ少なかれしっかりと果たしていた。

茂宮総合病院。

造り自体は古いが、総合受付のあるロビーは、周辺に大きな建物がない為に遮断される事なく注ぎ込む太陽の光を取り込み、室内の明るさが保たれ居心地の良ささえ感じる。

床や窓、壁の清掃を始め、観葉植物などの手入れもすっかりとゆきとどき、院内は清潔感に溢れている。

それに加え看護師達の笑顔や献身的な看護は、病気という目に見えない鎖を優しく解いてくれるような安心感を与えてくれる。

俗に言う「名医がいる病院」というだけで人気があるわけではないようだ。

でも、俺の心はそう簡単に救えないけどね。

俺はそんなことをぼんやりと考えながら、自分の名前を呼ばれるのを待っていた。

といっても呼ばれるのは偽名だが。

財布から健康保険証を取出し氏名欄に表示されている自身の名を確認した瞬間、受付が待ち望んでいた名前を呼ぶ。

『蓮見さーん。蓮見菜々子さーん』

『はい』

俺は健康保険証を財布にしまい、窓口に向かう為ゆっくりと立ち上がった。

初検診から一週間。

二度目の検診に来いと茂宮から要請があつた為、嫌々ながら来院した。茂宮からは、その際は菜々子の健康保険証で診察を受けると言われたのだ。何故なのかはさっぱりわからんが、取り敢えず医者である彼の言うとおりにしようと、菜々子に借りてきた。

受付に行くと、問診票と、提出していた菜々子の健康保険証が入ったクリアファイルを渡され、茂宮のいる産婦人科に向かうよう促された。

確か、3階だったな。

茂宮のいる産婦人科に着いた俺は、受付にクリアファイルを提出する。待ち合い用のソファを見ると、かなりお腹が大きくなつた20代半ばの女性と、そんなにお腹が目立たない同い年くらいの女性が話していた。多分旦那であろう男性がお互いの隣に座っている。

ソファーは他にも4脚程あつたが、全て妊婦さんやら付き添いの旦那や子供が座っていて空いてるスペースはなかった。

普段は電車やバスに乗つたり、病院の待ち合いの場においても、あまり座つたりはしないのだが、女性になつたのが原因か、はたまた妊娠が原因かはわからないが、身体が疲れやすい。

しかし、座るスペースはない為、傍らにある階段に腰掛けようとした時、先程から隣の女性と会話をしていたお腹の大きい妊婦が声を掛けてきた。

『ねえ、あなた、ココ座って。……ほら、アンタ邪魔よ！ 男は立ちなさい！』

その女性は、隣にいた自分の旦那であろう人物をソファから押し出し、俺に空いたスペースに座るよう促した。

うわ、可哀想。それはチョット座りにくいですよ。

『あ、大丈夫です。私はココに座りますか 』

『良くないでしょ！ ……そんな冷たい地べたに座ったら身体冷えちゃうわよ！ お腹の赤ちゃんが可哀想でしょ？』

『そうですよ。すみません気が利かなくて。どうぞ』

強引に立たされた旦那まで着席を促す。

座らない……ワケにはいかないか。

周りの付き添い男性達も、その光景を見て一斉に立ちだす。いや、そんなに空席必要ないから……。

なんか悪いことしたなあ、と思いながら、とりあえず先に空けてもらったスペースに座ると、先程のお腹の大きい妊婦が話し掛けてきた。

『ホント、気が利かないよね男って。私、佐藤雪っていうの。宜しくね』

『あ、私は蓮見……菜々子と言います。なんかすみません。旦那さんに悪いことしちゃいましたね』

『旦那？ 誰が？』

『えっ？ 今席を譲ってくれた……えっ？ ええっ？』

『さっきの私の旦那じゃないわよ。赤の他人』  
『あ、そ、そうなんですか』

赤の他人にしてはすごいプレッシャーかけてましたよ。  
その席を譲ってくれた人物を探すと、斜め向かいに座っている妊婦の傍に立ち何やら話している。多分彼女の旦那だったのだろう。ふとその妊婦と目が合い有難うの意を込めて会釈すると、彼女が話し掛けてきた。

『すみません、ホントにウチの旦那ったら気が利かなくて』  
『いえ、とんでもない。有難うございます』

30過ぎ位か。とても落ち着いた雰囲気を纏ったその妊婦は、笑みを浮かべ首を横に振った。

『お礼なんていいんですよ。ここは女性が子供を産むための場所だし、その準備を整える場所。平たく言っちゃえば女性の戦場ですよね？ 今から戦う女性を差し置いて男が我が物顔で座っていられたり迷惑だつて、今旦那に言つてたところなんですよ。ゴメンなさいね、私も気が利かなくて……』

そう言つと、旦那を席から追い出した雪に顔を向け微笑みを浮かべた。隣を見ると雪も軽く会釈し微笑みを返していた。

『……てワケで、この病院に来たの。ここは、どの先生に当たつて

も名医だつて聞いてたけど、本当に良い先生揃いよ  
『そうなんですか……』

しかし、スゴい喋るな、この人……。

さっきまで隣で話をしていた妊婦は先に検診を終え帰ってしまった。

彼女はずっとこの集中攻撃に耐えていたのだ。思い出してみると、彼女も苦笑いを浮かべていたような気がする。『それでね、その時、先生なんて言ったと思う?!』

『んー、なんて言ったのかなあ』

『佐藤さん、佐藤雪さん2番にお入り下さい』

『あ、呼ばれてますね。』

『あ、ホントだ。じゃ、またね。……はい』

俺がここに着いてかれこれ一時間半は経過していた。あの様子だと、それ以前も相当喋り倒していたはず。雪はその疲れを微塵も見せる事なく意気揚々と、2番のプレートが掲げられたドアの向こうに消えていった。

## 19 産みのお父さん？

『おっせえなあ畜生！ …… あっ ……』

産婦人科の待ち合いロビーに着てから既に二時間が経とうとしているが、一向に呼ばれる気配がない。日頃風邪などを引いても隼人から「試してくれ」と言われて受け取った薬を服用し、それで十分治ってしまったていた俺は病院に通う事など滅多にない為、普通どれくらい待たされるか見当がつかない。

昨今、確かに産婦人科医も不足しているというが、ココは5人もその医者がいるはず。いくらなんでもこれは待ちすぎじゃないかと苛々が頂点に達した時に思わず洩らしてしまったのが、先程のセリフだ。勿論、畜生とは茂宮の事を差している。

イカンな。気が弛みすぎてる……。

二時間前の混雑が嘘のように引いていた事で周りに人がいなかったのと、声もそんなに大きくなかった事が幸いした。こんな場面を職場の連中に見られたら……。確実に懇談会ホワイトボードの備考に「変態」だとか「痴漢」だとか追記されて白い目で見られるに違いない。考えただけでも悪寒が走る。

『蓮見さん、蓮見菜々子さん。2番にお入り下さい』

失言直後にようやく入室を促された俺は、疲れた身体を軽く伸ばした後、診察室のドアノブを回した。



『おまたせ〜』

診察室に入ると、茂宮が若干疲れ気味に手を振って迎えた。

『おまたせ〜っじゃねえよ！ 全く何時間待たせやが……ん？』

待ち時間の長さに鬱憤が溜まり、文句の一つでもと思っていた俺に、サイン（合図）を送る茂宮。人差し指を口元に立てている。

なんだ？

『（なんだよ、シーツて？）』理由はわからないがとりあえず小声で問い掛ける。

『（ダメでしょ、そんな言葉使いしちゃ？ アナタは今日から「菜々子ちゃん」なんだから）』

『（はあ？）』

菜々子ちゃん？

『（今日の看護師はこの間のコ達じゃないから、アナタが「菜々子ちゃんじゃない」ってバレルとマズイでしょ？）』

茂宮は後ろで医療器具棚の整理をしている看護師を意識しながら両手の小指をバツの字を作った。

『（マズイ？ なんで？ 意味がわからん。もうちょい解りやすく説明出来んものか？）』

『（はあ、いつからそんなお馬鹿さんになったのかしら？ 時の流れは怖いわね。昔はもう少し賢かったと思うけど……）』

『（ほっとけ！ ……んで、なんでマズイんだよ？）』

『(アナタ、今日は蓮見菜々子として診察受けてるのよ？ 病院からしてみたら、身内とはいえ別の人の保険証で診察受けられたら問題あるでしょ？)』

『はあ！？ だって、それはお前がっモガツモグツ』

『(声が大きい！)』茂宮は、音量を上げてしまった俺の口を、咄嗟に両手で塞ぎ話を続ける。

『(今日菜々子ちゃんの保険証で受けてもらったのにも理由があるのよ！ いい？ 子供産むにも育てるにも手続きつてものが気になるの。今後無事に子供が産まれて、育てる環境を整えるのもアナタの大事な役目なのよ。わかる？)』

『(わかっとするっちゅーの、んな事)』

子育ての環境を整える。今は身体が女になってしまったが、既に一児の父として家計を支えてきたのだ。金がかかる事なんて百も承知だ。

『(……で、それと、菜々子の健康保険証と、なんの関係があるっつんだよ？)』

『(関係大ありでしょ？ じゃあ聞くけど、これからアナタが産む赤ちゃんは誰が産んだ事になるの？)』

茂宮の言葉が俺の鼓膜を叩いた瞬間、目が点となった。

『(……お前大丈夫か？ 質問に矛盾が生じてるようだが……？)』

『(……いいから答えなさい)』

なに決まり切った事を聞いてくるのか。だが質問に答えなければ話が進まないと思えたので、俺は一先ず茂宮の要望に応える事にし

た。

『（俺に決まってるんだろ?!）』

『（アナタの名前は？）』 『更なるクエスチョン。もうなんでも答えてやる。』

『（蓮見瑞希。年齢も言うか？）』

『（性別は？）』

『（おと……女か。今はな）』

『（じゃあ、産まれてきた子供のお母さんは蓮見瑞希でいいのね？）』

いまいち茂宮が何を言いたいのかわからない。今日の茂宮君はネジが数本外れているようだ。

『（だから何言ってる）』

『（その子が大きくなって「アナタのお母さんは誰？」って誰かに聞かれたら「蓮見瑞希」と答える。それでいいのね？）』

『……………あ？』

『（アナタが男に戻らない、もしくは戻れないとしたら、それでもいいと思う。でももし戻ったらどうするの？ 明らかに男であるアナタを「お母さん」と呼ばせるの？ 表向きは隠せても、戸籍上はアナタが母親になるのよ？）』

考えもしなかった。産む決意がしっかりと固まった訳ではなかったが、薄々は俺が産まなきゃいけないかもしれないとは考えていた。だが、産んだ後は普通に身体が元に戻って親子四人で仲良く暮らしてメデタシメデタシとしか考えていなかった。まさかそんな落とし穴があるとは……………。

『はあ！？ そんなのダメに決まってムゲツ』

『

『(だから、声が大きい!!!)』茂宮は、再び俺の口を塞いだ。

何かあったのかと、少し離れた場所にいた看護師が怪訝な顔でこちらを見て問い掛けてきた。それに対し、俺と茂宮は引きつった笑顔を向け、なんでもないと返答し、話を続ける。

『(……ど、どうすんだよ？俺がお母さんだったら、菜々子はなんだ？お父さんか？まあ、アイツの性格だったらお父さんでも通いや、通らねえよ！どうすんだよ！？このままじゃ俺、お母さんになっちゃうよ？ねえ？どうすんの!?)』

『(少し落ち着きなさい！まあ、そもそも男であるアナタが子供を産みましたなんて、手続き上に問題が起こるのよ。受諾されっこないわ。その問題を解消する為に菜々子ちゃんの保険証で受診してもらったのよ。とにかく診察しましょう。細かい話はその後ね。大分時間をロスしちゃったわね)』茂宮はそう言つと診察おもむるに診察を始めた。

診察はさほど時間が掛からなかった。待ち時間の長さには反比例するかのように、あまりにも早く終わったので、茂宮が手抜きでもしたのでは、と思うほどだった。その事を本人に確認すると驚きの答えが返ってきた。

『まあ、手抜きって言ったら……手抜きかな』

驚きのあまり、また大声を上げそうになった俺を制止し小声で話を続ける。

『(今日来てもらったのは理由は診察じゃなくて、アナタが子供を産んだ後で、お母さんじゃなくてお父さんなるのに必要なアイテムを渡す為だからね。それには、菜々子ちゃん健康保険証で診察を

受ける事が前提条件にあつたつてこと。妊婦つて言つたつて、前半はそんなに頻繁に診る必要はないのよ」

「（じゃ、早くそのアイテムつてヤツをよこせ）」

「（どーしようかなあ？ キスしてくれたら やだ、冗談よ。歸りに受付で渡すから）」

嫌悪で鳥肌が立ち、憎悪で小刻みに震える俺の右拳を見て、茂宮は診察室の受付を差し答えた。

彼は、女になつちやつた瑞希君には興味ない、と付け足す。

女の瑞希に興味がない。確かに、それが本音なのだろう。彼は身体は男に産まれたが、心は女なのだ。両方ウエルカムな人間もいるだろうが、茂宮は昔から、男にしか興味がない、とも言っていた。

今日の診察待ちの時間が長かつた理由がようやくわかつた。前回は想い人である瑞希が来たと知つた途端に待合いの患者を他の医師に任せたが、今回は女となつてしまつた瑞希が患者なので他の患者と差別しなかつたと言つところだろう。

「（お大事にね）」

入室した時と同じ軽い口調で退室を促す茂宮。 なにはともあれ、茂宮の強力な呪縛から解放された事実を知つた俺は、軽快な足取りで診察室を後にした。

## 20・妊婦友達

『妊娠届出書……ね』

診察室を出た俺は、受付で一枚の用紙を受け取った。菜々子が妊娠した時に一度見たことがあったが、コレが茂宮の言っていた「瑞希がお父さんになるのに必要なアイテム」らしい。

届出者の欄には既に菜々子の名前が印字されている。菜々子の健康保険証で妊婦検診を受け、菜々子の名前で妊娠届けを提出し、菜々子として出産。そしてその子供を菜々子が産んだ子として出生届けを提出する。

『そうすれば菜々子が母親、俺が父親になるって事か』

『はい？』

『い、いえ、なんでもないです』

目の前に看護師がいる事を忘れていた。

看護師の怪訝な視線を背中に受け婦人科を後にする。家では瑞希、会社では瑞穂、病院では菜々子か……なんかこんがらがってきいた。気を付けねーと確実にボロ出そうだな。

一階に戻り、総合受付で支払いを済ませると、背後から呼ぶ声がした。

『菜々子さん』

振り向くと、診察待ちの時に知り合った佐藤雪が大きなお腹を擦りながら立っていた。

『さ、佐藤さん……』

『随分と検診長かつたのね』

『え？ ええ、まあ。佐藤さんはまだ病院にいらしたんですね？』

『やめてよ。雪でいいわよ』

『は、はあ。……ところでどうしました？』

『え？ ああ、アナタの事待ってたのよ。もし良かったら、おいしいスイーツおいてあるところ知ってるから、行かない？ 奢るよ。』

スイーツ……マズいな。

一見美人で気の強そうな顔つきをしているが、接してみるととても気さくで話好きな女性。自分の話をする傍ら、相手の話を引き出す能力にも長けているようで、さっきもマシンガントークの合間に何度か質問を投げ掛けられた。気を張っていてボ口を出す事はなかったが……。

今の状況を考えると、出来る事なら一緒にいたくない人物だ。さっきの調子で会話をしていたら、正体がバレて大変な事になってしまう。ここは断るべきだ。そうだ、断ろう。

『えーと、………ちょっとだけなら』

ダメだ。

断れない。

断る事なんて出来ない。

待合所では気遣ってくれ、とても親切にしてくれた。今だつて、お腹も大きく大変な中、先に検診が終わったのにわざわざ待っていて誘ってくれているのだ。ここで断るなんて非人道的でもんだ。おいしいスイーツにも悪いし。

『ホントに？ 良かった。じゃあ早速行きましょうか』

大丈夫。気を付けねばいいんだから……。すぐ帰ればいいんだし。スイーツ食べてから……。

かくして俺は、スイーツの誘惑……。もとい、雪の誘いを断る事が出来ず、病院を後にした。

目的の店は茂宮総合病院から歩いて2、3分の所にあつた。

『着いた、ここよ！』

自宅マンションからも歩いて30分位の位置なのだが、今までその店の存在に気付かなかつた。茂宮に遭遇するのを恐れるがあまり、この辺りに近づかなかつたのが原因だが。無類のスイーツ好きを自負する俺としては、とんだ誤算だ。

外観は、光沢のある黒で統一された落ち着きのある雰囲気で、どこにもありそうなスイーツショップ。だが、名前をみると

『……………舌鼓？』

『古風でしょ？』

『古風ですね』

中に入ると一階がテイクアウト用の販売エリアで、二階で飲食出来るようテーブル席が設けられていた。



二階に上がり空いてる席を探す。人気のある店なのか、飲食工リアは賑わっていて、なかなか空いてるテーブルが見つからない。

『……あつ、あつた。ほら、あのテーブル』

やっと空いてるテーブルを見つけた。黒い籐椅子に腰掛け、早速メニューを確認する。

『どれにする？』

『えーっと……コレかな？』

『コレね？ すみませーん！』

雪は俺の注文内容を聞くと、自分はもう決まってるそばかりにすかさず店員を呼んだ。

『お待たせしましたっ』

『えーっと……コレとコレ下さい。あと、ブレンドコーヒーひとつ……』

『ブレンドをもうひとつ下さい』

『モンブランシヨコラお一つ、舌鼓シヨートお一つ、ブレンドコーヒーをお二つでよろしいですね？ かしこまりました。只今お水をお持ちいたしますので、少々お待ちください』

マニュアルどおりのセリフを歌を唄うように紡ぎ出した店員は、これまたマニュアルどおりの笑顔を崩さぬまま立ち去っていった。注文の品はすぐに、それこそ水と同タイミングに運ばれてきた。出来上がっているケーキを皿に乗せる程度のものであるので当然と言えば当然だが。

『じゃあ、食べましょうか』

待ちに待った舌鼓ショートを目の前に我慢も限界点を突破した俺は、雪の号令を合図に、フォークを突き刺し口に運ぶ。

『豪快ね』

笑みを浮かべ、俺の食べ方に対する感想を述べる雪。内心「しまった」とも思ったが、俺はケーキを前にすると行儀作法に遵する程の冷静さすらなくす。それほど甘いものに目がないのだ。

『すみません。いつ死ぬかもわからないんだから好きな物は脇目も振らず豪快に食べると、祖父の遺言で』

『あはは、すごいお祖父さんね?』

勿論、ウソである。

俺達は、ケーキを食べ終えた後も、しばらく談笑していた。目的は果たしたが、すぐに帰るのはさすがに悪い気がしたからだ。

『えつやだあ、私ってそんなに若く見られてたの? 嬉しい。』

『私より年下かと思ってましたよ。まさか30過ぎとは……』

『今年、小学校に入学した子供もいるわよ。』

確かに20代のわりにすっかりしているなとは思っていたが。歳は32歳。旦那とは去年離婚して、小学生の男の子と二人暮らしらしい。

『あの人は元々、子供があまり好きじゃなかった。といっても嫌いじゃなかったらしいけど。基本は仕事命。次は女。ギャンブルはしなかったけど……』

最終的には浮気相手の女のところへ行ってしまったらしい。子供が成人するまでと、養育費は払われており、自身も元々はキャリアウーマンで、今まで働いていた分の貯金もかなりあるらしく生活はいたって順調だそうだ。今は来月に迫った出産の為に休暇を取っているらしい。

『仕事も勿論大事なんだけど……生活があるからね……だけどやっぱりねえ。……家族って感じじゃなかった。子供の事、あまり抱っこしてくれなかったし。仕事は朝から深夜まで、休日も仕事、子供と会う時間なんて一週間に一時間あるかないか。ああ、なんか違うなこの人って。家族じゃないなって思ったの』

その矢先に浮気発覚、離婚だそうだ。

始めは、なんて身勝手な男だと思って聞いていたが、一歩間違えれば俺達家族もそうなっていたかもしれないと考えてしまった。無論、浮気など興味もないし、そんな事に現つを抜かすほど暇な時間もない。だが、生活の為とはいえ、家族そっちのけで仕事三昧だった事は否めない。

菜々子の気持ち少しだけわかった瞬間だった。

かなりの時間話し込んでいたようだ。気が付くと、店に入った時にいた客が見当たらなかった。

『じゃあそろそろ』

『えっ？ あ、もうこんな時間？』

その時だった。

俺の背後から声がした。

『あれ？ 雪先輩？』

『えっ？ あ、真澄ちゃんじゃない。どうしたの？』

……真澄ちゃん？

雪の知り合いが後ろに立っていた。  
振り返り確認する。

その人物は、俺の知り合いにも瓜二つだった。

……島谷……にソックリだなあ。

その人物は会社の同僚である、島谷真澄に良く似ていた。  
そう良く似ているのだ。

決して本人ではない。

本人であつてはいけないのだ。

『あれ？ 瑞穂さん？』

俺は、彼女の発した言葉により、逃避先の精神世界から現実世界に引きずり戻された。

## 21・鉢合わせ

目の前に島谷真澄が立っている。

どうやら佐藤雪の知り合いらしく、雪の存在に気付き声を掛けてきたのだが、不覚にも振り向いてしまったのが運の尽きだった。

『あれ？ 瑞穂さん？』

島谷い……。

『「あれ？」じゃねえよ。なんで声掛けちゃうのかな、この人は？ありえないっつーの。よりもよって「瑞穂さん」って。なんでその名前出しちゃうかな、この人は？俺は今「菜々子」なんですよ？ 雪さんにはその名前で自己紹介してるんですよ。おかしいでしょ？ 明らかに「菜々子」が偽名ってバレちゃうでしょ？ どうしてくれるのよ？ ねえ、どうしてくれちゃうの？』

突然現れ、自身を窮地に追いやってくれた島谷に、一通りの「心の声」をぶつけ終わった俺は、現状の打開策を練る為に、舌鼓シヨートの糖分で回転力の上がった脳みそをフル稼働させる。

どうする？

まさかこんな所で島谷に会ってしまうとは。

俺は今、「菜々子」としてこの場所にいる。だが、職場では「瑞穂」だ。その職場の人間が、この場所に現れてしまった。

このままだと、雪には「偽名を使い検診を受けた事」がバレ、島谷には「どうしてそんな事をしたのか」等と質問責めを食らい、最悪、俺が「瑞希」である事を島谷に知られてしまう。

雪に対しては「菜々子」として、島谷に対しては「瑞穂」として接してきたが、こうなれば「菜々子」か「瑞穂」、どちらかを選び、この二人にそれが事実として認識させるしかない。

決して、俺が「瑞希」という男である事がバレるのだけは避けなくてはならない。雪に知られてしまうだけならまだいいが、島谷だけはダメだ。一歩間違えれば、「菜々子」でも「瑞穂」でも「瑞希」でもなく、「変態」である。

この状況をなんとかしなければ……いや、なんとかするんだ……  
……なんとか出来る！

俺は自身に言い聞かせた。

五年の歳月を営業マンとして生きてきたのだ。様々な人種と出会い、どんな人間であろうが、その都度味方にしてきた。どんな困難な状況も、揺るがぬ精神力と強靱な忍耐力、巧みな話術で乗り越えてきた。その経験は、今この時の為にあつたと言っても過言ではない、そんな気さえしてきた。

まず、「菜々子」は偽名、「瑞穂」が本名であると説明した場合  
はどうなるか考える。

瑞穂は瑞希の架空の姉。これは職場において、現在の俺の立場だ。

菜々子は瑞希の嫁。これは職場では知ってるヤツは知っている。

この情報から、瑞穂と菜々子は義理の姉妹ということになり、仮

に瑞穂が菜々子の健康保険証を持っていても不思議ではない。

だが、なぜ「瑞穂が、義妹の菜々子の保険証で診察を受け、菜々子と名乗ったのか」を説明出来そうにない。そんな事をする理由が思い浮かばない。

では、「瑞穂」は偽名で、「菜々子」が本名とした場合はどうか？

この場合、瑞穂という人物は実在しておらず、「瑞希の代わりに配属されたのは、実は妻の菜々子だった」という事になる。

これも、なぜ「瑞希の代わりに働くのに、瑞穂という実在しない人物を作り上げ、演じる必要があったのか？」、なぜ「顔が夫のに似ているのか？」が説明出来ないが、こんなものは黙秘でなんとかなるだろう。人には言いたくない事もあるのだ。

脳をフル回転させ、打開策を考える事、僅か10秒。向かう先は決定した。

俺は「菜々子」だ。二人には、そう納得させる。

ふと、雪を見る。

彼女は顔に疑問の表情が浮かべ、島谷を見上げている。

『瑞穂さんて……真澄ちゃん、この人は蓮見菜々子さんという方よ。今日、病院で知り合ったの』

雪の言葉に、島谷は訝しそくに返答する。

『えっ？ 蓮見菜々子さん？ そんなはずありませんよ。この人は

蓮見瑞穂さんといひまして、先週からウチの職場に来られたんですよ。それに菜々子さんって言ったなら

『あーっ!?!?』

その時、またもや聞き覚えのある声があった。俺も含め3人が一斉に声の方向へ視線を送る。

『……………あの人ですよ』

そう言いながら、島谷は人差し指を声の発信元に向ける。その先では、彩を抱いた本物の菜々子と、隼人がこちらを向いて立っていた。

『瑞希い！ こんな所で何してんのよ!?!?』

俺は、巧みな話術を披露する事なく、「変態」確定の判決を聞いた。

通常は四人掛けのテーブルに椅子を追加し、五人の男女が座っている。

産婦人科で会った佐藤雪。

職場の同僚である島谷真澄。

妻である菜々子と、それに抱かれ嬉々とした表情の彩。



そして、友人である隼人。

『……という事なんです』

俺は雪と島谷に、今までにあつた出来事を全て説明した。

突然、女性の身体になってしまった事。

しかも、妊娠してしまった事。社長と部長には打ち明け、瑞穂という架空の人物として社に残してもらっている事。

医者である茂宮に言われ、診察を受ける時は菜々子の保険証で受けている事等々。

『ウソでしょ？ ……ホントに蓮見君なの？ 女性の身体って……信じられない……』

島谷は、否定的な言葉を吐きつつも、顔は興味津々といった表情で見つめている。

『俺だって毎日そう思ってますよ』

『そんな事より、真澄さん、お久しぶりですね？』

菜々子は俺の言葉を無視するかのように島谷に声を掛ける。

『そんな事お！？ ……ん？ 久しぶり？』

『えっ？ ……あ、そうね。菜々子ちゃんが寿退社して以来だから、もう四年ぶりかしらね？』

真澄さん？ 菜々子ちゃん？

『あれ？ 知り合い？』

『知り合いつて……真澄さんは総務でアタシに仕事を教えてくれた先輩だよ？』

『そうよ、今は蓮見君と同じ営業部だけど、私元々総務部にいたの。それはそれは可愛い後輩だったのよお。それをどこの馬の骨ともわからない男につかまっちゃって。あの時はお姉さん悲しかったわあ』

馬の骨……俺のことか……

『異動した部署にその結婚相手がいるなんてね。嫉妬のあまり、思わずパシリに使っちゃったわよ、アハハ』

……アハハ、じゃねーよ

『ちよつと真澄ちゃん、紹介してくれる？』雪が話に割り込む。『あ、すみません。こちら「本物の」蓮見菜々子さんです。元々ウチの社にいたんですけど、今は……』

『今は専業主婦でーす！』

……でーす、じゃねーよ。どこの合コンだよ。

『私は、佐藤雪です。真澄ちゃんは高校の部活の後輩で、菜々……じゃない、瑞希さんとはさつき病院で知り合ったの。宜しくね』  
『宜しくお願ひします！ 雪さんて、この店よく来るんですか？』  
『うっん、最近発見して、今日で』

女性の会話は続く。

俺の摩訶不思議体験談と、隼人という存在を蚊帳の外に。

『……という事で、この事は黙っておいていただけますか』  
『なんで?』

見事なハモリで俺の意見に反論する島谷と雪。一通り女性陣の  
歓談が済んだのを見計らい、個人情報保護を訴えた答えが店内に  
響く。

『こんな面白いネタをなんで黙ってられるの?』とでも言いたげで  
ある。

『なんでもクソもねえですよ! 今後、男に戻ってからも含めて、  
俺が職場で生きていけるかが係ってるんですよ! 俺が仕事出来な  
いと、菜々子が困っちゃうでしょ!?』

『うーん、それは菜々子ちゃんが可哀想ね?』と島谷。  
『私は面白ければ……』雪が重ねる。

『雪さん、あなたが一番黙ってないといけないんですよ!?!? 俺  
が病院で不正に検診受けてる事言われちゃ困るんですよ!』

『じ、冗談よ。……それより瑞希君、声デカイわよ』

『やべ……と、とにかく、ダメですからね!』

『いいけど、一つだけ条件があるわ』

島谷は人差し指を立てながら、不敵な笑みを浮かべ口を開いた。

雪は、島谷が言わんとする事がわかったのか、顔を見合せて静か  
に頷く。

『な、なんすか?』

『蓮見君は元に戻る方法を探してるんですよ? ……それを私達に  
も手伝わせてよ』

『はあ？』

『大船に乗ったつもりで、ね？ いいでしょ？ もう調べ捲っちゃうわよお』と雪が腕まくりの動作を見せる。

『あ、あのう、雪さんて、真澄さんの部活の先輩って言ってましたが……何部だったんですか？』 菜々子が聞くと、二人は今日二度目のハモリを披露した。

『『決まってるじゃない。新聞部よ！』』

俺は苦笑いを浮かべる事しか出来なかった。

## 22・心境の変化と決意

暗い寝室。

何年も前に衝動買いたお気に入りの時計は一定のリズムで時を刻み続けている。その針は午前2時を差しているというのに、一向に眠る事が出来ない。数日前に聞いた言葉が耳朵から離れず反芻し、どうしても寝付く事が出来ないのだ。

その言葉は、あまりにも衝撃的に響いた。自分が行おうとした愚かな計画を、完全に打ち砕くほどに強く。

瑞希と菜々子の仲を引き裂く計画。

数年もの間抱え続けた菜々子への想い。  
我がものとしたい欲求。

二人の結婚を境に、諦めることを余儀なくされた夢だった。

だが、人は決して万能ではない。

堅く誓い合った絆も、時の流れには逆らえない場合がある。

突然の流木に引き裂かれ、迫りくる岩肌心に削り、激流に飲み込まれる事で、強く結んだ手を離してしまう事もある。

瑞希の仕事の多忙という流木が二人の間に滑り込んだ。

好機到来。

一度は封印した菜々子への想いが甦る。

二人が付き合い始めた時は嫉妬心の操り人形になりかけたが、愛し合う二人を見ているうちにその嫉妬もなりを潜め、結婚式では祝福さえしていた。

菜々子の愛は瑞希に向いている。それでもいい。そう自分に言い聞かせた。彼女が幸せであればそれでいい。菜々子を生涯、陰から見守っていかうと。

しかし、状況が変わってきたのだ。

菜々子は瑞希に不満を持ち始めた。やはり菜々子を幸せにするのは自分だ。二人の間に割って入るのは今しかない。

自然に、少しずつ、だが確実に別れの方向へ持っていく。

その為の伏線を引いていた。ある人物に頼み、瑞希の浮気をでっち上げた。悲しみ激怒する菜々子。

離婚へ一直線……のはずだった。

絶好のチャンスを自らの手で握り潰した。自分は二人の心の橋渡しをしてしまったのだ。

それはなぜか？

菜々子への強い思いが、ある事実を忘失させていた。二人には彩という娘がいた事を。

まだ一歳にも満たない彩。両親の別れにより、彼女はどのような人生を辿るのか、などということを考えて訳ではない。彩の、ただひたすら心地良さそうな寝顔に、自身の理性が強く刺激された。

『この子に罪はない』

自分の身勝手な行動で、この子の幸せを砕くところだった。それは、菜々子にとっての不幸でもある。

こんな事はもうやめよう。どの道自分と菜々子は結ばれる事はな

いのだ。

そんな矢先にあの言葉を聞いた。

『菜々子の胎内に宿った子が、瑞希の身体に移った』

そんなバカな。他人の身体から胎児が転位する。あり得ない。普段であれば、そんな事があるわけがない、バカバカしいと一蹴してしまう内容だが、瑞希が女性になってしまった時点であり得ない事を目にはしているのは紛れもない事実であった。だが、この言葉に驚愕を覚え、心の深奥に響き渡った理由は他にあつた。

もしそんな事が……あの時にそんな事が出来たなら、「彼女」は今頃……。

記憶が甦る。

あの時「彼女」に対して何もしてあげられなかった自分。

高校に入学する直前にいなくなってしまった「彼女」。

悲しみを振りほどくように、様々な人と付き合いもした。だが、ポツカリ空いた心の穴にぴたりと合う人物はいなかった。

そんな時に出会ったのが菜々子だった。

「彼女」に顔が良く似ていた。

声も似ていた。

少しおっちょこちょいな行動も似ていた。

そもそも菜々子への想いは、「彼女」へ向けた想いが変じてしまったものだ。菜々子は、いなくなってしまった「彼女」の代わりだった。「彼女」に似ている。ただそれだけの理由。悲しみを紛らわす為には、それだけで十分だった。ただ傍にいて欲しい。いつしか、その想いが愛情なのだと錯覚してしまったようだ。

彩の寝顔、そしてあの言葉は、封印していた記憶を呼び起こし、その事に気付かせてくれたのだ。

外から、雀の囀りが聞こえてくる。鳥達の歌声と共にいつの間にか夜が明けてしまっていた。

今日は、計画の協力者に報酬を支払う日だ。

彩、そしてこれから産まれるであろう瑞希達の子の幸福を壊してしまう行為に終止符を打とう。逆にあの子達の未来の為になることであれば、どんな事でもしていこう。

愚かな計画を協力させてしまった彼女にも、しっかり説明しなくては。

私は新たな決意と共に横たえた身体を起こした。待ち合わせの間を考えると随分と早いが出掛ける支度を始めた。

『香奈さん、お待ちせ』



午後2時。駅前のカフェのオープンテラス。彼女は待ち合わせの時間から1時間程遅れて到着した。

彼女の名前は蒼井渚。瑞希の会社の新人社員だ。先日、私のエステに偶然入店したのが彼女だった。聞くと、瑞希と同じ会社に就職したという。彼女の身体をマッサージしながらの会話は、私に悪意を孕ませる結果となった。彼女を利用し、瑞希の浮気を捏造するという悪意を。

『こんにちは、渚さん。随分遅かったわね？ 何かあったの？』

『すみません、ちよっと……』

『あ、別にいいんだけど……。早速だけど、コレ』

私は紙袋に入れた計画報酬の30万円を渚に手渡そうとバッグより取り出した。

『あつ、その事なんですけど……いらないです、ソレ』

『えっ？』

『香奈さんに頼まれて瑞希先輩に近づいたんですけど……実は私……本当に瑞希先輩を愛してしまっただみたいなんです』

『は？ ……はあ!？』

『なので、報酬とかいららないです。私は純粋な愛で瑞希先輩を奥さんから奪います！ もらってしまったら、お金の為みたいで……ここに純粋さはなくなってしまいますもんね?』

な、何を言ってるの、この子？

『ど、ど、どという冗談? も、もういいのよ、そんな事しなくて。私

が悪かったのよ。渚さんは自分の恋愛にしっかり生きなさい。ね？  
『だから、自分の恋愛なんですって。私、瑞希先輩を愛してしまっ  
たんです』

『な、なんでまた？』

『なんでって……その前に、飲み物買ってきていいですか？』

『え？ い……いいけど……』

渚は店内に入りレジカウンターに向かった。

私はその姿を見つめながら、混乱した頭を整理する。

ど、どういう事？ あの子が瑞希君を好きになるなんて。どうい  
うつもりなのかしら？ このままじゃ菜々子が……彩ちゃん達が……  
…。

渚は飲み物のカップを片手に戻ってきた。一口含むと、先程の質  
問に対する答えを話した。

『……なぜかというと、カッコいいじゃないですかあ。仕事も出来  
るし。始めは香奈さんに言われて、面白そうだなってカンジでした  
けど。今は違うんです。……だからゴメンなさい、香奈さん。ソレ  
は受け取れないです。香奈さんとは恋敵になってしまったんですか  
』  
『ら』

『えっ？』

恋敵？ ……この子、勘違いしてる？ - -

渚は、「香奈が瑞希の事を好きだから、菜々子達を別れさせよう  
とした」と思い込んでいるようだ。そういえば、協力を要請した時  
に、計画理由をいっていなかった。

『なので、これからはライバル……なんです、お互い困りましたよね？』

『な、なにが？』

『何がって、今瑞希先輩は奥さんの実家にいるんですよ？ 休職までしちゃうなんて。これじゃアプローチできやしない』

『き、休職？』

『あれ？ 知らないんですか？ 瑞希先輩が休職しちゃったから、代わりに先輩の双子のお姉さんがきたんですよ』

瑞希君が休職？ 双子のお姉さん？ ……ああ、そういう事。

今、瑞希は会社で正体を隠しているらしい。一先ずは渚は何もできないということだ。『まあ、とにかく今は自分に磨きをかけます。戻ってきた瑞希先輩を虜にしなければ。じゃ、帰りますね』

渚はそう言い残すと席を立ち休日の雑踏に消えていった。

とりあえず、瑞希が元に戻らなければ渚は動けない。その間に、如何にして渚に瑞希を諦めさせるのか。

私は携帯電話を取出し、電話帳の検索を始めた。

## 23・哺乳瓶

『ただいま……』

玄関という狭い空間にこぼれ落ちる声。

この部屋にはそれを受け取り、返してくれる人間はいない。毎日繰り返し返す当たり前の行為が、一段と虚しさを募らせる。

渚と別れた後、まっすぐ自宅に帰ってきた。

本当は、菜々子に会いにいられたらと思うていた。菜々子と、そして瑞希に全て打ち明けよう。そうする事で自身が蒔いてしまった火種をボヤのうちに、摘み取ってしまおうと思っていた。渚の企みを公にする事で、菜々子と瑞希の間に入り込む隙を与えないように。それによって、私が行おうとしていた計画が彼らに知られたとしても……。

でも出来なかった。いざ携帯電話のディスプレイに菜々子の番号を表示させた瞬間、指が固まり、発信ボタンを押す事を躊躇した。菜々子、そして彩の為に何だっけしようと思ったはずなのに、ここぞという時に行動出来ない。意気地のない自分。また自分に嘘をついてしまった。嫌気がさす。

『何なの、私って……？』

リビングにハンドバッグを無造作に放り投げ溜め息をつく。汚い。いざという時に逃げ出す臆病者。それが自分の正体。

『最低っ』

「（そんな事ないよ）」

『！』

自分を蔑む言葉を、「彼女」の声が優しく否定する。

（そんな事ないよ。香奈ちゃんは優しい子だよ）

「彼女」の記憶が過去へ誘う。

『美咲ちゃん……』

『 そんな事ないよ。香奈ちゃんは優しい子だよ』

『 うん。私は最低な人間だよ。友達だと言っておいて、あの子がイジメられているのに助けなかった』

『 でもさ、その後先生と一緒に言いに行ったんでしょ？ その子も心強かったと思うよ。それに香奈ちゃん、昨日隣のおばあちゃんの荷物持ってあげたんだって？ おばあちゃん喜んでたよ。香奈ちゃんは優しい子だよ』

『 ……うん……ありがとう、美咲ちゃん』

美咲は私の三つ上の姉。いつも私を可愛がってくれた。親代わりのように……。

私の両親は、私が物心つく前に離婚していた。都会から遠く離れ

た田舎町。娯楽も少ないが、仕事もない。出稼ぎに出ている父親がほかで女を作ったのが原因らしい。母が私を引き取ったが、小学校に上がる前に美咲の父親と再婚をした。

義父は私に冷たかった。血が繋がっていない、ただそれだけの理由。暴力を受けた訳ではない。特に興味がないといった感じで、私に接して来なかった。母は、一度夫に捨てられた経験から、次の旦那には媚びを売るようになっていた。夫に好かれよう、夫の言うことに従おうと。夫がやることに口を出すなんてもつてのほかだ。結果、私に対する態度が冷たくなっていった。

実の親からも見放された私は、愛を欲した。その愛を私に注いでくれたのが義姉の美咲だった。

美咲はいつも自分を気に掛けてくれた。義父や母に対しても、臆する事なく私への対応を指摘してくれた。私の悩みに対しても親身になって相談ののってくれた。徐々に義父との関係が良くなり、母も優しさを取り戻し始めた頃には、私の美咲に対する感情は、姉に対するそれではなくなっていた。

美咲を好きになっていた。愛していた。別に女性しか愛せない訳ではない。そこには異性を超越した愛情があった。

『あーあ、私が男だったらなあ。美咲ちゃんと結婚するのに……』

冗談混じりに言った事がある。勿論本心だった。女同士だとしても構わない。世間が許すのであれば……。自分としては、告白のつもりでもあった。心音が耳元で激しく鳴り響く。

『そうね。私も男だったら香奈ちゃんと結婚したいかも』

嬉しかった。今思えば冗談以外のなんでもない言葉だったが、そ

の時の私は舞い上がってしまった。

美咲ちゃんも私を愛してくれている。

その半年後。

私が中学3年の時。

美咲に彼氏が出来た。

「出来た」という言葉は正確でないかもしれない。もっと昔からいたのかもしれない。ただ、私はその時に知ったのだ。

妊娠したと言う事実とともに……。

『香奈ちゃん、誰にも言わない?』

もう何日も具合の悪そうな美咲を心配し、ベッドで横になっていた彼女に声をかけた時、彼女は体を起こしながらそう言った。

『言わないよ。誰にも言わない。何かあったの?』

『実は私ね……』

彼女は全てを私に打ち明けてくれた。「妹」である私に。

『っ!?!?』

あまりの驚きに声が出なかった。一瞬、声の出し方を忘れてしまった。

『驚いた……よね?』

『……うん』

驚いた。

私の心を一角度から見れば、その言葉も合っていた。が、別の角度から見た私の心に渦巻いた想いは違っていた。

裏切られた。

禁断の甘い果実には毒が塗られていた。食べてはいけなれないと思いつつも、手を伸ばした果実。姉妹、同姓愛という棘の道の先に生った艶やかな果実。『お父さん達には私から言うから、まだ黙っておいてね』

『……………うん』

部屋に戻り、一晩中泣いた。

義理と言えど生活を共にしてきた姉妹。優しい姉は私の心の中で膨らみ続け、かけがえのないものとなっていた。

いつまでも一緒にいたい。

だが、その想いは打ち砕かれた。

彼女に裏切られたのだ。そう自身に言い聞かせた。そう思うより仕方がなかった。失恋の悲しみに沈む中、自分の想いを正当化するには相手を悪者にするしか術を知らなかった。

愛が憎に代わろうとする瞬間。

その時、微かに残っていた理性が働いた。

美咲ちゃんは……………悪くない。美咲ちゃんはいつでも私に愛を注いでくれていた。それは妹に対する愛情。今度は私が返す番。私が最高の愛情を……………「姉へ愛情」を注ぐ番だ。

姉には幸せになってもらいたい。

若くして母となる姉。これから様々な障害が彼女を襲うだろう。



その時は私が助ける番だ。

窓越しの空は白みを帯び、夜明けを告げていた。涙は枯れた。涙と共に憎しみを払拭した目には、もう新たな想いが宿っていた。

数日後、美咲は親に全てを話した。相手は同じ高校に通う同級生。妊娠2ヶ月に入っていた。父は結婚にも出産にも反対はしなかった。自分自身も理由はあったにせよ、結婚、離婚、再婚とある意味好き勝手してきた手前、子供の行為を否定は出来なかったようだ。私は姉にささやかなプレゼントととして哺乳瓶を買った。美咲は祝福してくれる存在がいた事に安堵し、心から喜んでいて。その笑顔に、私も美咲の赤ちゃんの誕生を待ち望むようになっていった。

だが、美咲がその哺乳瓶を使うことはなかった。

状況は一変する。

美咲の性器から出血があったのだ。検診に通っていた産婦人科の医師から告げられた言葉は予想外のものだった。

『子宮頸癌です。まだ初期のものですが、お若く進行も早い為、早急な治療をお奨めします』

父は意見を覆した。医者「出産は諦めたほうが……」という言葉

葉を鵜呑みにしたのだ。母は父の意見に賛同。異論がでるはずもない。

美咲は私に助けを求めた。

私は……………両親の意見に賛同した。

子供はまた産めばいい。美咲は一人しかいないのだ。

でもそれは本心ではなかった。

両親と意見を違える勇気がなかった。両親から見放されていたあの頃に戻るかもしれない。そう思ってしまった。大切な人を守らなかつた。その結論は彼女を失う原因となつた。

彼女はその夜、家を出ていった。彼氏と共に夜中に町を出たらしい。

彼女の部屋には、私のあげた哺乳瓶が残されていた。

翌日、町から少し離れた山奥で彼女達は発見された。免許を取らたての彼氏が前方不注意で谷に転落したらしい。彼氏が運転していた車は大破し、運転席からは彼氏、そして車から少し離れた岩場で彼女は見つかった。

美咲は逝ってしまった。もう話しが出来ない。会えもしない。

私の元には、彼女にあげた哺乳瓶が残った。

過去から意識を戻した私の手には哺乳瓶があった。

美咲にあげた哺乳瓶。

美咲の赤ちゃんに使って欲しかった哺乳瓶。

一度だけ、この哺乳瓶を使った。菜々子が出してきた時に、お腹を空かせ泣いていた彩の為にミルクを作り飲ませた。

……菜々子……。

高校に入学した私の前に菜々子が現れた。彼女は美咲に良く似ていた。同じクラス、間もなく友達となった。私は気になって仕方がなかった。菜々子は美咲ではない。それはわかっている……でも、沸き起こる気持ちを押さえようと、様々な男とも付き合った。が、彼女への想いはどうしようもないほど大きくなっていった。

今その想いは変化を遂げた。そのはずだった。

哺乳瓶を握りしめながら、気持ちが整理されていくのを感じた。

私は何度おなじ過ちを繰り返すのか。本当に大切な人へ注ぐ愛情は自分本位でよい訳がない。自分の立場に左右される愛などは本当の愛ではない。

今度こそ、彼女を守らなくては。それが、最終的に裏切ってしまった美咲への、そして、菜々子への償いだ。哺乳瓶をテーブルに置いた私は、踵を返し部屋を飛び出した。

## 24・オムツ替え

リビングにその臭いが漂ったのは、彩とぬいぐるみで戯れている時だった。

……ん？

その臭いは脳神経を刺激し、すぐさまあるものを連想させた。

誰しもが見たことがある物、且つ嗅いだ事のある臭い。人間として、もとい、動物として生きていく以上、避けては通れない生理的欲求が生産する物質とその臭い。

うん である。

人は便意を催すと、便所に赴き排便行為をする。言うまでもなく、その場で行くと大変な事になるからだ。なので、この臭いを嗅ぐ場所は大抵が便所である。リビングなどという家庭にとつての神聖な場で嗅ぐわけがない。はて？ 気のせいか？ ……いや臭う………まさか?!

咄嗟に後ろに振り向く。そこには何事もないかのように真剣な表情で菜々子と香奈が話をしている。つい先ほど、突然香奈が訪ねてきて、大事な話があると言つので上がってもらったのだ。

違うか？ ……いや、しらばっくれているという可能性もあるな……  
…どっちが犯人だ？ 香奈はまさかしないだろう………てことは………。

俺が屁をこいた犯人探しに推理を展開していると、菜々子がこちらに視線を移し叫んだ。

『ちよつと、瑞希っ!』

『な、なんだよ?! お、俺じゃねえぞ、他人のせいによつたつてそうは』

『は? 何言ってるの? 彩、見てあげてよ』

『へっ?』

彩あ?

菜々子に言われ視線を落とすと、彩が赤い顔をして体を震わせていた。

『あれ? お前、どつたの?』

『どつたのじゃないでしょ!?! うん してんのよ!』

『へっ?』

灯台もと暗し。犯人は被害者にとつてとても身近な人物だったりする。

……さて、どうしたもんかな?

俺は右手に紙オムツ、左手にお尻拭きを持ち、仰向けに寝転がる彩の前に立ち尽くしていた。いや、座っているから「座り尽くしていた」の間違いか……。

実のところ、俺は彩のオムツを替えた事がない。産まれる前は、率先して替えようと思ってはいたが、初めてのオムツ替えの際、その臭いにやられた俺は、菜々子にバトンタッチし、それ以来オムツ替えから逃げていた。生まれたての赤ちゃんのうん は臭わないと

育児雑誌に書いてあったが、アレは嘘だ。他はどうか知らんが、彩はソレに当てはまらなかった。

菜々子にどうしても無理だと頼み込み、今まで事なきを得ていたのだが、今回はそうはいかなかった。

『これから出産に挑もうという妊婦さんが、赤ちゃんのオムツ替え一つ出来ないなんて、ダメじゃん』

数日前に菜々子に言われた言葉だ。

産む決意も固まっていない人間に言っても全く無駄に思える発言だが、最後の「ダメじゃん」が効いた。

「まるでダメ人間」を見るような蔑んだ目を向ける菜々子の表情も決定的だった。

『やったろうじゃねえか！』

そして現在に至る。

菜々子は、今香奈と大事な話をしているからという別段問題でなからう言い訳を口にし、俺に指令を出した。

オムツ替えてみたら、と。

後ろを振り返ると菜々子達は話を続けている。と思ったら、菜々子は視線をこちらに移し、顎で早くやれと指示してきた。

わーったよ、やりやいいんだろ、やりや？

意を決して彩の服を脱がしにかかる。ロンパースのボタンを一つ一つ丁寧に外すと、心なしが臭いが2割増したような気がした。

オムツが露になった下半身。ここで一呼吸置く。

『早くやれ』

後ろから鬼の声が聞こえるが気にしない。

愚か者が。焦ってやる仕事程、失敗するのだよ。

頭が痛い。

俺の心の声が鬼に聞こえてしまったようだ。

無防備の頭にゲンコツすんじゃねえよ

『なんか言つたあ？』

『いえ、何も。お話続けて下さい』

『よろしい』

エスパーな菜々子の視線を背に感じながらオムツに手をかける。  
湿度120%なオムツ内部は茶色い固体とも液体ともつかない物  
体で賑わっていた。

下痢である。いきなり上級者向けのオムツ替えになってしまった。  
指にちよっと付いちやったし。てゆーか、無理。菜々子に助けても  
らおう。

『うわっ、こりゃ無理だよ。菜々』

『はあ！？ 何それ、どっという事！？』

『へっっっ』

振り向くと菜々子が香奈を睨み付けている。香奈は俯いて涙ぐん

でいるようだ。

『え？ 何？ どうし』

次の瞬間インターホンがリビングに鳴り響いた。

『なんだよ、こんな時に！？』

原因不明の修羅場な二人を尻目に、インターフォンのモニターを覗く。そこにはいつも通りインテリメガネを装着し、スーツに身を固めた隼人が薄気味悪い笑顔を浮かべ立っている。

『隼人？』

とりあえず受話器を取る。

(あ、隼人ですけど )

『見りゃあわかる』

(なんだ瑞希か) モニターの隼人が軽く落胆の表情を浮かべる。 『お前は一体誰の家を訪問したんだ？』

(冗談だよ。それより今大丈夫か？ ちょっと話があるんだが……) 『え？ えーっと……』

後ろにダイニングテーブルにいる二人に意識を伸ばす。

『誰！？』

不機嫌な声が疑問符を投げ掛けてくる。

『えっ？ いや、隼人なんだけど……』



『なに？』

『わからん』

『……』無言で顎を軽く突き出す菜々子。

ああ。聞けって事が

『なんかあったか？』再度受話器の向こうの隼人に聞く。

(いや、この間の石の欠片を調べた結果が出たから報告に来たんだ。なんだ？ 今マズイのか？)

『暫し待たれよ』

『妊婦石の欠片を調査した結果が出たんだって……』振り向き菜々子に報告する。

軽く考えるような素振りを見せ、首を縦に振る菜々子。

菜々子の意思を確認し、エントランスの自動ドアを開くボタンを押す。

『入りなさい』

(ん？ ああ……なんで命令口調？)

モニターの隼人は戸惑いながら自動ドアに向かった。

なんで俺、伝言係みたいな事してんだ？ てか、その前に隼人はタイミング悪すぎなんだよ！ そうだ、アイツが悪い。

着いたら文句を言ってやると心に決め、彩のところに戻った時、名案が浮かんだ。

あ、そっか。そうしよう！ アイツ、タイミング良いなあ

心で前言撤回をしていると玄関のインターフォンが鳴った。さすが廊下を走り隼人を出迎えに行く。

『悪いな、こんな時間に。なんかあったか？ ……ん？』ドアを開けると隼人が少し不安気な顔で入りながら声をかけてきた。

そんな隼人に、俺は人差し指を向けながら答えた。

『なんの問題もないぞ！ というより、よく来てくれた。さあ、上がりなさい！』

『また命令口調？ というかなんだ、その指は？ なんか付いてん？ なんか臭うぞ？』

『さあ、上がりなさい！』

俺は、訝しむ隼人を笑顔でリビングの彩の元へ連れていった。

## 25・切れかけた絆

『よしっ……と。ほら、終わったぞ』

彩のロンパースのボタンを止め終えた隼人は、事もなげに俺に言った。

『おお！ サンキュー隼人！』彩のオムツ替えが済んだ喜びに、俺は隼人に抱きついた。

『サンキューじゃないだろ？ お前いい加減にオムツくらい取り替えられなきゃダメじゃんか』俺の抱擁を軽くかわした隼人は、呆れたように文句を言う。

『そんなん言われなくなつてわかってるっつーの。だから替えようとしてたんじゃねえか』

『でも最終的に替えられなきゃダメだろ』

……ダメエ？

『ダメダメ言うな！ 物には順序っつーのがあるんだよ！ コンビニで万引きした事ないヤツが、宝石店の強盗なんか出来ねーだろ？』  
『……なんだその喩は？』

液状のうんまみれになった彩のオムツは、オムツ替え初心者の俺に太刀打ち出来る相手ではなかった。

菜々子に助けを求めようとするも、なにが原因かわからんが香奈を相手にご立腹の様子。途方に暮れた俺の前に現れた救世主が隼人だったのだ。

人間は万能ではない。それぞれ、向き不向きってのがあつた。欠け

たピースをそれぞれ補ってこそ人間と言えるのだ。

俺はオムツ替えが出来ない。

そして、隼人はオムツ替えが出来る。

なら、助けてくれたっていいじゃないか。『わからんか!? レベル1状態で檜の棒を持ったへっぽこ勇者が、いきなり竜王に立ち向かえる訳がねーだろって言ってたんだ! 町出てみたらいきなり竜王だぞ? そりゃ、その辺にいる町人にも助け求めんだろ!?!』

『解りやすくなったのか? ……というか、簡単に諦めるな、へっぽこ勇者。これから様々なうん と死闘を繰り広げなきゃならないヤツが、竜王位にビビってどうする?』

『はあ? お前バカか? レベル1だぞ? しかも竜王だぞ、竜王? その辺にいるスラムとかドラ ーと戦うのとはわけがちが

』

『何言ってるのよっ!』

『『ゴメンなさいっ!』』 リビングに響く菜々子の怒鳴り声に対し、咄嗟に謝る俺と隼人。

香奈と真剣な話をしている隣で、少々騒ぎすぎたようだ。

恐る恐るダイニングテーブルの方を向くが、菜々子はこちらを見ていなかった。

『『あれ?』』

どうやら先ほどの怒鳴り声は香奈に向けたものらしい。

『アンタ、自分が何したか解ってるの!?!』

『……ゴメンなさいっ………』

『……っ!』

香奈の謝罪は菜々子に届いていないようだ。菜々子は無言で席を

立つと、そのまま台所に行ってしまった。

な、なんだ？ どうしたってんだ？

『（……瑞希。何かあったのか？）』軽く呆然としていた俺に、隼人が囁くように状況説明を促してきた。『（知らん）』

『（し、知らんて、お前……）』

『（俺は彩と遊んでただけだ。丁度お前が来る直前に険悪ムードになったようだけど……って、そんな事より香奈、大丈夫かな？）』

『（……よくこんな状況でダジャレを言えますね？）』

『（アホか！）』隼人の能天気な思考にツツコミをいれつつ香奈に声を掛けようとした時、菜々子がリビングに戻ってきたので、まずは菜々子に事情聴取してみる事にした。

『……な、菜々子……ちゃん？』

『彩あ、ゴハン食べよっかあ？』

恐る恐る声を掛けるが、菜々子はまるで声を掛けられた事に気付いてないような素振りで、俺の足元でゴミを摘んで遊んでいた彩を抱き上げた。

『ここは変な人達がいるから、あつちで食べようね？』

台所から持ってきた離乳食を片手に彩を器用に抱きながら寝室へと移動する菜々子。

『……変な人達だって』隼人は悲しみに暮れている。

変な人達い？

なにがあつたか知らないが、旦那や友達に向かって言うとは。ひ

どい侮辱だ。ここは、亭主としてしつかり注意しなければ。

『こらあ、菜々子お！ 香奈ちゃんと俺に謝れ！』

『……瑞希い、俺が抜けてるよお』

隼人のかぼそい声は寝室とリビングを繋ぐ扉が閉まる音にかき消された。

『んで、なにがあつたの？』

リビングから菜々子がいなくなり、とりあえず取り残された香奈に事の真相を聞いてみる事にした。

菜々子と香奈は、滅多にケンカをしているのを見た事がない。ケンカするほど仲が良いという言葉もあるが、あれは「ケンカするほど身近である」のは勿論、「心も近くにある」からで、ケンカするほどに本音を曝け出しているからだ。でも、傍から見た彼女達は、真剣に相手の事を考えお互いを尊重して付き合っている。だから、時に自分にとって厳しい意見も、真摯に受けとめる為、ケンカのような口論にはならなかった。そんな、時に夫である俺でさえ軽く嫉妬してしまう位深く繋がっていた絆が、今切れかかっているのだ。修復する為には、まずは正確な情報が必要だ。だが、香奈の口から出た真相は耳を疑う内容だった。

『私は、菜々子と瑞希君を別れさせようとしたの……』  
『……へっ？ な、なにそれ？ 言ってる意味がよくわかんないんだけど……？』

俺の返答が聞こえていないかのように香奈は静かに続けた。

『私は菜々子が好きだったの。菜々子は亡くなった姉によく似ていた。姉は私にとって全てだったわ。……でも、私はその姉を裏切った』

よく話が見えてこない。だが、俺は香奈の声から耳を離せなかった。

『私の裏切りによって姉は死んだ。……あんなに私の事を守ってくれた美咲ちゃんを……殺したのは私なのっ』

殺した。穏やかでない言葉に疑問が生まれたが、そのまま香奈は話を続ける。

『……そんな時、私の前に菜々子が現れた。本当に美咲ちゃんによく似ていた。私は美咲ちゃんへの恩返しを菜々子にしていこうと決めた……決めたはずだった。でも、本当は菜々子を独占したかっただけだったみたい。菜々子という時が本当に幸せで……』

香奈はテーブルの一点を見つめたまま言葉を紡ぎ出す。ふと、隼人に目を向けると、何か思うところがあるのか、頷きながら聴いている。

『私は菜々子を愛していた。それが、同姓愛という言葉で括られようが、どうしようもない事実だった。……でも、私は菜々子に告白

出来なかった……。」

『で、瑞希が現れたって事か』

『……そう。私は瑞希君を羨み、嫉妬した。でも、憎くはなかった。……これで良かったのかもって。菜々子には幸せになって欲しい。だから応援する事にしたの。見守ろうって。でも……』

『最近、ケンカばかりかしてたしな。んで、菜々子を幸せに出来ないんだったらって事で別れさせようとしたワケだ？ ……でも、だもしたらなんで俺らを仲直りさせようとしたの？』

俺の質問に香奈は少し震えながら答えた。

『……彩ちゃん』

『……彩？』

『彩ちゃんにミルクをあげたの。姉に……妊娠してた姉にあげようとした哺乳瓶で。その時、生まれるはずだった姉の赤ちゃんにしてあげられなかった事を彩ちゃんにしてあげようって決めたの。彩ちゃんにも幸せになってもらいたいって。それには瑞希君が必要だって……』

香奈は目に涙を溜めながら言葉を絞りだしているようだった。次の瞬間、テーブルに落としていた視線をまっすぐに俺に向けた。

『本当にごめんなさい！』

『なんで謝んの？』

『な、なんでって……』

『だって、菜々子に幸せになって欲しいからやった事でしょ？ 過ぎた事だ。仲直りさせてくれたし』

『それだって私が』

『問題なし』



香奈が行った行為は決して正しいとは思わないが、その行為に達した原因は菜々子に対する愛情からだ。別に咎める理由がない。俺だって菜々子は幸せにしたい。俺と香奈は同じ思いだったって事だ。

『……だそうだよ、香奈ちゃん。いいじゃん。俺が言うのもなんだけど、これからも蓮見一家を見守ってやってよ』

確かにお前が言うのもなんだな隼人。

『……でも、菜々子は私の事、許してくれないよ……』

『確かに、結構怒ってるからなあ。でも、怒ってる理由はわかった』  
『あんな事したんだもん。許してなんて言えないよ』

……ん？ あんな事？

『香奈ちゃん、もしかして菜々子が怒ってる理由わかってないの？』

『……理由って……別れさせようとしたから』

『違うよ』

どうやら香奈は勘違いをしているようだ。

『よし、この間仲直りさせてもらったお返しだ。ちょっと待ってて』

俺は菜々子達を仲直りさせる為、行動を開始した。

## 26・怒りの原因

香奈から事の発端を聞いている最中も、菜々子は寝室に入ったきり出てこなかった。

菜々子と香奈を仲直りさせようにも、二人が揃わなければ話にならない。まずは俺達が寝室に入るか、菜々子がリビングに戻るかしなければ。だが、俺達が寝室に入るのは危険極まりない。ただでさえ怒っているのだ。招かざる客の来訪は、菜々子の逆鱗に触れ、怒りに油を注ぐだけだ。とすると、菜々子をリビングに戻すしか選択肢はない。

俺は菜々子が自らの意志でリビングに戻る行動に出るよう、準備を始めた。

「……………材料は……………よし、揃ってるな」

「なにする気だ一体？」

冷蔵庫に顔を突っこんだ俺の肩越しから隼人の疑問を含んだ声が聞こえてくる。

「ん？……………今、何時だ？」

「質問を質問で返すか……………えっと、19時半だけど……………それが仲直りさせる事と関係あるのか？」

「人間を始め全ての動物は欲望によって行動を起こす生き物だ。他の動物と比べ人間はその欲望を理性によって制御するが、欲望つーのは押さえれば押さええる程、理性が負けた時の反動は強い……………」

冷蔵庫から人参とシメジを出しながら説明を加えていく。

『性欲、睡眠欲、自己顕示欲……生理的なものや精神的なものまで  
沢山あるが……その中でも、菜々子が今まさに戦っている欲望があ  
る。それは』

隼人の方へ振り向き、鼻先めがけて人参を差し出すポーズを決め  
る。

『食欲だ』

『痛い、瑞希。当たってる』

『あ、悪い』隼人の鼻っ柱に当たった人参を顔から離し、続ける。

『もう19時半だ。奴は意地っ張りなところがあるが、料理の匂い  
に負けて、必ず出てくる。そこで俺の特製カレーの登場で、機嫌が  
戻るはずだ!』

『そんなうまくいかなあ?』

『大丈夫だ。任せろ! お前らの分も作るから、リビングで待つて  
る』

顎でキッチンからの退出を促す。

『わかったよ……それより瑞希』

『あん?』

『エプロンは着けるよ? 今のお前ならフリルが裝飾されたヤツが  
似合いそぶっっ』

『早く行けっ』

俺は隼人の鼻っ柱に裏拳を決めキッチンから追い出し、調理を開  
始した。

20時10分。

完成したカレーをライスに乗せた皿に流し込む。水の割合を多くし少し緩めに作ったカレーが、ふっくらと透明感のあるライスに吸い込まれていく。大量の湯気がカレーの匂いを巻き上げて嗅覚を刺激する。

『出来たぞ』

かなりの出来具合に自然と顔が綻ぶ。

この匂いを嗅んで出てこないはずがないな。これで「カレー大作戦」も成功したも同然だ。

『出来たのか？』早速匂いを嗅ぎつけた隼人がキッチンに顔を出した。

『おう、バッチリだ。これで必ず菜々子はリビングに戻ってくる』  
『そんな単純にいくかなあ？』

『絶対大丈夫だ。アイツは俺の作るカレーが大好物だからな。まあ時間はかかるかもしれないが、俺達が食ってれば30分もしないうちリビングにくるって。とりあえず食ってようぜ』

『わかった。じゃあ俺持っていくから、瑞希は盛り付けてくれ』  
『そう言うと、隼人は俺が持っていたカレーを盛り付けた皿を火傷しないようにそつと受け取った。』

『ああ。あとスプーンと、ウーロン茶が冷蔵庫にあるからよろしく』

『わかった』

手分けをして食卓の準備を整える。

俺は皿にライスを盛り付け、カレーを流し込む作業をあと二人分  
行い、その間に隼人はウーロン茶を三人分コップに注ぎ、スプーン  
と一緒にトレイに乘せリビングに運ぶ。

戻ってきた隼人に残りのカレーの皿を二つ渡すと、予想外の反応  
が返ってきた。

『足りない』

俺は結構大食いのほうなので大盛り。香奈はスレンダーなほうだ  
し、一緒にメシ食った事もあるが少食なほうだと思っただので一応普  
通盛り。隼人は俺と同じ理由で大盛りにした。大盛りは皿からこぼ  
れる寸前の量だ。というより、既に少しこぼれている。

『結構多く盛ったけど、まだ足んないか？ あれ以上は無理だから、

おかわりしてくれ』

『いや、違う。皿が足りない』

『……皿？』

首を傾げ考える。

隼人はどちらかといえば勉強が出来たほうだったはずだが、最近  
周りで色々ありすぎて知能が低下したらしい。

俺は隼人が少し不憫に思えた。俺の性別が変わったり、懐妊した  
ばつかりに、隼人には苦勞をかけてしまったようだ。

申し訳ないな。でもいくらお前の頭が悪くなろうが、俺はずっと

友達だぞ。

優しい笑みをたたえ、隼人の肩にそつと手を置く。

『隼人……3から3を引くと、答えは0になるんだ。わかるか？』

これは小学1年 『』

『いいから来いっ』

隼人は理解出来たか否かを答える事なく、俺の腕をわし掴んだ。そのままリビングに連れていかれた俺はその場の光景に目を疑った。

『瑞希……』隼人が口を開く。

『なんだい、隼人君？』

『3引く3は0だぞ。それは知ってる』心なしか、声に微量の怒気が含まれているようだ。

『はい』

『じゃあ、3足す1引く3は？』

『1ですねえ』

『一つ皿、足りないだろ？』

『足んないですねえ』

『俺、何か間違えていたか？』

『いいえ』

『お前、さつき俺の事、可哀想なヤツを見るような目で見てなかったか？』

『気のせいではないですか？』

『お前、さつき俺の事、可哀想なヤツを見るような目で見てましたねえ……スミマセン』 『』見

『よろしい』

リビングには既に菜々子がいた。早くカレーを持って来いと言わんばかりに俺を睨んでいる。

俺は急いで菜々子の分もカレーを盛り付け、食卓に運んだ。

『んじゃ、いただきます』

カレー大作戦は効果てきめんだった。予想以上に菜々子は欲望に對し理性が貧弱で、カレーの匂いを嗅んだ途端に、怒りも恥じらいも放り出し寝室から出てきたようだ。寝室には離乳食を食べ終えた彩が寝息をたてていた。

まずは二人を接触させる事に成功した。あとは、いかに仲直りをさせるかだが……。カレーを美味しそうに口に運ぶ菜々子。

菜々子を前に、居づらそうにし食事に手を付けない香奈。

その二人の様子を見ながら緊張気味に口に含んだ物を咀嚼する隼人。

本題は食事を済ませたあとにしようかとも思ったが、香奈は一向にカレーに手を付ける気配がない為、菜々子が一通り食べ終えたのを確認し話を切り出す。

『んじゃ、お腹も膨れたところで話をしたいんだが、菜々子……』

『な、なによ？』

お腹を一杯にした菜々子は数十分前より明らかに機嫌が良くなっている。もし機嫌が最悪であるなら「なによ？」で済んでいるはずがない。眉は釣り上がり、皺が眉間に林を作り、口からは「ああ？」という低い声。もしくは完全にシカト。これが菜々子の不機嫌MAXな時の受け答えだ。

『香奈ちゃんの事許してやれ』

『……わかった』

完璧。

作戦成功。

どうだ俺のカレーのパワーは？

あまりの効果に香奈と隼人は言葉を失っている。

『ほれ、だつてさ。良かったね香奈ちゃん』

『え……なんで？ 私あんな事したんだよ？ なんで……？』

『あんな事つて、俺と菜々子を別れさせようとした事だろ？ 菜々子が怒つてんのはソコじゃないと思うよ？ なあ、菜々子？』

『えっ？ あ、うん……』

菜々子は少し俯き、気恥ずかしそうに頷く。

人は相手に謝る時もそうだが、相手を許す時も照れくさかったりする。

『そ、そんなんつ……じゃあ何が……？』

『悲しかったんだよ、コイツ。無二の親友だと思つてた友達に隠し事されたのが。勿論、内容にもよるだろうけど、お姉さんの事や菜々子への想い。本人には言い辛かったのかもだけど、親友だからこそ打ち明けて欲しかったんだよ。なあ？』

うん、と頷く菜々子。

『だから、ホントだったら打ち明けた時点で菜々子も怒る必要はなかったんだろうけど……隠し事をしてた、っていう事実にびっくりしてあんな状況になっちまったって感じなんじゃないかな？ んで、仲直りするタイミングがなくて、どうしよって時にカレーの匂いが漂ってきた、ってところだろ？』



三度頷く菜々子。

『な……菜々……子……、菜々子お……』俺が話している最中から目に涙を滲ませていた香奈は、堰をきつたように泣きだした。

『香奈っ』

『菜々子お……ゴメ……ゴメンなさいっ。私、もう絶対……裏……裏切らないからっ……』

『いいよ、謝らないで。アタシも香奈の気持ち知らなくて……ゴメンね。気持ちに伝えられなくて……』

『うっん、そんなの。……私は……私は菜々子が幸せなら……それでいい。……でも、やっぱり瑞希君にはかなわないね？こんなに菜々子の事わかってるんだもん』

『……うんっ』

二人はお互いを労るように抱き合いながら、ほんの数十分前に切れかけた絆の糸を修繕出来たようだ。

傍らで、隼人は我が事のように喜び嗚咽を堪えていた。

小一時間程して、香奈は隼人と共に帰っていった。隼人の野郎が送り狼にならなきゃいいが……。

しかし今日は、雪と出会い、島谷には正体がバレ、オムツ換えはするは、菜々子と香奈の間に亀裂が入るはで散々だった。

明日は妊娠届出書の提出の為、午前半休をもらっているが、果たして無事に母子手帖を受け取る事が出来るだろうか。茂宮は大丈夫と言っていたが……かなり不安だ、茂宮だし。

よし、風呂入って寝るか……ん？

何かを忘れていた気がした。

……  
……思いたせない。まあ、思いたせないのであれば仕方ないし、思いたせない事は、結構な確率でどうでもよい事だろう。

忘失した事柄に軽く見切りを付けた俺は、風呂に入り就寝の準備を終え、いざ寝床へ。

『おやすみい』

『おやすみ……あ、そっだ、あのさ？』

『……何？』

『今日……ありがとね。カレー美味しかったよ』

『ん？……ああ』

『それとさ？』

『ん？』

『隼人、何しに来たんだっけ？』

『……』

『……』

『あっつ！』

記憶のパズルが埋まった瞬間は心地よい。が、内容によっては、苛立ちに変わる場合もある。

妊婦石の調査結果。

なぜ隼人は大切な事を忘れて帰るのか。

今日はもう遅い為、明日必ず文句を言ってやると決意し、夢にダブした俺と菜々子だった。

## 27・喜びに紛れ込む災厄

真つ青な空には淀みもなく、雲一つ漂っていない。

太陽は、春の陽光というよりも真夏の照りつけを放つ事で、地上の生物を軽く弱らせている。

アスファルトは熱を巻き上げ、今にも蜃気楼を発生させそうだと道行く人々は汗を染み込ませたハンカチ片手に気怠そうに目的地を目指し、散歩中のダックスフンドは飼い主を恨めしそうに見上げ地面にへばりついている。

『なんなんだ、この暑さは？』

会社を午前半休し、役所にて母子手帖を発行してもらった俺だったが、暑さと悪阻のせいで体調不良に陥った為、部長に連絡し会社を休ませてもらう事にした。

『無理せずにい、お大事にしてねえ』という部長の暖かい言葉に、嘔吐きで返事をする程に気持ち悪い。

行き倒れ寸前の身体を引きずるように歩を進め、ようやく家の玄関に辿り着くと菜々子が驚いた様子で駆け寄ってきた。

『瑞希！？ どうしたの、会社は！？』

『か、会社……や、休ん……おえっ』

『わ、わかったっ。とりあえずトイレにっ』

悪阻経験者である菜々子は、俺を労るようにトイレへと誘導してくれた。

その後、便器に顔を突っ込み数十分。吐き気も大分落ち着いてきた。

『大丈夫？ はい、お水』  
『おお、ワリいな』

コップの水を口に含み、軽く濯ぎ便器に吐き出す。口内に残存する嘔吐物の除去作業を済ませゆっくりと立ち上がる。まだ若干気分が悪いが、体調は幾分マシになったようだ。

『ホントに大丈夫？ ベッドで少し寝てれば？』  
『あー、うん、そうさせてもらおうよ』

リビングを通り抜け寝室へ向かう。その間も菜々子は寄り添い支えてくれていた。

『あれ、彩は？』  
『ん、あれ？』

ダイニングテーブルの横には積み木が煩雑に置かれていたが、そこにいる気配はない。  
ふと視線をソファーに移す。

『『ああっ！』』

菜々子も同時に同じものを目撃したのだろう。探し人はそこにいた。

『すげえ……立ってるじゃん』

彩はソファーに手をつき立ち上がっていた。表情は誇らしげに笑みを浮かべている。

生後11ヶ月。彼女は遂に大地に立ったのだ。

『つ、掴まり立ちしてる？　ね、ねえっ、掴まり立ちしてるよっ！』

『あ、ああ』

『すごいよ、彩！　ねえ、瑞希！』

悪い事が起こった後には良い事があるもんだ、と昔誰かが言っていた気がする。

俺は気分が悪い事も忘れ、彩の方へ歩み寄った。すると、彩は俺の膝を掴もうと手を伸ばす。まだ足がついてこないのか、体勢を崩し倒れそうになったが、菜々子が抱えて無事だった。

常日頃、自分達が何気なく行っている動作でも、生まれて間もない子供にとってみれば未知への挑戦である。

寝返り、ハイハイ、掴り立ち。日を追うことに増す好奇心を武器に、小さな身体を駆使して成長していく姿は感涙を押さえる事が出来ない。

彩は生後の検査で股関節の異常が見つかった。股関節脱臼まではいかないが、一歩手前の状態。外れかかっていた。足を伸ばすと左右の長さに若干の違いが見れた。

時として運命は酷な人生を押しつけてくる事がある。

家庭が貧乏のどん底だったり、不治の病に侵されたり、通りすがりに刃物で切り付けられたり。

そういった事は赤ちゃんにだって例外なく襲ってくる。

生まれながらに脳に障害を持っていたり、手足の指が足りなかったり。

それに比べれば、彩は五体満足で元気だし、命に別状があるわけではない。そう思っていた。医者にかかれば大丈夫と軽く考えていたのかもしれない。

だが、菜々子はそうは思っていなかったようだ。

彼女は様々な育児書、乳幼児の病気百科、インターネットを駆使し、彩の症状を調べ尽くした。少しでも早く、少しでも楽に治療が出来るよう、医者にかかる前から情報を集め、病院に相談する材料とした。自分の子供が苦しむ様を一分一秒でも見ているのが辛かったようだ。

ある日、彩を抱いた菜々子にインターネットの情報を見せられた。リーメンビューゲルという股関節の矯正具のようなものを着けられた赤ちゃんの画像。装着した矯正具は赤ちゃんの股を不自然な程に広げ、足は股を中心にコの字を描いている。彩と同じような症状の子供をもつ母親のサイトだった。コメントには、矯正具を着けられた日からの日記が記されていた。異物を装着された子供は毎日ひっきりなしに泣いていたらしい。母親の苦悩の日々。

痛々しかった。

涙が溢れ出た。

俺は、その赤ちゃんと彩を重ね写していた。

彩がこんな姿で過ごさなければいけないなんて。

彩は菜々子の腕の中で安心したように眠っていた。

俺の中で、沸き上がるものがあつた。彩の苦しい泣き顔なんてみたくない。その日は夜遅くまで菜々子と共にパソコンに向かっていった。

菜々子の母親としての愛情の行動と医師の的確な助言。彩は入院する事も、手術する事も、ましてや矯正具を装着する事もなく完治した。

彩は比較的軽度であつた為、医者は抱き方の見直しを提案してきたのだ。いつも彩を両手で横に抱いていたのを、縦抱きに変え、その際に両足をカエルのように広げるようにした。

抱き方を変えた2ヶ月後には彩の股関節は完全に填まっていた。

その苦難を乗り越え、今、彩は立ち上がったのだ。

仕事を休んでしまった罪悪感は吹き飛び、逆に悪阻に感謝さえしなくなった。

『マジかよお………すげえよ彩あ！』

『ホント、すごいよね。あの時はどうなるかと思ったけど………瑞希も珍しく手伝ってくれたけど』

『はあ？ お前、珍しくってなんだよ？』

『珍しくじゃん！ 彩が治ったら仕事にどっぷりに戻ったし』

『だから、生活の為にはしようが って、やめようぜ、今日は。』

彩がこんなに頑張ってくれた日だしよ』

『………そうだよね。………ゴメン』

『いや、俺もワリイ』

この日、彩は自らの足で新しい世界への道を一步踏み出した。

良い事が起こる前兆には悪い事が起こる場合がある。今日の俺にとっては、酷い悪阻と彩の掴まり立ちがそれに当たる。

しかし、それとは逆に、良い事が起こると悪い事が起こったりもするものだ。

彩が新たな成長を遂げた日の午後、それはやってきた。 ベッド

でゆっくりと休ませてもらっていた俺は、菜々子が買い物に行っている間、彩を見る為に起きてきた。リビングにあるお気に入りのソファに深く座り、積み木で遊ぶ彩とワイドショーを交互に見ながら、平和な一時を過ごしていた。

そこへ、インターホンの音。

俺は首をかしげて立ち上がった。

誰だ？

オートロックである我がマンションは、エントランス側からの呼び出し音と、玄関側からの呼び出し音が少し違う。今のは玄関側からだった。宅配便であればエントランス側からの音だろうし、菜々子であればインターホンなど押さず勝手に入ってくるだろう。

ああ、回覧板か。

それなら納得。廊下を進み玄関に着くとシリンダー錠を捻り、なんの疑いもなくドアを開ける。

『はい……ん？』

『むっ。』

部屋の前で待っていたのは、麦わら帽子を被った体格のいい壮年。よほど暑いのか、赤を主体としたハイビスカスが賑やかに彩られたアロハシャツに、ベージュのハーフパンツ、ビーチサンダル、手には旅行カバンという出で立ち。左のこめかみには傷があり、彫りの深い眼が俺を見下ろしている。

……マジかよ



玄関のドアは、外界からの最後の砦である。訪問する人間が何者であるのかを、しっかりと確認し開けるべきだ。 やっちまったという深い後悔の念と、これからはしっかりと確認しようという今後への決意が入り交じる。

次の瞬間、俺はドアノブを握る手に力を込め、思い切り手前に引っばった。

目の前の人物に強く別れを告げながら。

## 28・単身赴任とかるめの卵

『さ、さよならっ』

湧水の如く溢れかえる不安感を原動力に玄関のドアを力一杯閉めた……はずだった。

ドアは男の左手にがっちり掴まれて微動だにしない。

『は、離っ』

『何故閉める』

『何故って……閉めたいからに……決まってんでしょっ』

両手でどんなに力を籠めてもドアは動く気配がない。向こうは顔色一つ変えず片手しか使っていないのに。

『菜々子はいるんだろ？ あと瑞希は？ とうか、その前にアンタ誰だ？』

『……へっ？』

……あっ、そうか。

そうだった。

俺は今、女だったのだ。

なら、俺が瑞希だと思っわけがない。安堵感が湧いてきた……。

『あ、ああ、菜々子でしたら買い物』

『む？ とうか、お前……瑞希か？』

間もなく期待は崩れ去る。やけに呆気なく。バレるの早過ぎ。

『チツ……』

『というか瑞希……なんで女装なんかしとるんだ？』

『女装じゃねえよ。なんで俺が好き好んで女装せにやならんのだ。よく考えて物を言えよ、このオツサン』

などと口に出るわけがない。

『こ、これはですね、深い事情がありました……』

『む？ そつか、まあいい』

いいんだ？

細かい事気にしないんだ？

ドアは開いてしまった為、立ち話もマズいので、観念してとりあえず入室を促す。このうっとおしい色彩のアロハシャツを満足気に着こなした腕力馬鹿のオツサンは、佐々木蓮司といい、菜々子の父親である。

蓮司は格闘技をこよなく愛するサラリーマンで、菜々子も漏れなくその血を継いでいる。

但し、蓮司は日本の格闘技しか認めておらず、本人曰く『空手、柔道、合気道。日本人であるならば、和の神髄を極めよ。プロレスなど邪道だ』と西洋格闘技など、取りつく島もない。アロハシャツを着て言われても説得力などありはしないが。

菜々子はどちらかと言えば、プロレス、K1、ボクシングが好きな為、全くそりが合わない。同居していた時など、同タイミングでテレビ放送があるものなら、チャンネル争いは必死だったようだ。蓮司のこめかみの傷は、K1と柔道のチャンネル争いの際に菜々子の踵落として付けられたものだ。菜々子の母親から聞いている。俺から言わせてもらえば、そんな事で父親に蹴り入れるなって話だが。

俺自身も昔空手をやっていた為、蓮司には気に入られていたのだ。

が、初めて挨拶に行った時から、会う度に組み手をさせられる身にもなつてほしい。

そんなわけで、俺は義父である蓮司の事を嫌いではないのだが、出来れば早急に帰つてもらいたかった。

動機の軽い親子喧嘩に巻き込まれたくない。というか、彩にそんなもの見せられない。尚且つ、組み手もやりたくない。

その前に、何故蓮司が今日の前にいるのかが皆目見当がつかない。

菜々子と蓮司。仲が決してよろしくない　どころか、どちらかといえば悪いほうであるこの親子は、絶縁状態一步手前である。俺からしてみれば、物事に対する好き嫌いの問題つて事だけで絶縁状態にまで辿り着ける事が不思議でしようがない。が、曲がつた事が嫌いである真面目なのだが大いに人に流されやすく喧嘩つ早いわりには軽く天然な性格は、似すぎていて怖いくらいなのだが、それも原因の一つであるのかもしれない。

最近、離れて暮らす娘夫婦の心配と、初孫の様子に気がなる義母からたまに連絡を受けるのみだったので、軽く音信不通状態だった義父が現れた事で、軽い懐かしさはあったものの驚きを隠しきれずもなく

『何故驚いている？』

『えっ？　いえ、驚いては……』

つっこまれる始末。

『というか、何故女装をしているのだ？』

やはり気になっていたようだ。

『ま、まあ、いいじゃないですか。細かい事は気にしないで。ねっ、お義父さん?』

『む? そうか。わかった』

わかったんだ?

天然な性格で助かった。娘の旦那が女になつたなんて知られたらどんな事態になるか想像もつかない。いや、案外蓮司であればあまり気にしないかもしれないが。

緊張感の中からちよつとした安堵感が芽生えつつ、リビングに差し掛かったその時、蓮司はその体軀からは想像出来ない程高い声を発した。

『あ、彩ちゃんっ!』

な、何!? 何事?

蓮司は、ソファアの横でウサギのぬいぐるみと戯れていた彩に走り寄りそつと抱き抱えると、頬を摺り寄せて満面の笑みを浮かべる。そこには、些細な事で娘と喧嘩する大人気ない父親の顔はなく、孫を抱けた事が何より嬉しくて堪らないおじいちゃんの喜色満面の笑顔があつた。

『ああ、可愛いなあ。彩ちゃんは本当に可愛いなあ』

……あ、そつか

菜々子は蓮司を煙たがり、実家に近づこうとしない。至極当たり前的事だが、結婚式には曲なりにも父親だという理由で辛うじて呼

ばれていた。でもそれ以外は二人の間に流れる濁流の河幅が広すぎて、お互いに全く渡ろうとしないのだ。本当に格闘技の好き嫌いだけなのか、拒絶の根本的な原因は何だかわからないが、この二人の事だから他に理由があったとしてもどうせ大した事ではないと思っ  
てはいる。

だが、ここまでお互いが拒絶してしまっていては、親子であるにも関わらず全く顔を合わせる機会がないのだ。

孫に会いたくて堪らなかつたんだなあ。

菜々子が行かないなら俺が彩を連れて行ってやれば良かったのだが、今までは仕事が忙しくて行く暇なんてなかつた。

よく見ると蓮司の目は喜びのあまり潤んでいる。悲願達成。ようやく実現した孫との対面で感涙を抑えられないのだろう。

お義父さん……。

大変申し訳ない事をしてしまった。これからは菜々子が何を言おうが、ちよくちよく会いに来て頂こう。そして向こうにも行かせてもらおう。菜々子は節介親孝行が出来る立場にいるんだからやらせてあげなければ。

『お義父さんっ』

『む？ なんだ瑞希？』

『これからはいつでも来て下さい！』

『ああ、そのつもりだ』 えっ？ そのつもり？ もともとそ

のつもりだったの？

『仕事でな。今日からこつちに単身赴任してきた。住所はここだから、お前達もいつでも来なさい。あとコレお土産』

そういつと、蓮司は住所の書かれたメモ紙と包装された箱を渡してきた。

『あ、有難うございます』

単身赴任？

書かれた住所はここから歩いて30分ほどのところだ。俺が心配せずとも蓮司は彩に会いに来る気満々のようだ。後は菜々子が快く迎え入れるかの問題だが……。

ふとお土産だと渡された箱に目をやる。包装紙には「かるめの卵」と書いてある。

『おっ？』

「かるめの卵」は菜々子の故郷の名物的なお菓子で、菜々子の大好物でもある。内容は卵の形をした端なるスナック菓子をホワイトチョコでコーティングしてある一口大のお菓子である。初めて食べた時は見た目からは想像出来ない程の軽さにビックリした。

菜々子の好物だな。親父さんも、菜々子と仲良くしていきたいワケか。

『ところで瑞希……』

『……えっ、あ、はいっ』

『お前、何故女装をして』

またそれか……。

蓮司は彩と小一時間程あそんで帰って行った。また来ると言った時の、彩と離れる寂しさと、また会いに来れる嬉しさが入り混じった表情が印象的だった。やはり孫は可愛いのか、蓮司は犬猿の仲とも言える菜々子と仲良くやっていきたいようだ。

『……あと問題は菜々子だが……ああ、なんか面倒くせえ事になりそうだ』

俺は言い知れない不安感から溜め息を漏らした。



## 29・ケンカとヘンカの原因究明

夕日。

人類のみならず、地球上に息づく全ての生命に注がれる太陽光の残りかす。

日は昇り、また沈む。

そしてまた日は昇る。

夕暮れとは太陽にとって、「一生懸命、生き物に光注いでやったから、ちよつと休憩するよん」って布団に入っていく、安らぎの瞬間かもしれない。

『いいなあ、太陽……』

『何言ってるの？ それより、さっきから聞いているけど、これは何？』

菜々子は怪訝な表情で、親父さんの持つてきたお菓子を指差している。

『……かるめの卵ですが、何か？』アナタの好物の。

『そのかるめの卵が、なんでここにあるのか聞いているの！ アンタ、具合悪かったんだから外出してないよね？ 誰かが持つてきたんでしょ？ 誰よ？』

『そんなの……』ひとりしかいねえだが。

突然、田舎からやってきた親父さん。単身赴任で上京。そして娘、というより孫娘に会いに、手土産片手にやってきたところか。犬猿の仲である娘の家に。

『……寂しい寂しい単身赴任者だ』

『親父ね？』

『なんだよ、わかってんじやん』

『あのやるゝゝつ、なにしに来たんだ？』

親父さん捕まえて「あのやるう」って。しかも「なにしに来た」  
ときたか。可哀想過ぎるな。

『……で！？』

『は？』

『は？じゃないでしょ。なんて言ってた？』

『いや、なにも。彩と遊んで帰ったよ』

『ふーん』

なにが面白くないのか、感情のこもっていない返事をする菜々子。  
好物であるはずの「かるめの卵」の箱の表面や裏面を、落ち着かな  
い様子で交互に眺めている。

久しぶりに親が来てくれたんだから、もう少し喜んで良いだろ。  
趣味が合わないくらいで、そこまで毛嫌いせんでもと改めて思う。

『いいじゃんか、別に。親なんだから孫の顔くらい見にくんだろ』

『瑞希はアイツがどんなに酷い人間なのかをわかってないんだよっ』

『なんだよ？ 単に好きな格闘技が違うだけだろ？』

『……』

俺は何か間違った事を言ったのだろうか？

菜々子は目を見開き、まるで化け物が目の前にいるかのような表  
情で、俺を見つめている。そして、少し視線を下ろしながら深く長  
い溜め息を漏らした。

『はあああ。なにそれ？ そんな事くらいで親を避ける訳ないでし

よ？』

アナタなら十分やりそうです。

思っただけなのに左頬が痛い。利き手を使うんじゃないよ。

『いい、瑞希？ アイツはアタシに出ていけって行ったのよ？ 一人娘のこのアタシにつ！』

『お前がなんか悪い事したんだろ？』

『してないわよ！』

『じゃあ、なんで？』

『知らないわよ！ とにかく、アタシが高校三年の時にアイツが言ったのよ、「お前など知らん、出ていけ」って。だからアタシは上京してきたんだから』

『う、ウソだろ？』

『ウソじゃない！』

なんだか信じがたいが、菜々子はウソが巧くない。だけど、話をする菜々子からは、ウソを言っている時の白々しさが感じられない。そもそもそんなウソをつく理由もないか。

『じゃあ、本当だとして、その後どうなったんだ？』

『どうしたって、ドロップキック喰らわしてやったわよ。当然でしょ？』

当然ではないだろ。

それに、別に攻撃方法など訊いてない。本当に手が早い奴だ……

足か。ん？ 喰らわした？

『えっ、なんだって?!』耳を疑いつつ再度質問する。

『は？ だからあ、ドロップキックを』

『喰らわしたって?!』

『そう』

『親父さんが喰らったのか?!』

『だから、そうだって。他に誰がいるのよ。何?』

変だな？

おかしい。

何度も組み手を交わしたからわかるが、親父さんは格闘技の腕はかなりのものだ。確か空手の有段者でもあったはず。当たり前的事だが、菜々子は単なる格闘技好きで、格闘家というわけではない。見よう見まねのドロップキックなど、あの親父さんが避けられないはずがない。

『その時、親父さん具合でも悪かったのか?』

『はあ？ 知らないわよ。まあ、確かにその時期は不眠症だったみたいだけど』

『不眠症……?』

親父さんが不眠症？

で、菜々子を知らないと言った？

あまりの睡眠不足で幻覚でも見てたのか？

なんかモヤモヤする。でも、この辺りに仲を取り持つヒントが隠れてるような、漠然とした予感がある。

『親父さん、他になんか言っただけじゃなかったか?』

『知らないって。ドロップキックがクリーヒットした瞬間に親子の縁も切ったわよ』

切るなよ、そんな簡単に。

『そつから口聞いてないのか?』

『そんなことないけど』

切ってねえじゃん。

『お母さんの手前、仕方なくよ。……そういえば、ドロップキックの後ビツクリした顔して「菜々子か?」なんてバカみたいな事言ってたけど。他に誰がいるっつーの!』

やっぱりそうか。

親父さんはそのころ幻覚に悩まされて不眠症だったんだ。で、菜々子を幻覚と勘違いして……。でも普通に暮らしていて幻覚なんて見るのか? なんか変なクスリでもやってたのか? いや、あの人に限ってそんな事はないな。でも、だったらなんだ?

まあ、四の五の考えていても仕方がない。直接聞いてみるか。

『わかった』

『なにがわかったのよ?』

『親父さんに直接聞かないとわからないって事がわかった』

『それ日本語で言つと「わからない」って事じゃないの?』

『うるさい、お前に言われたくない』

『なんだって!?!』

口が滑った。左頬の感覚がなくなりそうだ。

『とにかく、親父さんそこ行ってくる』

『はあ? なにいつてんのよ。もうほっときなさいよ、あんな奴!』

今度はあんな奴呼ばわり。つくづく可哀想。

『あつ……そ、それに、お客さんよ』

『は？ 客？ 誰？』

『は、隼人』

リビングから廊下を抜け玄関に着くと、寂しげな後ろ姿の隼人が廊下に腰を下ろしていた。靴を履いたまま。

『……おい』

『あつ、み、瑞希。話終わったの？』

振り向いた隼人は少し半べそ気味に微笑んだ。その顔からは安堵が滲み出ている。

『……お前、いつから居たの？』

『菜々ちゃんとバツタリ会って、一緒に来たんだよ。忘れられちゃったのかと思った』

大正解だ。菜々子は間違いなく忘れてたぞ。「あつ」とか言ってたし。

『まあ、とにかく上がれよ』

用件は検討がついていた。先日、香奈との騒動により、聞けなかった「妊婦石」に関する報告についてだろう。

リビングに戻るとテーブルには淹れたてのコーヒーが湯気を立ち上らせていた。いつになく気が利く。隼人へのお詫びのしるしだろ

う。

『で、話つてのはあれか？』

『ああ、この間報告出来なかった、あの石についてだ。石に関する研究所で働いてる知り合いに鑑定してもらった』

隼人はそう言うと、持っていたカバンからハンカチにくるんだ手のひら大の物体をテーブルに出した。先日、観音寺に向いた際に、断りもなく砕いた妊婦石の欠片だろう。

『調べてもらったところ、コレは花崗岩を加工したものらしい』

『カコウガン？』なんだそりゃ。

『ああ、溶岩が固まった深成岩の一種』

知らないの？とでも言うように説明を続ける隼人。知らねえよ。

『別名、御影石』

『ミカゲイシ？』それも知らん。

『ああ、よく墓石とかに使われるものらしい』

『墓石？ ……まあいいや。で、他に何がわかったんだ？』

別に石の種類などどうでもいい。要は、何故あの石に人を妊娠させる力や、男を女にする力があるのか知りたいだけだ。

『ん？ それだけ。どこにでもある石だって』しれっ、とした態度で言い切る。

『それだけ！？』

んなわけねーだろ？

もっ和他になんかあんだろ？

そんな期待も虚しく、隼人はコーヒを啜り、再度『それだけ』と答える。

『まあ、研究所で言ったって、そんな不思議の原因なんてわかんないよ。一応ダメ元で試しに調べてもらっただけだ。だが、この石がクサイ事には変わりはない』  
『変わりないって言ったって……』

自信あり気の隼人を余所に、俺の心は墮落しきっていた。器物破損の行動をとった隼人を尻目にしていたが、やり方はどうあれ、結構期待していたからだ。男に戻る方法の欠片でも見つければ思っていたのに。

『諦めるな。まだ手詰まりになつたわけじゃない』

銀縁メガネの向こう側。隼人の顔面には、不敵な笑みが貼り付いている。

『石を科学の側面から調査した結果は、さっき報告した通りだ。まあ失敗つてとこだな』

『だったら』

『まあ、待てつて。あくまでも、「科学的にはわからなかった」だ？』

なんだ？ なにが言いたいんだ？

『コレは超常現象だよ。瑞希の身体に子どもが宿つた。コレが超常現象以外の何になる？ 超常現象は超常的に調査しなきゃわからないって事だよ』

『どうやんだよ、超常的な調査つて？』



『わからない』この、しれっとした態度が癢にさわる。

『じゃあ、ダメじゃねーか!?!』

『ただ今のところ、この現象の引き金になったものは妊婦石以外ない。妊婦石からの何らかの力が影響してるとしか考えられないだろ。妊婦石は普通の石。調査の結果はそうだが、それは表向きだ。何か裏側にある気がする。普通の石にそんな力が宿った原因で奴があるはずなんだ。それを調査する』

『なんだかよくわからねーが、調査つてなにすんだよ?』

そこだ、と言いながら隼人は妊婦石の欠片を右手に持ち、視線の高さまで掲げる。

『あの住職が言ってた事、覚えてるか?』

『ん?』

住職? ああ、あの胡散臭い禿げ爺さんか。

『 祟り』

ぞくりとする。

目の前にいる隼人の口から発せられた3つの音が、耳のすぐ横から聴こえたような不快感。

『住職は、あの石は5年ほど前に人を妊娠させる力が出てきたと言っていた。で、その石自体は10年位前に他の寺から持ち込まれたと言っていたよな? 原因は祟りだとも。石のルーツを探るんだよ。あの石が、観音寺の前にとの寺にあったのか。そこでは何が起こっていたのか』

石のルーツ……。

石の力がどのようにして宿ったのかを探ると言う事が。面白そうじゃねーか。面白そ

隼人が笑いかけてくる。

一縷の希望が見えてきた瞬間、俺の表情の変化が見て取れたようだ。

こうなりゃ、とことんやってやる。必ず俺は男に戻ってやるんだ。

『 瑞希は留守番だけだな 』

しかも、ルーツを探る為に旅行も出来て一石二……なんだって？

『 ……隼人、今なんて？ 』

『 だから、地方の寺とやらには俺が行ってくる。瑞希は自宅待機 』

隼人は笑顔の表情を全く変える事なく続ける。

『 だって、お前悪阻が酷いんだろ？ 今は大事な時だから、ゆっくり休んでいなさい 』

『 いや、だってお前、温泉とか…… 』

『 休んでなさい 』

笑顔の中に鬼を見た瞬間だった。

### 30・ツライツワリと嫌な予感

吐き気というものは何処からくるのだろうか？

乗り物に乗れば酔うし、酒を飲めば酔う。そんな事は知っている。乗り物酔いは外的振動により三半規管に誤動作が生じて引き起こされるらしい。酒酔いは体内のアルコールを分解する際に発生する有毒物質、アセトアルヒデドが血液中に無遠慮に蔓延る事で起こると、専門知識豊富な隼人から教わった。

では、この悪阻はなんだ？

最近になって、倦怠感はピークに達している。そして、どんな匂いにも過敏に反応する吐き気。今日も電車で隣り合わせたオッサンの体臭に意識を持っていかれた。

悪阻には酷い人とそうでない人がいるらしいが、俺は間違いなく酷い分類に入るだろう。悪阻にあった人は、皆そう思うのかもしれないが、間違いない。俺ナンバーワン。

そもそもなんで、悪阻に強弱があるんだ？

よく、胎内の子どもが男か女かで違うという、全く根拠がなさそうな話を耳にする。

じゃあ、お腹にいるコイツは男なのか？ 全く、男か女かの些細な違いだけで、余計な反応を示すな、俺の身体め！

会社のデスクに突っ伏した状態で、心から自分の身体に悪態をつくが、体調は一向に好転する兆しをみせない。全く仕事が手に着かない。妊娠した人が産む直前まで仕事するのを目にする事もある

が、よく仕事なんか出来るなと感心の域を出て尊敬してしまう。神だ、神。

「だ、大丈夫ですか？」

隣に座る安藤が、恐る恐る声をかけてくる。

「貴様、どの面下げて発言している？ この状態のどこを見て「大丈夫」とぬかす？」

という言葉をつきかけたのを懸命に我慢するも、突つ伏した身体に溜まった負のオーラが毛穴から放出するのは止められない。

「だ、大丈夫……じゃない……けど、大丈夫……です」

「す、すみません。大丈夫なわけないですよね？」

安藤遊人。

根っからの遊び人。

俺が男だった時は、週末になるとよく合コンへ繰り出していた。最近では男の俺である「瑞希」の抜けた穴を埋めるため仕事に精を出してはいるが。

女なら誰でもいいのか？ 元男であり、現在は妊娠中の人妻という肩書きを持つこの俺に声をかけてくるとは。人妻だぞ、人妻。そういうえば、女が結婚すると人妻だが、男が結婚するとなんだっけ？ 人夫だっけ？

人間切羽詰まると、思考回路に乱れが生じ、冷静な判断どころか、どうでもいい事ばかり考えてしまうようだ。

まあ、とにかくコイツには人への配慮が感じられない。もういいから、話しかけんな。

『あおう、コレ食べますか？』

コイツ、どうしてくれようか？

配慮どころか、嫌がらせをしようとするなんて、精神回路が焼き切れているのではなからうか。

この気持ち悪い状況で何を食えというのか。最近はどうな食べ物も口に近づけるだけで、その匂いでリバーソしそうになるから、弁当も持つてきていない。

そんな俺に「食べますか？」だと？

貴様、楽に死ねると思うなよ……？

背を向けていた安藤に振り向く。我慢という圧縮装置で極限まで凝縮させた負のエネルギーを、今こそ爆発させる時。

既に、物事の善悪すらもつかない心が、肉体を操作し、ギュツと拳を握らせる。

が、安藤が持つ物体を見て、身体の動きを止める。

『レモン？』

『はい、レモンです』

小さめのタッパーにスライスされたレモンがきれいに並んでいる。

『コレ、どうしたんですか？』

『ああ、家から持ってきたんです。最近、蓮見さんの悪阻が酷そうだったんで、母に訊いたらコレがいいかもって。なんか、人によって楽になるものが違うって聞いたんですが、母は「私はコレが良か

った」って言ったので。蓮見さんにはどうかなって

すっばい。

もう、匂いからしてすっばい。

そもそも、すっばいのは苦手で、レモンなんかは嫌いな部類に入る。

が、今はどうだろう？

食べてみたい、という欲求が身体を勝手に動かし始める。

『ひ、一つ戴けます？』

どうぞ、と安藤から差し出されるタッパに手を伸ばす。

一口くわえると、レモンの酸味が口内に沁みていく。悪阻による唾液や胃液の不快感がサツパリと洗い流されてゆく。

『……お、美味しい』

『ホントですか？ 良かった！』

一つ食べただけで、胸のムカつきが落ち着き、吐き気が嘘のように消えた。倦怠感は相変わらず残っていたが、先ほどまでとは比べものにならないくらい体調がいい気がした。

『有難うございます。コレすごいですね？』

『はい、妊婦さんは結構酸っぱいものが食べたくなると聞いて……』

照れ隠しか、左頬を掻く。人差し指に絆創膏が巻かれている。

まさか……。

『コレもしかして、安藤君が切ったんですか？』

『あ、はい。そうですね……歪でした？』

『あ、そうじゃなくて……有難うございます』

『いえ。こちらこそいつも仕事を教えて頂いているので。そのお礼です』

前言総撤回。

誰だ、こんな素晴らしい青年に対し、「配慮がない」などと言った愚か者は？

元々俺の為に用意したという、レモンのスライス入りタッパを有難たく受け取り、この日1日を乗り越えた。

翌日からは菜々子にレモンスライスを用意してもらい意気揚々と仕事に取り組んだ。

数日後、ようやく少しずつ悪阻も収まりを見せ始めた。食欲が出てきたのもあり、久しぶりに「懇談室」へ顔を出す。

『あ、瑞穂さん、いらっしやい』

社内では数少ない、俺の正体を知っている人物、島谷真澄が意味深な笑顔を浮かべてくる。苦笑というか、ばつが悪そうな消え入りそうな笑みのまま、横目で蒼井渚をチラ見する。

『そうそう、瑞穂さんに相談があったのよ。帰り時間ももらえる？』

『……………いいですよ？』

『瑞穂さん。瑞希先輩はいつ戻ってくるんですか？』

蒼井が唐突な質問を浴びせてくる。お弁当三人組の一人である駿河明日香は、いつも通りに社内関係図が描かれたホワイトボードを相手に睨めっこしている。

『ごめんなさい、ちょっとわからないなあ』

そうですか、と全く腑に落ちない表情の蒼井。島谷は困った表情を浮かべ俺に目配せすると昼食を取り始めた。

この日はホワイトボードの内容には一切触れず、昼食が終わると同時に散会した。

就業時間の終了の合図とともに身支度を終えた俺は席を立った。向かうはケーキシヨップ「舌鼓」。

島谷からの指定で、そこで落ち合う事になっていた。島谷、そして婦人科で知り合った佐藤雪に正体がバレた現場。その事を思い出し、若干気持ち引いた部分はあったが、ケーキの美味さの前では、なんの問題でもなかった。

入店し二階へ上がると既に島谷が席を確保していた。店内で一番奥まった位置にあるテーブル。

『あ、こっちよ』

こちらが気づくのとはほぼ同時に手を振ってきた。

『待ちましたか?』

『ううん、私も今来たところ』



席に着くとすぐに店員が注文を取りに来た。いきなり後ろに、音もなく現れてビックリした。前回と同じ店員。相変わらず素早い、気配ぐらいは発して欲しい。

『アイツ剣道か何かやってるな?』

注文を受け、滑らかな足取りで厨房へ消える店員。

『え、よくわかったわね? あの店員さん、実家が剣道の道場なのよ』

なんでそんな事まで知ってるんだ、この人は?

噂話好きも、ここまでくると脅威である。

『……実は、渚ちゃんの事なんだけど』

武芸を嗜む店員が運んできた、甘い魅惑の嗜好品を口に運びながら用件を聞く。

『最近、ずっと瑞希君の話題を聞いてくるのよ。本気みたい。菜々子ちゃんから連絡受けて聞いてたけど、あの執着はちよつとマズいわよ』

『マズいって、何がツスカ?』

『抑えられなくなってる』

『てか、ちよつと待って下さい。考えたら、俺、瑞希の時には彼女とあまり面識ないですよ?』

『うーん、それなんだけど……あの子って、ほら、お金持ちでしょ?』

『は？ 金持ち？』

初耳だし、それと執着心になんの関係があるのか？

『あれ？ あの子がウチの社長の娘だつて知らないの？』

『……初耳ツス』

通りで重役出勤。そういえば社長の名字も「蒼井」だ。ちなみに従姉である島谷の実家はごく普通の庶民派家庭だそうだ。

『で、それと、俺への執着になんの関係が？』

『うーん、コレはあくまで私の憶測だけど……』

彼女は子どもの頃から何不自由なく育てられてきた。これは小さい頃から見知っているし、「新入社員で重役出勤」がなによりの証拠。だから、自分の思い通りにならないと気が済まない。

そして、社長は瑞希の事を気に入っており、家で「優秀な社員」として聞かされてきた蒼井。入社前から瑞希の事になっていたとしてもおかしくない。

その後、入社。香奈の事件をきっかけに瑞希を間近で接した事で、完璧に恋に落ちた。

つてとこじゃないかな、と紅茶を口にする島谷。

『憶測の域はでないけどね』

『うーん、有り難迷惑だ』

『で、ここからが本題』

『ん？』

ごめん、と鼻先で手を合わせる仕草で謝罪してきた。

『な、なんスか、いきなり?』

『ヤバいかも……』

『だから何が?』

『私、あの子に「瑞希君は諦めなさい」て言ったのよ。そしたら、

「なんで?」ってスゴい剣幕で……。だから……』

『だから?』

妙に嫌な予感がする。

『だから、「瑞希君には、それはそれは可愛い奥さんがいるからよ」  
って言ったのよ』

『やだあ、先輩ったらバカ正直なんだからあ』

『島谷さん、コイツ……』

いつの間に現れたのか。

俺の隣に菜々子が座っている。

『あ、菜々子ちゃん、やつときた』

『おそくなりましたあ、すみません』

遅くなった事を謝るより先に、元会社の先輩捕まえて「バカ」呼ばわりした事を謝れと思う。

『島谷さん、菜々子呼んだんですか?』

『うん、菜々子ちゃんにも聞いてもらおうと思って』

『ふーん』

当の呼ばれた本人は、メニューのケーキを選ぶ事に夢中になっている。

しかし、なんだってこんな事で謝ってくるのか全く不明……。その事を問いたです。

『だって、あの子欲しいものには何だってするわよ？ 相手が身の危険を感じる程に、様々な事を。気をつけてね。菜々子ちゃん  
が危険だから……。しっかり守ってね？』

嫌な汗がじんわり着衣を濡らし始めた。

### 31・家族を護るは男の務め

環境の変化は身体に影響を与え、身体への影響は心に変調をきたす。

逆もまた然り。

まさしく俺の心の同様は、味覚を掻き乱してしまっていた。

ケーキが美味くもなんともないな……。

島谷の話は折角の「舌鼓シヨート」を台無しにしてくれた。

俺の心身に多大な影響を与え、至福のひとつきを破壊した原因が脳内を埋め尽くす。

蒼井渚。

島谷の従姉妹であり、我が社の社長令嬢であり、新入社員の分際で重役出勤の常習犯。

菜々子の親友である香奈とも繋がりがあり、一時は俺達夫婦の絆を断ち切ろうと暗躍した香奈の協力者でもあった人物。

なんの勘違いか、男の時の俺、つまり瑞希に対し恋心を抱き、今度は主体者として俺と菜々子の関係を引き裂こうとしているらしい。

あくまで島谷の推論。

されど島谷情報はバカに出来ないのも事実。

慎重にならざるを得ない。

『で、彼女に対してどう気をつければいいんすかね？』

気をつけると言うことは、今までにも自分の私利私欲の為に多少強引な手口を使い、欲求を満たしてきた事実があったの事だろう。

『わからないわ』

『は？ わからない？ 島谷さんは、今までにも彼女が色々やらかしてきたから注意しろって言ってるんですよね？』

『渚ちゃん、というより父親ね』

父親？

社長の事か？

『以前、渚ちゃんとトラブルがあった連中、要は邪魔者達は家族共々行方不明になったりしてるの。まあ、詳しく調べたら、本人やその家族の仕事の都合で地方に突然飛ばされたとかなんだけど。で、原因は社長が裏で手を回してお金の力使っちゃった事で……』

『ち、ちよつと待って……社長が金使ったって……ウチの会社の社長でしょ？ あんな中小企業の会社の社長が裏金使ったって……』

今でこそ少しずつ利益が出てきているが、社長自体がそもそもそんなに潤った収入を得られるような会社ではないはず。

『ああ、あの会社は社長が道楽でやってるだけだから。あそこはもともとが大金持ちの家系だからね。社長の曾祖父の代くらいから。だからお金は有り余ってるみたい』

……そういうこと。

でも……？

『ウチの母親の妹が渚ちゃんの母親。金銭的なおこぼれは一切ないのよね』

疑問の残った表情で島谷を見つめると、補足が入る。

……なるほど。

『じゃあ、そのお邪魔な方々は消されたとかではなくて、無事って事ですよね?』

『社長が動いている場合はね』

『えっ? それって……』

『社長はなんだかんだで平和主義者、ってほどではないけど物事を穏便に済ませようとするタイプだから、裏金使って地方に飛ばす程度。まあ、いざとなったら私が止めるから大丈夫……弱み握ってるし……』

しれっとした表情で言いのける島谷。皿に残った一口サイズのスポンジケーキをフォークで突き刺し、恍惚そうに笑みを浮かべる。

一番怖いのはアンタだ。敵じゃなくて良かったとつくづく思う。

……でも、そうであるなら

『問題解決じゃないですか。島谷さんが社長の弱み……敢えて聞かないですが、それ使って社長を抑えてくれるのであれば、俺らが注意する必要がないんじゃない?』

『社長はね』

『はあ? ……いや、だから今まで色々やってたのは社長でしょ?』

『?』

『今まではね』

『今までは?』

『今までは、事ある毎に社長が裏金使って動いてた。でも、今回は私が阻止するから社長は動かない。てことは?』

蒼井渚本人が動く、ということか……。

俺の表情から、考えている事が一致したのを確認した島谷は、大

きく顔いた。

さつき、何に注意すればよいかという質問に対する答えがここにあったようだ。

今までは社長が裏金使って動いていたが、今回は今まで自身の手を汚さなかった蒼井渚本人が動く。どう動くかもわからないから、どう注意すればよいかもわからないって事だ。

『まあ、とは言ってもまさか命を狙ってくるとか、そこまで馬鹿じゃない……と思いたい』

『……ですよねえ』

『ねえ？』

ケーキを食べ終わり、セットの紅茶も飲み干した菜々子が、つまらなそうに頬杖をついて話しかけてきた。

『なに？』

『さつきから何を話してるの？』

『ええ！？』

今まで全く発言がなかった理由がわかった。話についてこれていなかったようだ。

『要は、何かしてきたら全力で振り返りにすれば良いんじゃない？』

10分程かけて説明した結果、菜々子なりに出した結論がこれだ。恐ろしいほどに短絡的過ぎるが、何をしてくるかかわらない以上、議論を重ねても的確な対応策が浮かぶ筈もなく、「それでいいか」と話を打ち切ることにした。



店を出る際に、俺は気になっていた事を島谷に質問してみた。

『なんで島谷さんはこんなに俺達の事を心配してくれるんですか？  
叔父さんでもある社長を敵に回してまで』

『うーん、社長を敵に回すつもりもないし、その前に社長はそんな悪い人でもないし……でも、あなた達に対する行動は、菜々子ちゃんや（便利な使いパシリの）瑞希君が好きだからよ。他意はないわ』

途轍もない他意を感じつつ、俺達は店を後にした。

島谷と別れたあとも、何かよくわからない違和感を感じていた。ただ、考え出すときりがなく、答えもどうせ纏まらないだろうと、思考を一旦外へ移す。

菜々子と二人で歩く自宅近くの桜並木。

梅雨も半ばのこの時期は全く美しさを感じない風景だが、やはり菜々子と並んで歩いている感覚はどこか心地良く感じる。

菜々子を見ると不安な表情を地面に落としながら歩を進めている。

再度、蒼井の事が頭を過ぎる。

なんとかしなければ。

通常であれば、俺が蒼井に直接「俺達家族を壊すような真似をするな」と言えばすむ話。だが、今の体は瑞穂なのだ。言ったところでキチガイ扱い。仮に瑞希だと認識したとしても、下手したらその事をネタに脅されたりするかもしれない。でも、菜々子を護れるのなら、それでも構わない。いざとなれば、覚悟を決めて家族を護るのが男の務めだ。……今は女だが。

『大丈夫だ。俺が絶対に護ってやる。安心しろ』

『……瑞希』

『……菜々子……あれ？ お前、そういえば彩はどうした？』

『え？ ああ、彩？ 香奈がうちで面倒みてくれてる。今日は仕事休みだからって』

『香奈ちゃんが？』

『うん』

香奈か。確か蒼井と繋がりがあったな。

『よし、香奈ちゃんに少し話を聞か』

不安感を一秒でも早く消し去りたい思いで、俺達は家路を急いだ。

### 32・好青年とストーカー

自宅マンションに着き、我が家のドアを開ける。

お目当ての香奈は、彩をハイハイさせて遊んでくれていたようだ。

『菜々子、お帰りなさい。あ、瑞希君、お邪魔してます』

『悪いね香奈ちゃん。彩見てもらっちゃって』

『全然大丈夫だよ。彩ちゃんといると楽しいし』

遊び疲れた彩は、離乳食もそこに寝てしまった。ベビーベッドに寝かせた後、香奈を交えての夕食となった。

『申し訳ないね。夕食まで作らせちゃって』

帰ってすぐ食べられるようにと、香奈は夕食を用意してくれていた。ほうれん草と鳥の肉団子の入ったクリームシチューとシーザーサラダ、持参した手作りコッペパンが食卓に並ぶ。

『このくらいで罪滅ぼしが出来るなら安いものよ』

『香奈!?!』

『あ、ごめんなさい』

先の一件は、香奈にとつてはまだ尾を引いているようだ。俺や菜々子がもう気にしていないと言っても、元来真面目な性格の香奈は未だに謝ってくる。菜々子はそんな香奈の態度が気に入らないらしい。親友なんだから、もういい加減気にしてほしくないのだから。俺は菜々子のそういう竹を割ったような性格が大好きだ。

ほらまた謝る、といいながら香奈を見つめる菜々子の表情は、親友に対する慈悲の色に染まっていた。

食事の挨拶をし、心のこもった料理を口に運ぶ。

『うまつ！』

『ホント、美味しい！ さすが香奈』

『本当？ 良かった！』

美味しい料理を囲み、楽しい団欒が続く。三人の関係が、今はとも心地よい空気を纏って結ばれてる感覚があった。

そんな状況の中、話を切り出すのは香奈にとって綴じかけた傷口を開く行為に値するものかもしれない。しかし、菜々子の命にも関わるかもしれない問題なので、意を決して話題を振る事にした。

『……香奈ちゃん』

『えっ？ なに？』

『実は蒼井渚の事……なんだけど？』

『えっ！？』途端に香奈の表情が曇る。

『いや、ごめんね。変な事言っちゃって。実はさ』

俺は島谷真澄と話した内容を香奈に伝えた。香奈に話す事で、現時点で蒼井渚がどんな手段に出てくるのかを見極めたかったのだが、香奈の答えは

『わからない？』

『ごめんなさい。渚ちゃんとは本当につい最近知り合っただけで、どういう人かっというの……ただ、そんな危ない事をしようとする子には見えなかったけど……』

『だよねえ……そうだよなあ』

香奈にとって蒼井渚は、恋敵を陥れる為の協力者に過ぎなかった。

悪く言えば道具だ。遠出をしたければ車に乗るし、膨大な情報を瞬時に得たい時はパソコンや携帯を手に取る。だが、使用者は車やパソコンなどの内部構造がどうなっているかなど気にもとめないものだ。使用しているうちに、何らかの内的要因が働き、故障が発生し良からぬ事態を招く事になるなどわからないのだ。

蒼井渚という便利な道具は予期せぬ故障を発生し暴走してしまった。その原因なんて、香奈が知るはずもない。

『ごめんなさい。役に立てなくて……』

『あ、いや、大丈夫。こつちこそ変な事聞いてゴメン』

『でも、まだ探る事は出来るかも』

『えっ?』

『実は渚ちゃん、まだうちの店に来ているのよ。私に恋敵宣言してからもたまに』

『「恋敵」? ああ、あの子は、香奈ちゃんが俺の事を好いているって思ってるんだっけ? ……あれ……?』

なんだ? なんか引つ掛かるものがある。

『どうしたの?』

『えっ? ……いや……』

島谷と話した時も感じた違和感。今回の一件。全体的に何か矛盾を感じる。だが、その正体がわからない。靄がかって手を伸ばしても掴めない。

『要は、何かしてきたら全力で返り討ちにすればいいんじゃない?』

本日二度目の短絡的回答。菜々子はもう、この議論になんの興味もないらしい。自身に襲いかかる可能性のある事柄に対し、ここま

で簡単に結論をつけられる神経は流石というか何というか。

島谷との話の時と同様、ここでも菜々子に半ば強制的に議論を打ち切られた。

香奈は帰り際、これから注意して蒼井渚の動きを見ていくと言っていた。

翌日の仕事中、安藤が昼食に誘ってきた。

まだ何も起きてはいないのだが、蒼井渚の存在に対するプレッシャーもあり、疲れが顔に表れていたらしく、気遣いも兼ねて誘ってくれたようだ。

昨日の今日で蒼井渚もいる「懇談室」で昼食をとる気も起きず弁当も持ってきていなかった事もあり、快く承諾した。

先日のレモンスライスといい、安藤の好青年レベルが急上昇している。女になる前はチャラ男としか見ていなかったが、本格的に見直してきた。この気遣いは必ず今後の営業マン人生で輝きを放っていくはずだ。

昼休み。

駅前のイタリアンでパスタを食し社に戻る道すがら、不意に声を掛けられた。

『あの、これ落としましたよ？』

振り返ると、緑色のカードを差し出す女性が立っていた。

『私？ 有難うございます』

受け取ったカードを見て硬直する。菜々子の健康保険カードだった。

マズい！ 見られたか？！

妊婦検診で使用している菜々子の健康保険カード。それなりの訳があつての事だが、違法である事には変わりない。

拾い主の女性は見知らぬ人物。問題はない。だが、安藤に見られると……。

恐る恐る安藤に目をやる

彼はカードには目もくれず、一点を凝視していた。

『 ゆ、優子ちゃんっ？ 』

『 やっぱり遊人君だ。会いたかった！ 』 優子と呼ばれた女性はそう言つと、安藤に抱きついた。

咄嗟の事で何だかわからなかったが、安藤の表情が喜ばしい再開を物語るものではないことを暗示していた。

『 ……実は付きまとわれていました。元々付き合つてもいなかったんですが、ある合コンで知り合つて、いつの間にか電話番号とアドレス知られてたり、家の前で待ち伏せされてたりで。共通の友人を介して話したりしたんですがダメで……挙げ句は警察呼んで事件解決……と思つたんですけどね…… 』

まさか会社まで捜し出しているとは、と落胆する安藤。

要はストーカーというやつだ。

確かに嫉妬深そうだった。安藤が形式上、俺を紹介する時の背筋が凍りそうなほどの冷たい瞳。

『でもやっぱり、また警察に動いてもらうしかないんじゃないですか？』

『そう……ですよね？　なんか断るのも怖くて。でも、やっぱり無理なものは無理だし……また警察に言ってみます』

以前よりは法律も変わり、ストーカーによる事件の最終結末は最悪なもの免れる事が増えてきているようだが、まだまだ警察の力が十二分に及んでいないのも事実なのかもしれない。

だが、だからと言ってなされるがまま、手をこまねいて見ているだけでは何も解決しないのも事実。

未だに実力行使にでない蒼井渚にしても、今後の展開によっては警察に頼らざるを得ない状況になるかもしれない。

会社の後輩である蒼井渚を警察に突き出す事は出来れば避けたい良心の呵責もあるが、会社というブランドに著しく傷が残るし、犯人が社長の娘とくれば、その傷は会社への致命傷となりかねない。

会社がなくなれば、俺達家族も大打撃を受ける。

かといって、蒼井渚の暗躍を放置する事も家族を危険に晒す事に変わりはない。

穏便に事を済ます道をなんとしても探さねば……。

苦悶の表情を浮かべる安藤を尻目に、固く決意したのだった。



### 33・穏やかな休日の嫌がらせ

穏やかに流れる休日の昼下がり。

リビングに明るい雰囲気を作り出す採光用の出窓から外を眺める。マンション脇の道を行き交う人に目を向ける。ジョギングに勤しむ青年。買い物袋を両手に、器用にバランスをとって歩く女性。飽きることなく井戸端会議を続ける主婦達。向かいの公園へ駆けていく小学生。

ふと視線を上へ移す。

そこには優雅に流れる雲が、心を落ち着かせる絵画を描くように、恒久的に広がる青い空に彩りを与えていた。

これといった対象に焦点を合わせることなく空を眺めながら、最近、身の回りで起こった出来事に想いを巡らす。

身体の変化と、妊娠発覚。

慣れない体での出勤。

悪阻という名の洗礼。

親族の仲違い。

準スニーカーによる戦慄……。

様々な現象が、ほぼ同時期に起こった事による心身への影響は計り知れない。

ここにきて、ようやく悪阻が少しずつ和らいできたが、出芽していく悩みの種は尽きることはなかった。

だが、悪い事ばかりではない。

こんな状況に至る前は、仕事に追われ、菜々子との仲は悪くなる一方だった。仮に香奈が暗躍しなくとも、離婚も時間の問題だったかもしれない。

しかし、俺は女性の体になる事で僅かながら菜々子の気持ちばかり、菜々子も俺の身体を案じて接してくれるようになった。仕事に関しても、社長や部長の計らい、そして安藤の頑張りのおかげで以前とは比べものにならない程、早く帰れるようになり、家族で過ごす時間が莫大に増えた。

奇しくも、女性の体に変貌を遂げた事、子どもを胎内に宿した事が、仕事との距離、菜々子との距離を絶妙なものにしてくれたようだ。

悪阻による心境の変化も少なからず現れていた。

悪阻は本当に辛い。激しい吐き気と嘔吐。身体の倦怠感。頭痛や眠気。そして食欲不振。

始めの頃こそ、「なんで俺がこんな目に……」との思いしかなかったが、徐々に……徐々にではあるが、「こんな大変な思いをして子どもを産む女性」達に対する尊敬の念が沸々と湧き上がってきた。あの時は気がつかなかった。彩を身ごもった時の菜々子の嬉しくも辛い妊娠生活。家庭を顧みない夫である俺。不安だったに違いない。それでも頑張って彩を産み、育ててくれた。

有難う……。

『本当に有難う菜々子……』

窓辺でそつと呟く。

口をついて出た妻に対する感謝は、菜々子の顔の輪郭に似た空に浮かぶ雲に向かい飛んでいった。西向きの出窓から吹く心地よい風は、髪を揺らし頬をくすぐる。

次の瞬間、菜々子雲が微かに微笑んだ気がした。

『邪魔なんだけど……。掃除出来ないでしょっ？』

本物の菜々子が不機嫌に掃除機を足にぶつけてくる。普通に痛い。

前言を総撤回しようかと心が動いたが、ベビーベッドで寝息を立てる彩が目に見え、何事もなかったように掃除が済んだ場所へ移動する。

菜々子が体を張って乗り切ってくれた出産という険しい山。

今度は俺の番なのか。

まだまだ目立つことのない腹部は新たなる生命を育てている。だが、まだ夢の中の出来事でもあるかのような感覚が拭い去れない。気がつけば、男の身体に戻り、お腹の子も菜々子に宿る、そんな風に丸く収まってくれるのではないかと、淡い期待が頭の中で一杯になる。

だが、最近はそのような上手くはいかないと解りはじめていた。

ただ不安なだけ。

有り得ない状況下に置かれ、前人未踏の目標を提示された事による不安感。元が男であるはずの自分に、果たして達成出来るのかどうか。

漠然とした不安感は決意の妨げになり、物事に対する能動性を失わせる。

ソファーに隣接するベビーベッドに再度目をやる。

いつの間にか彩は眠りから覚め、ベッド内に置かれたぬいぐるみと戯れていた。

やるべき事は決まっているのだろう。

後は自分自身が決意出来るか否か。

未だに揺れ動く弱気な自分をいかに説き伏せるか葛藤していると、掃除機を止めた菜々子が声をかけてきた。

『瑞希、郵便受け見てきてよ』

『ん？ …… ああ』

『あ、ついでに買い物も行ってきて』

『いいけど、何買っ』

『あ、それと彩のオムツ替えておいてね』

『いっぺんに言うな』

『…… なんか言った？』

『別に言っていないです』

とめどない依頼に軽い不満を漏らすも、今更始まった事でもないので、苛立ちをため息に変換し立ち上がる。

買い物用のメモを受け取り、外へ。階段で一階まで降りたところで気がつく。

『あ、財布。 …… 鍵もか』

メモだけ持って来たようだ。踵を返し階段を上ろうとするも、折角降りたのだからと郵便受けに向かう。

ダイヤル式の鍵を回し小さな扉を開けると

『あれ？ この匂い？』

甘い香りが鼻腔をくすぐる。

中には手紙用の封筒が一通。その他は何もない。

手に取るそれは、ピンク色の可愛い花柄。宛名には「蓮見菜々子

様」と印字されている。

『菜々子宛て？ 誰からだ？』

裏には差出人の名義がなく、菜々子の名前のみが花柄に浮き上がっていた。

『買い物は？』

『まだ行ってねえよ。それよりコレ、お前宛てにきてたぞ』

『は？ ……何コレ？』

買い物が済んでいない事が余程気に入らないのか、封筒を文字通り「分捕る」菜々子と、何も言わない大人な俺。

『blue？』

『……あん？ なんだって？』

『JJJJ』

指差した場所には「blue」の文字。あまりに小さすぎて見逃していたようだ。

『ブルー……青？』

なんだ？

『開けてみる』

封を開けると

『キヤッ、何よコレ!』

『ど、どうした!?!』

中は固体とも液体とも言えない「茶色の何か」で汚されていた。

『チョコだな』

『チョコお?』

『バレンタインデー……だっけか?』

『そろそろ梅雨明けよ』

『だよねえ』

封筒の中身はチョコレートだった。夏も間近の暖かい気温により全て溶けきっていたが、板チョコ半個分は入っていたようだ。

『嫌がらせだな』

『誰から?!』

菜々子の奔放な性格上、調べれば色々な人物が浮かびそうだが…

…この場合、一人しかないな

『blueだよ』

アイツしか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0611e/>

---

妊婦の心得

2010年11月6日19時29分発行